



大阪市立大学
工学部同窓会

大阪市立大学工学部同窓会報 第39号（最終記念号）

2025年6月1日発行

同窓会だより

大阪市住吉区杉本 3-3-138

大阪市立大学工学部同窓会

発行人 吉田 稔



大阪市立大学工学部同窓会『同窓会だより』最終記念号 一 目 次 一

同窓会だより最終記念号 写真特集 01

会長挨拶 大阪市立大学工学部同窓会会長 吉田 稔 … 09

祝 辞 10

- 大阪公立大学・大阪市立大学学長 辰巳砂 昌弘
- 大阪公立大学工学研究科長 綿野 哲
- 大阪公立大学校友会・大阪市立大学同窓会会長 岡本 直之
- 大阪公立大学工学部機械工学科同窓会副会長 脇本 辰郎
- 大阪公立大学電気クラブ理事(前会長) 斉藤 寿士
- 大阪公立大学化学バイオ工学科同窓会会長 神門 登
- 大阪公立大学・大阪市立大学建築会会長 松島 清
- 大阪公立大学都市会会長 簗内 弘

大阪市立大学工学部の現況 19

- 大阪公立大学副工学研究科長 山口 隆司

大阪市立大学工学部各学科の現況 20

- 機械工学科 学科長 金崎 順一
- 電気情報工学科 学科長 阿多 信吾
- 電子・物理工学科 学科長 呉 準席
- 化学バイオ工学科 学科長 立花 亮
- 建築学科 学科長 倉方 俊輔
- 都市学科 学科長 西岡 真稔

歴代研究科長からのメッセージ 25

- 多胡 進
- 山田 文一郎
- 東 恒雄
- 濱 裕光
- 大嶋 寛
- 日野 泰雄
- 長崎 健

歴代会長からのメッセージ 32

- 行藤 三男
- 湊 勝比古
- 宮本 万功
- 木村 雅之
- 西口 克彦
- 黒山 泰弘
- 宇野 勝久
- 斉藤 寿士

追悼文／田守芳勝さんを偲んで 吉田 稔 … 39

特別寄稿 40

～同窓会の設立経緯ならびに工学部同窓会事業について
東 恒雄

卒業生からのメッセージ 42

■機械工学科／知的材料工学科

- 坂根 正弘
- 伊藤 博之
- 中尾 隆史
- 田中 秀樹
- 伊藤 和真／折原 伸太郎
- 坂本 真宏
- 橋口 佳実

■応用物理学科／電子・物理工学科

- 柳川 重昌
- 宇佐美 照夫
- 田中 功
- 小島 磨
- 田中 勇
- 小村 慎吾
- 山岡 優

■電気工学科／情報工学科／電気情報工学科

- 森脇 郁朗
- 山口 南海夫
- 南 繁行
- 宮崎 聖
- 桑田 朗子
- 北島 未規
- 安在 大祐

■応用化学科／生物応用化学科／バイオ工学科
／化学バイオ工学科

- 三浦 洋三
- 宜川 克
- 阿部 正男
- 佐藤 絵理子
- 城本 崇広

■建築学科

- 内藤 徹男
- 福島 眞一
- 津村(村田) 雅枝
- 橋本 頼幸
- 滝田 憲作

■土木工学科／環境都市工学科／都市基盤工学科
／都市学科

- 宮本 潔
- 山田 優
- 住吉 正信
- 山中(工藤) 昌子
- 麓 隆行
- 松尾 孝之
- 坂本(石村) 友里絵

回顧録 1960年代後半の市大構内 74

特別企画 座談会 75

資料編 85

- 年 表
- 歴代会長名簿

注記：執筆者の所属・役職は2025年
3月末時点での情報による

同窓会だより最終記念号

写真特集

Photo Gallery





Photo Gallery 01



キャンパス俯瞰



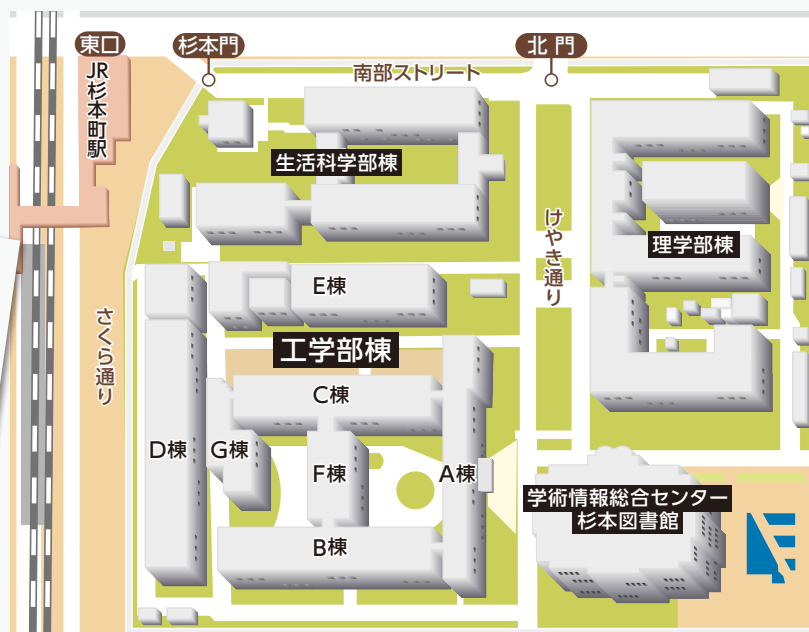
工学部入口



工学部中庭



工学研究科／工学部案内板



理工地区マップ・工学部建物配置図



A棟



D棟



B棟



E棟



F棟



C棟



G棟



F棟から中庭へ



F-001



Photo Gallery 02



大講義室



G棟 中講義室



C棟 講義室



F-001室内



B棟 廊下



B棟 エレベーター前



C棟 廊下



C棟 階段前



F棟 廊下



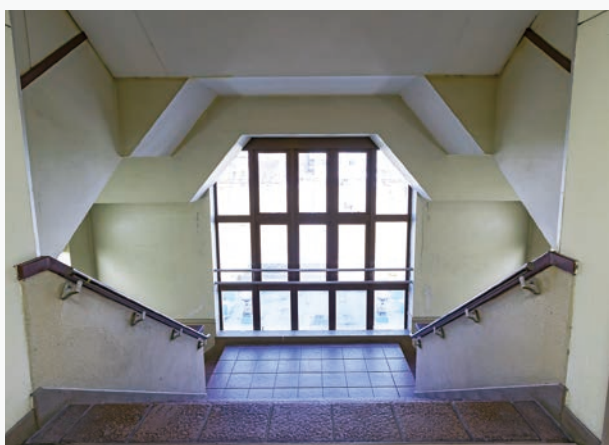
F棟 非常用シャワー



Photo Gallery 03



1号館



1号館内



1号館内 1階



1号館内 階段



1号館内 廊下



1号館内 140周年記念展示室



2号館



A棟と学情（図書館）



陸上競技場



グラウンド



スポーツハウス



屋外プール



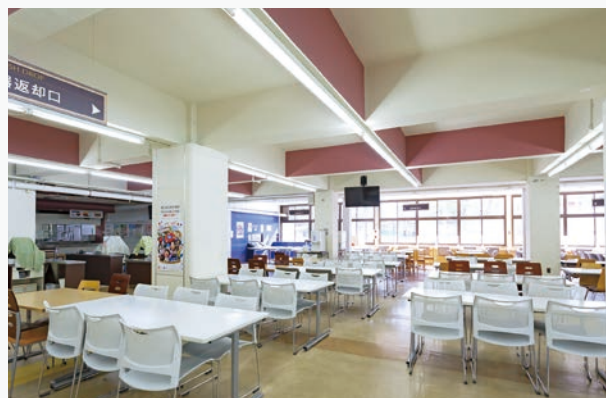
第1体育館



テニスコート



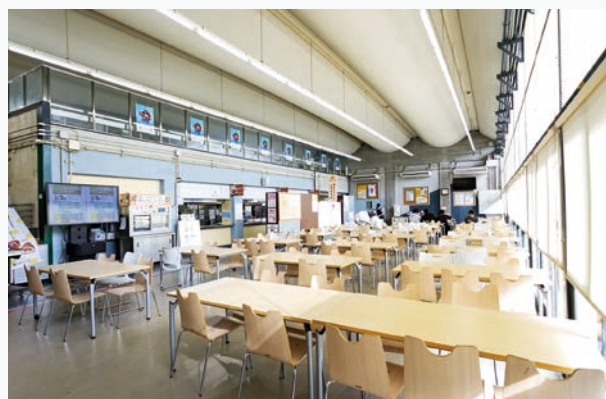
第1学生ホール



第1学生ホール内部



第2学生ホール



第2学生ホール内部



第2学生ホール横テラス



工学部同窓会事務局

これまでの皆さまからのご支援に心より感謝いたします。



会長挨拶

大阪市立大学工学部同窓会会長 吉田 稔 (昭和52年機械工学科卒)



ここに「同窓会だより」最終号（第39号）をお届けすることができましたことを、皆様とともに喜びたいと存じます。

60余年にわたる輝かしい当同窓会の歴史については、他稿に譲り、ここではまず、「同窓会だより」について述べてみたいと思います。「同窓会だより」は、1960年（昭和35年）の同窓会創立後20年経過した1980年（昭和55年）10月に創刊され、爾来、発行できなかった年があったにせよ、45年の永きにわたり、ほぼ毎年発行され続けてきました。ホームページにアーカイブとして残されている過去の「同窓会だより」全号に目を通しますと、総ページ数は本号を入れておそらく約1000ページにもなり、記事本数は1000本を超えられると思われます。ものすごいことだと思いませんか？そして、各学科の様子を紹介する記事や一般会員寄稿記事、特別寄稿記事、同窓会活動報告などがちりばめられており、改めてこの「同窓会だより」が当同窓会の歴史を語る貴重な財産ともいえることが確認できます。何気ないことのようにですが、「同窓会だより」には、創刊以来頑なに守り続けられてきたルールがあることに気づきます。それは、表紙上部の表題部分のスタイルが全号変更なく同じであること、記事には必ず寄稿者の顔写真が付されていることです。創刊以来、誰もこの2つのルールだけは変更しようとしなかったものであり、このことが、学科を超えてその時々当同窓会の活動の様子、母校の様子、同窓生の様子を共有できることに加え、「同窓会だより」が親しみをもって、かつ会員をつなぐ大切なものとして受け入れられ続けてきた理由の一つではないかと思えます。

さて、この「同窓会だより」は、本号で最終号となりました。これは、2024年2月の評議員会にて当同窓

会の本年3月解散が決せられ、60余年の当同窓会の歴史が閉じられることになったことに伴い、第39号を記念誌的な最終号とすべく企画されたことによります。大学関係者、同窓会関係者、一般会員の延べ70名を超える方々から快く玉稿を賜り、ここに「同窓会だより」最終号が完成いたしました。いずれも読み応えがありまた将来に向けた示唆にも富む記事ばかりであり、あらためてご寄稿を賜りました方々に御礼を申し上げますとともに、本号を手にとられた皆様には、是非大切に保存いただき、ときおり読み返していただきたく存じます。また、同窓会だより全号を掲載する当同窓会ホームページは、アーカイブ化されて学科別同窓会のホームページ等から今後も閲覧可能とする予定ですので、ときおり閲覧していただき、当同窓会の歴史を振り返っていただければ幸いです。

当同窓会はその歴史を閉じますが、全ての会員はすでに、大阪公立大学の学科別同窓会（機械工学科同窓会、大阪公立大学電気クラブ、化学バイオ工学科同窓会、建築会、都市会）のいずれかの会員となっており、今後はこれらの新たな学科別同窓会が当同窓会のレガシーを引き継ぎながら、独自の本格活動を通じて、大学の発展やプレゼンスの向上にご尽力いただけるものと期待しております。

おわりに、当同窓会の最後の会長としての役割を与えられたことに感謝し、大学統合からこのかた、様々な苦労や楽しさを共にしてくださった役員・事務局各位、編集委員各位、そして、当同窓会の歴史を形づくってこれ、当同窓会の活動にご理解、ご協力を賜りましたすべての会員の皆様に対しまして感謝を申し上げ、筆を置きたいと存じます。ありがとうございました。



祝 辞

Congratulatory message

記念誌の発行に寄せて

大阪公立大学・大阪市立大学学長 辰巳砂 昌弘



大阪公立大学の学長であるとともに大阪市立大学の学長でもあります辰巳砂です。大阪市立大学工学部同窓会の皆さまには、大学に対し日頃多大なご協力・ご支援を賜り、心より厚くお礼申し上げます。またこのたびの記念誌の発行にあたりましては、誠にありがとうございます。

1960年にスタートした大阪市立大学工学部同窓会は、今年で65年目を迎えられました。この間、35回に及ぶ評議員会はもとより、会員のための講演会、見学会、懇親会など、数々の有益な事業を展開され活発に活動してこられました。当初から工学部全体にわたる組織を構成されたのが大きな特徴で、すべての学科の卒業生、学生が平等に会員または準会員となっておられるため、学科を超えた様々な情報がHPや会報を通じて共有され、市大工学部という大きな集合体の中で会員相互の親睦が図られてきました。15年前の創立50周年時には、記念事業として奨学金制度を創設され、その後学生への支援を継続して頂きました。またコロナ禍の期間においては、困窮し学業継続が困難な学生に対し、工学部と協力して支援事業を展開されました。このように大変有意義な同窓会活動をこれまで支え、維持してこられた諸先輩、関係者の皆さまに敬意を表するとともに、市大学長として心から感謝申し上げます。

さてご承知のように、大学の方は、2022年4月大阪市立大学と大阪府立大学が統合し、大阪公立大学がスタートしています。直近の1年を振り返らせていただきますと、昨年3月には新・旧大学合同の春の学位記授与式を開催し、4000人を越える卒業生・修了生を送り出しました。本年3月には旧大学が主体となる最後の学位記授与式を実施する予定です。また昨年4月には大阪公立大学として3回目の入学式を、大阪府知事、市長ご臨席のもと大阪城ホールで開催し、約4400人の入学生をお迎えしました。银杏祭、白鷺祭などの学園祭は、コロナ禍前とほぼ同じ規模で開催できるようになりました。昨年4月には中百舌鳥キャンパスの工学新棟はじめ杉本キャンパスの理学新棟など新しい建物が次々とオープンしており、森之宮のメインキャンパスについても、本年9月からはすべての学部新入生がここから学びをスタートする準備を整えつつあります。

大学運営におきましては、昨年度、国の「地域中核・特

色ある研究大学強化促進（J-PEAKS）事業」に本学が採択され、50億円超の支援を受けることになり、大学改革を推進する大きな足がかりを得ました。本学がこの事業で目指しているのは「イノベーションアカデミー事業の推進によるマルチスケールシンクタンク機能を備えた成熟都市創造拠点の構築」ですが、今後、産学官民共創に対して力強く取り組みながら、わが国最大の公立総合大学となった本学の研究・教育環境整備を着実に進めたいと思っています。中百舌鳥キャンパスには、本年4月、イノベーションアカデミー事業のハブ施設としてスマートエネルギー棟がオープンします。旧市大工学部の研究室の皆さんは、ここ中百舌鳥の工学新棟を中心に順次集約されつつありますので、市大工学部同窓会の皆さまにも、この地で展開される産学官民共創のリビングラボへの参画を大いに期待いたしております。

同窓会に関しましては、昨年11月に、大阪公立大学として3回目となるホームカミングデーを開催しました。杉本・中百舌鳥それぞれのキャンパスで、様々に趣向を凝らして卒業生の皆さまをお迎えしました。今年は、開設直後の森之宮キャンパスにて開催できればと思っています。

工学系同窓会の今後のあり方について、市大・府大の関係者で協議された結果、大阪市立大学工学部同窓会はいったん解散し、市大卒業生が在籍する学科同窓会（機械工学科同窓会、電気クラブ、科学バイオ工学科同窓会、建築会、都市会）が継続して事業実施することになったと伺っています。今後、皆さまが参画されるこれらの学科別同窓会の活動が活性化し、それを通じて大阪公立大学のプレゼンスが向上し発展することを期待しています。引き続きご協力賜りますと有り難いです。新大学では、今のところ工学部全体としての同窓会は立ち上げないと伺っていますが、市大工学部同窓会のこれまでの活動の意義に鑑みますと、今後は、学科別同窓会の活動を中心に置きつつも、工学部全体としての同窓会組織の創設を視野に入れておかれることも意味があるのではないかと思います。

最後になりますが、皆さまの益々のご健勝とご多幸を祈念し、本学への一層のご協力・ご支援をお願いして、学長としてのご挨拶とさせていただきます。

大阪市立大学工学部同窓会の皆様へ

大阪公立大学工学研究科長 綿野 哲



大阪市立大学工学部同窓会の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。工学部同窓会報39号（最終号）「同窓会だより」の発刊にあたり一言ご挨拶申し上げます。

ご存じのように、2022年4月1日に大阪市立大学（市大）と大阪府立大学（府大）が統合され、「大阪公立大学」が誕生しました。新大学は12学部から構成され、学部学生・大学院生合わせて約16,000人の学生を擁し、全国の国公立大学では東大、阪大に次ぐ3番目の規模となります。

工学部・工学研究科は、4,000名を超える学生を有し、本学最大の部局となり、全国でも最大規模となっております。工学部の構成は、市大工学部の6学科と府大工学域の10課程が統合され、新たに12学科体制を取っております。また、大学院は、市大工学研究科の4専攻6分野と府大工学研究科の6専攻9分野が統合され、7専攻12分野の構成となっております。お互いの大学にない学科が増えたことで、工学に関わるあらゆる領域の課題に対応できる充実した体制となっております。

統合当初は、杉本キャンパス（市大）と中百舌鳥キャンパス（府大）に分かれておりましたが、2024年4月に中百舌鳥キャンパスに工学新棟（B7棟）が完成し、杉本キャンパスから機械工学科、電子物理工学科および電気電子システム工学科の3学科が工学新棟に移転いたしました。残りの建築学科、都市学科および化学バイオ工学科は2028年4月に中百舌鳥キャンパスに移転し、工学部・工学研究科の

移転が完了いたします。なお、工学部の全学科が中百舌鳥キャンパスに集約される時期に合わせ、工学部・工学研究科の再編を実施する予定です。

統合してすぐに再編かと思われるかもしれませんが、両大学の工学が統合することにより、教員の人数が40名を超える巨大な学科（機械、電子物理）が誕生する一方で、教員の人数が極端に少ない学科（航空、海洋、建築など）があり、人数のばらつきが極端であります。特に、人数の少ない学科では、教育体制を維持するために新規教員の採用が必要ですが、全学的な人員削減令により、新規採用が困難となっております。また、同じような研究テーマを持つ研究グループが複数の学科に点在するなど、学科構成が曖昧になっています。このような状況を打破するために、研究テーマや研究領域の近い研究グループを集約し、また、人数の少ない学科は他学科と統合し人数を確保するなど、単なる統合ではなく、世界で戦える“最強の学科”、“最強の工学”を作ることを旗印に、抜本的な改革（再編）が進行中です。2028年4月の完成をご期待ください。

末筆になりますが、大阪市立大学工学部同窓会の皆様におかれましては、大学名や学科名が消滅することにより一抹の寂しさを感じておられると思います。新しい世代で戦える新学科を生み出すプロセスとご理解いただき、引き続きご理解・ご支援を賜りましたら幸いです。どうぞよろしくお願い致します。



同窓会だより最終号に寄せて

大阪公立大学校友会会長

大阪市立大学同窓会会長 岡本 直之



大阪市立大学工学部同窓会だより第39号のご出版、誠にありがとうございます。本号をもって最終号となるとお聞きしており、たいへん寂しく、又残念な気持ちであります。

さて、大阪市立大学工学部同窓会は1960年（昭和35年）に発足され、その後60数年の長きに亘り活動してこられました。その間、昭和40年代に吹き荒れた大学紛争の影響で停滞した時期もあったようですが、卒業生間の交流や卒業生と在学生との交流、また在学生支援を中心に活発な活動を展開してこられたことにまずもって敬意を表したいと存じます。

この度、大阪府立大学工学系学科同窓会との協議の結果、当面は各学科別の同窓会を中心に活動され、貴同窓会は2025年3月をもって閉じられるとのことですが、大阪市立大学同窓会（以下「全学同窓会」という）も同様に2024年11月に開催した臨時総会において解散を決議しました。そのため、全学同窓会では臨時総会と同日付で清算委員会を設け、会の清算に向けて活動をスタートしたところです。貴会におかれても、残余資金の処理、関連組織との関係再構築、ホームページを含めた既存資料のアーカイブ化等、苦心されていると思いますが、本号が出版される頃にはそれらの処理が終了していることと存じます。

工学部同窓会は発足後「同窓会だより（会報）」や「工学部同窓会名簿」の発行、また工学部同窓会奨学金制度の創設に加え、卒業生らの交流の場として工学部学術情報交流センターを開設されるなど、工学部同窓生の各学科を超えた横のつながりの礎を築くと共に、工学部学生への支援を実践してこられました。また、工学部同窓会の運営では、年限を決めて各学科の卒業生で会長職を持ち回りとするなど、合理的な運営がなされてきたことは今後の同窓会活動の参考になるもの

と存じます。さらに、工学部同窓会長には全学同窓会の副会長を担っていただき、会の運営に貴重なご意見を賜るとともに各種の行事にご支援頂きましたこと等、改めて厚く御礼申し上げます。

全学同窓会は府大校友会と一体となり、大阪公立大学校友会として再出発しましたが、制度や体制、実施事業等、会の運営はすべてにおいて、まだまだよちよち歩きの段階であります。そんな中ではありますが、大学との連携を深めるため大学本部機能が森之宮キャンパス近くに移行するのに合わせ、校友会においても杉本町と中百舌鳥に別れていた事務局を一本化し、森之宮に移転いたしました。また、大学、教育後援会、校友会3者により「大阪公立大学支援協議会」を設立、在学生支援を中心に大学へのサポートについて協議しています。さらに、設立3年目の今年度には、両大学の地域同窓会・支部ならびに学部・学科同窓会関係者や校友会理事で構成した検討部会で協議し、校友会での地域同窓会・支部の在り方をまとめた「大阪公立大学校友会地域支部規程」と関係団体への支援の方針をまとめた「大阪公立大学校友会支援金取り扱い要綱」を制定しました。工学部同窓会の皆様も地域支部や学科同窓会に関係されていると思いますのでご活用いただければと存じます。なお、これらの制度や取り組みをさらに発展させるとともに新たな校友会事業を展開していかなければならず、そのためには先進的な知見に基づき、熱意をもって同窓会の運営を進めてこられた大阪市立大学工学部卒業生の皆様のご協力が不可欠です。今後ともよろしくお願い申し上げます。

結びに「同窓会だより39号（最終号）」が工学部同窓会会員の皆様の『思い出』になることをお祈りするとともに、これまでのご支援に対し心より深謝申し上げます、最後の挨拶とさせていただきます。

祝 辞

大阪公立大学工学部機械工学科同窓会副会長 **脇本 辰郎** (1991年機械工学科卒)



長年にわたり大阪市立大学工学部の同窓生のネットワークの中心として、卒業生間の交流や情報交換の促進の他、在学生への支援などの活動をなされてきた工学部同窓会が、その歴史に幕を下ろされることとなりました。まずは、その長きにわたる活動と、多くの方々のご貢献に対し、心からの敬意と感謝の意を表します。

私は開学した大阪公立大学工学部機械工学科の同窓会の副会長を拝命しており、さらに公立大教員でもあります。一方で大阪市立大学工学部機械工学科の卒業生でもあり、さらに市立大教員でもありました。市立大教員であった時には、直接同窓会活動に関わることはありませんでしたが、同窓会のご活動を身近に目にしておりました。入学時に支給が確定する奨学金やコロナ禍での学生への経済支援、同窓会主催の工場見学会など、常に学生の立場に立った支援活動について企画・実行しておられることを肌で感じながら、大学教育に携わっておりました。また、一人の卒業生として同窓会報にて同窓生の近況を窺い知ることは、年度末の大きな楽しみでもございました。そのような同窓会や愛着ある大阪市立大学そのものの歴史が終わることは、大変残念です。同窓会員の皆様方も、同窓会報の本最終号をご覧になって、同じ寂しさを感じておられることと思います。しかし、大阪市立大学はただ単に終焉を迎えるわけでは無いことにも目を向けて頂きたいと思います。

大阪市立大学、大阪府立大学ともに約140年の歴史を持ち、教育・研究の両面で確かな実績を残しておりましたが、統合による規模拡大により、イノベーションの創出や社会貢献、都市問題の解決、国際競争力のある成果発信が促進できるものとして、2022年度に大阪公立大学が開学致しました。資源、エネルギー、環境、気候、災害、紛争等に関わる社会問題が噴出し、

大学の在り方や社会への関わり方が問われています。これらの難局を乗り越えるための知恵を創出する新たな場として、また大阪の都市機能をさらに発展させる場として、大阪公立大学が開学しました。

大学の統合・再編に伴い、母校の名称が変わり、時代の変化とともに市立大同窓会もその使命を終えることになりましたが、それは決して「終わり」を意味するものではありません。大阪市立大学が培ってきた精神と、それを支えてきた同窓会の想いは、新たな形で未来へと受け継がれます。市立大工学部同窓会の会員の皆様は公立大工学部の各学科同窓会の会員となります。大学の歴史が変わっても、私たち卒業生一人ひとりの胸には、大阪市立大学の誇りが変わらずに息づいています。また、ここで築かれた人と人とのつながりは、これからも絶えることなく続きます。さらに今後、皆様の後輩が公立大より巣立っても参ります。そのような人とのつながりや学生を支える活動をこれからは公立大学同窓会が行って参りますのでご支援頂ければ幸いに存じます。

機械工学科は拠点を杉本キャンパスのC, E, G棟から中百舌鳥キャンパスの新棟に移しました。キャンパス入口から新棟まで、距離があるのが難点ではありますが、環境の良い施設で新たなスタートを切りました。府立大・市立大ともに歴史ある大学で、それぞれの校風・文化がありました。今、それらを昇華した新たな礎を築くべく日々、両大学の教職員が互いの理解を深めながら、教育・研究活動を行っています。同窓生の皆様も機会がございましたら、新大学のキャンパスに是非お立ち下さい。

最後に、大阪市立大学同窓会の長年の歩みに深く感謝申し上げますとともに、会員の皆様のさらなるご活躍とご健康を心よりお祈り申し上げます。

大阪公立大学電気クラブ 祝辞

大阪公立大学電気クラブ理事・前会長 齊藤 寿士（昭和44年応用物理学科卒）



大阪公立大学電気系同窓会（後に大阪公立大学電気クラブに改名）は、市大・府大の統合に伴い、市大工学部電気系2学科（電気情報工学科と電子・物理工学科）と、府大工学域3課程（電子物理工学課程、情報工学課程、電気電子システム工学課程）のそれぞれの同窓会組織を統合して2022年4月に発足しました。私は、電気系同窓会初代会長（2022年—2023年）を務めました齊藤です。

このたびの市大「工学部同窓会だより第39号（最終号）」発行に対し祝意を表します。同時に、39年間続いた同窓会だよりがその歴史に幕を下ろすことは、誠に残念で有り、寂しさを禁じ得ません。しかし大阪公立大学は、中百舌鳥キャンパスに工学新棟がオープンし全工学部が集結、また森ノ宮メインキャンパスが本年9月に新校舎としてオープンし全ての学部新入生を受け入れるなど、着々と新大学の体制が整ってきています。一卒業生として頼もしく、大いに期待しています。

さて、市大・府大工学系同窓会の統合を図るために、2020年から両大学同窓会代表者による本格的な協議を開始しましたが、両大学の工学系同窓会組織・形態が大きく異なっていること、即ち、市大では全工学部卒業生のための同窓会組織として活動しているのに対し、府大では各学科別同窓会（計10組織）が独自に活動していました。このため一つの同窓会組織を編成することが困難で有り、協議の結果、新大学工学部の同窓会組織として、各学科単位の同窓会を発足させる事になりました。

両大学工学部が統合されても殆どの学科は重複していませんが、電気系学科、機械工学科は両校ともに存在し、学科別同窓会を設立するためには、両校の当該学科同窓会と統合に向け協議する必要がありました。

大阪公立大学工学部電気系学科は、従来の市大電気系2学科・府大電気系学科3課程を包含する形の3学科となるので、統合後の新同窓会もこれに倣い、市大・

府大それぞれの電気系同窓生・在校生・教員で構成する「大阪公立大学電気系同総会（後に、電気クラブに改訂）」を設立しました。

新同窓会設立にあたり、会則を制定し、両大学全卒業生の各年度・各学科代表による第1回評議員会を開催し、2022年9月設立が承認されました。

電気クラブは市大・府大の卒業生で構成するので、お互いを理解し合えるように、「統合から融合へ」を目指して活動しています。主な活動は、従来、市大・府大で活動してきた会員支援事業を引き継ぐ形で種々の制度を制定し、支援を行っています。

以下に現在の電気クラブの主な活動内容を記します。

- ・会則をはじめとする各種規定集の策定
- ・ホームページの立ち上げ、更新
- ・会報誌の発行
- ・「電気クラブ賞」「新入生歓迎行事支援」「卒業記念行事支援」「国際会議発表支援」等の諸支援制度を設け、活動を実施
- ・同窓会の事務局を中百舌鳥キャンパス内に設置
- ・講演会および会員懇親会の実施

等です。

最後になりますが、市大工学部同窓会では、新型コロナの流行で貧窮する工学部在校生のために学部を通じて金銭的な支援をしたり、生活困難者の新入生に対し奨学金制度を設け少しでも学業に専念できるよう手助けするなど、工学部同窓会が一体となって取り組みました。

大阪公立大学学科別同窓会においても、市大工学部同窓会の共助の精神を受け継いでいただくことを期待しています。また統合前には、「工学部学科別同窓会を設立し、工学部各学科同窓会の緩やかな連合体として大阪公立大学工学部同窓会（仮称）を設立する」、構想について協議していましたが、今後各学科同窓会で引き続き検討いただくことを期待して終わります。

祝 辞

大阪公立大学化学バイオ工学科同窓会会長 神門 登 (1970年応用化学科卒)



市大工学部「同窓会だより」の最終号の発行にあたり、過去の記事を幾つか読み直してみた。これまでの活動内容や往時の学部が読み取れ誠に感慨深い。近年の活動のなかでは学生への支援の点から、奨学金制度と新型コロナウイルス感染症拡大による困窮学生への支援活動が印象深い。組織力が生かされた有意義な活動であったと思う。

これを機に、自分と同窓会等との関わりを少し述べたい。応用化学科に入学し、課外活動では漕艇部に入部、卒業研究は井本立也研究室で重合反応工学を学んだ。卒業後、民間企業に就職し、その後は大学との関わりは殆ど無かった。50歳を過ぎてから、漕艇部OB会の運営に関わり、これが縁となって学友会、大阪公立大学体育会OB会連合、工学部同窓会、化学バイオ工学科同窓会と同窓会組織と関りが続いている。多くの方々との出会いから沢山のことを学び、楽しい時間を過ごすことが出来た。感謝感謝である。

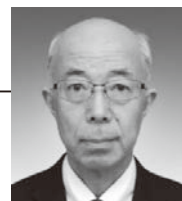
さてここで化学バイオ工学科同窓会のことに触れたい。大学統合を機に、同窓会が設立され、2022年度から活動が開始された。理事のなり手が少なく、諸々の

事務作業に手間取りながらも、ウェブサイトの立上げ、学生向けの講演会の開催など徐々にではあるが、学生、教員との交流活動がスタートした。工学部同窓会と比べて小世帯で、皆化学を学び、化学に関連した仕事をしていることから、コミュニケーションを取り易い利点がある。今後はこの利点を生かしつつ、会報の発行や卒業生をも含めた交流を活発化させ、学生への支援（表彰、奨学金貸与など）など化学バイオ工学科の発展に寄与出来たらと考えている。

学生数の減少、国の大学に関する政策等、わが校を取り巻く環境が大きく変化している。我々が学び、青春を過ごした大学が、益々その存在価値を維持し高めていくことを多くの卒業生が望んでいるであろう。米国の大学では卒業生の大学への支援が大きな役割を担っていると聞く。今後の工学部の同窓会活動は学科別同窓会が担って行くことになるが、何時の日か工学部同窓会が設立され、夫々の特徴を生かした活動を通じて大学を支援し、大学が発展してゆくことを祈念して止まない。

感謝とお祝いの言葉

大阪公立大学・大阪市立大学建築会会長 松島 清（昭和50年建築学科卒）



大阪市立大学工学部同窓会（以下、工学部同窓会という）は昭和35年（1960年）11月3日に発足され、その後60数年の長きに亘り、市大工学部同窓生のよりどころとして活動されてこられました。

この度、大学の統合を受けて、令和7年3月に工学部同窓会としての役目を全うされて解散される運びとお聞きしております。

工学部同窓会は、各学科の同窓会・卒業生を経糸とすると、緯糸の役割を果たされてきたと思います。工学部同窓会が無かりせば、卒業した学科以外のことには余り関連や繋がりがなく、同じ大学の工学部同窓生と言っても、中々ピンとこない状況にあったと思われる。そんな中、工学部同窓会は発足後、工学部同窓会報「同窓会だより」の発行（創刊号（1961年）～38号）や工学部同窓会名簿の発行（1号～10号）、また工学部同窓会奨学金制度の創設等と、工学部各学科同窓生の横のつながりの礎を築くと共に、工学部学生への支援も実践されてこられました。その長年に亘るご功績には唯々頭が下がります。

特に「同窓会だより」のお陰で、他学科の動向把握や、こんな先輩方がおられたのかといった、思わぬ発見があったことも屡々でした。建築会にとっても「同窓会だより」は、建築会活動を他学科の卒業生の方々にお伝えする貴重な媒体にもなっていました。

また、工学部同窓会の運営に当たられては、歴代会長を工学部創生期の6学科にて持ち回りとする等、極めて合理的且つ一体的な運営がなされており、まさしく各学科が巧くまとまった工学部同窓会という印象を受けておりました。

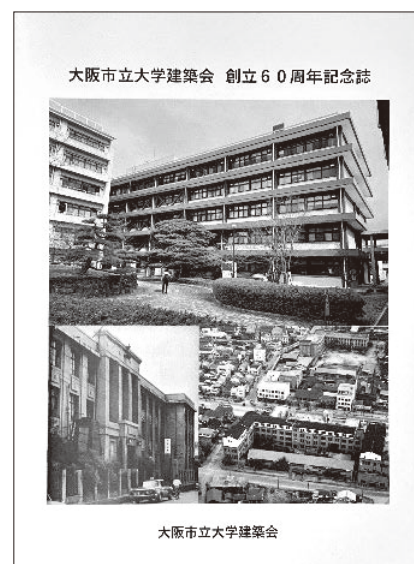
その貴重な役割を担っていた工学部同窓会がこの度解散され「同窓会だより」も今回をもって最終号となるのは、誠に残念な思いではありますが、見方を変えれ

ば、その役割を見事に全うされたということで「ありがとうございました&おめでとうございます」との言葉を贈らせて頂きたいと思います。

折角の機会ですので、大阪公立大学・大阪市立大学建築会（以下、建築会という）について紹介も兼ねて報告をさせていただきます。建築会は工学部同窓会発足から半年遅れの、昭和36年（1961年）4月30日に発足しております。恐らく、工学部同窓会と同様、建築学科卒業生の間で、同窓会（建築会）を設立しようとの機運が高まったものと思われます。

その建築会は2021年4月に創立60周年を迎えました。会員は総勢2,500名を超え、各界各分野で幅広く活躍されています。創立60周年に際しては、会員の皆様の多大なご協力の下、創立60周年記念事業として「記念大会」を実施するとともに「記念基金」を創設しました。合わせて大阪市立大学時代の記録として「大阪市立大学建築会 創立60周年記念誌」（写真：A4版180P、オールカラー）の発行も行いました。会員の皆様の絶大なご協力の下、編集したもので、会員の皆様にも大変好評を頂いております。

この度の工学部同窓会の「同窓会だより39号（最終号）」が、同様に工学部同窓会会員の皆様にご好評頂けるものとなることを祈念し、感謝とお祝いの言葉とさせていただきます。



大阪市立大学工学部同窓会解散に際して

大阪公立大学都市会会長 藪内 弘 (昭和56年土木工学科卒)



工学部同窓会事務局から、同窓会だより最終号に、解散にあたっての祝辞の寄稿依頼があり、ハタと困った。困った理由の一つは長い歴史のある工学部同窓会が解散してしまうことは、残念でもあり、寂しい気持ちにして祝辞の言葉が思いつかなかったこと。また、自分自身、現役時代にはお恥ずかしい話であるが、工学部同窓会活動には積極的に参加しておらず、毎年会報を読む程度の消極的な関わりしかなく、同窓会活動の内容について紹介するなどして、会員諸氏に読んでいただける文章を書く自信がなかったためである。

そこで、まず工学部同窓会活動の記録ともいえるべき“同窓会だより”を読み直してみることにした（同窓会のホームページでバックナンバーを閲覧できます）。工学部同窓会は、理工学部から工学部が独立した昭和35年に、同窓生の親睦、工学部を支援と発展に寄与することを目的として設立され、60年以上の歴史を持っている。“同窓会だより”は昭和55年第1号から今回で39号を数えるまで、同窓生のコミュニケーションの場となり、学内諸行事、状況を会員間で共有することを目的に、ほぼ毎年発刊された。

読み進めると、今はもう鬼籍に入ってしまった先輩、先生方々の懐かしい顔写真とともに、含蓄のあるお言葉や、時代時代の工学部や学科運営の課題など寄稿されていて、まさに工学部とその同窓生が歩んできた本音の記録ともいえると思う。

会報を読んで2, 3の内容を紹介すると、同窓会事業として、経済的に恵まれない学生、研究者のための奨学金制度の創設と運用に取り組んでいたことがわかる。私が在学していたころは、大阪市立大学は全国的にも学費が一番安く、貧乏していても学べる大学として有名であったし、学費値上げ反対や、奨学金制度の活用にも積極的だった。そういった学風の中で、学生の質

や経済状況は変わったが、同窓会としても2006年から後期博士課程への修学援助金や2019年から同窓会設立50周年記念事業として奨学金制度を創設して運用していたことは特筆することであると思う。

また、寄稿文の中で、2001年12月発行の17号には、その年、土木工学科を退任された西村昂先生（本学名誉教授、土木計画学）の寄稿文がある。引用させていただくと、「前略…効率化という時代の流れに逆らいようもなく…中略…市大と府大の合併問題も視野に入れて準備しておく必要があると思われ、さらにその先には阪大との合併も想定しておく必要があるのではないかと思います。…以下略」とあり、両大学統合の20年も前に現在の状況を予言するかのような言葉を残されていて、寄稿文では先生は大学の形はどうであれ、当面は大学院教育の充実が最優先であると主張されている。もの静かな語り口調の先生でしたが、深く物事と将来を見据えておられたと感心した次第である。

大学の同窓会活動は、全学—学部—学科—研究室という4層の構造をなしているが、今回工学部同窓会が解散すれば、今後の公立大学工学部同窓会をどうしていくかにもよるが、少なくとも今まで工学部同窓会が果たしてきた、紹介した会報や事業などの役割の一部を学科同窓会が担わないといけないのではないかと考える。

都市会としても大阪市立大学工学部同窓会のレガシーを継承しながら、大阪公立大学においても都市学科のみならず工学部全体の動きや状況なども都市会会員と共有していけるよう、活動の幅を広げ充実していきたいと思う。最後に、これまで工学部同窓会を担ってこられた役員、事務局の皆様にお礼を申し上げて解散にあたっての言葉としたい。ご苦労さまでした。

大阪市立大学工学部の現況

工学部・工学研究科の現状と今後

大阪公立大学副工学研究科長 教授
山口 隆司



工学部同窓会会員の皆様、いかがお過ごしでしょうか。日頃から、工学部・工学研究科の教育・研究活動をはじめ、多方面にわたり、ご支援を賜り、誠にありがとうございます。構成員を代表して、厚くお礼申し上げます。

皆様、ご存知のように、2022年4月に大阪市立大学と大阪公立大学が統合し、大阪公立大学となりました。現在、まるっと、3年を迎え、本年4月には初めての4年生が2026年3月に卒業し、新大学としては初めての卒業生が誕生することになっています。まさに、統合の産みの苦しみを乗り越え、新たな第一歩を大きく踏み出す時に来ています。われわれ、教員も「これからが真価を問われる大事な時期」と認識し、緊張感をもって対応しているところです。

同窓会の皆様方が慣れ親しんで来られた、杉本キャンパスの工学部棟にも大きな変化がありました。中百舌鳥キャンパスに工学新棟（B7棟）（写真）が完成したことで、2024年4月に機械工学科、電子物理工学科、電気情報工学科は中百舌鳥キャンパスに移転となり、杉本キャンパスには、化学バイオ工学科、建築学科、都市学科の3学科のみとなっています。私は都市学科に所属していることから杉本キャンパスに勤務しておりますが、かつてのキャンパスの賑やかさは減り、少し、学生さんの姿もかつてより少なく寂しい感じとなっています。工学部・工学研究科は、2028年4月に中百舌鳥キャンパスに集約されることになっています。従いまして、この杉本キャンパス工学部棟での教育・研究活動も2028年3月までと、まだ先のようにありますが、お別れの時期がだんだん近づいております。

大阪市立大学と大阪府立大学のそれぞれの工学部・工学研究科が大阪公立大学の工学部・工学研究科として一つとなって発足するために、多くの苦労がありましたが、新大学の新工学として、学界、産界、官界、そして、もっとも重要な学生さんといったステークホルダーの皆様から信頼される、国際的にもプレゼンスが高い工学部を作るという目標のもと、教職員、一丸となって頑張っており、新大学の工学部のウェブをご覧いただければ、これまでとは違った大阪公立大学工学部・工学研究科の一端をご理解いただけるかと存じます。

大阪公立大学工学部・工学研究科では、綿野工学部長・研究科長のもと、「最強の工学」を旗印に、それを実現すべく、様々な検討を行い、アクションを起こしています。市大工学と府大工学が融合した強みとして、フルラインナップの12学科（航空宇宙工学科、海洋システム工学科、機械工学科、建築学科、都市学科、情報工学科、電気電子システム工学科、電子物理工学科、応用化学科、化学工学科、マテリアル工学科および化学バイオ工学科）を有し、実社会で求められる様々な工学的問題の解決に確実に貢献できる体制となっています。現在は、フルラインナップのリソースを最大限に活用し、国際的プレゼンスの向上、先進・先端研究拠点の整備、都市シンクタンク機能の拡充、トップレベル学生（留学生を含む）の確保を目指し、現組織の改変も含めた大胆な検討を行っています。サステナブルに発展していくためには、サステナブルな改善が不可欠であり、日々改善のもと、頑張っています。

昨今、大学に求められる役割、機能は多様化していますが、工学としては、産業界へ高度な職業専門人材の供給と研究成果の社会実装は最も重要な役割であり、それは普遍です。これには、実際に社会で活躍されている同窓生の皆様からのご支援、そして皆様方との交流が不可欠であり、最も重要と考えています。同窓生の皆様とともに、「最強の工学」を目指して、大阪公立大学工学部・工学研究科をより一層発展させ、市大・府大時代を凌駕するような公大工学を作っていきたいと考えております。叱咤激励大歓迎です。引き続き、ご支援賜りますようお願い申し上げます。

最後になり、大変恐縮ですが、同窓生の皆様のますますのご発展、ご活躍を心からお祈り申し上げます。



工学部新棟（B7棟）

大阪市立大学工学部各学科の現況

機械工学科の近況

機械工学科 学科長
金崎 順一



卒業生の皆様には益々ご健勝のことと拝察申し上げます。平素より本学科の教育研究活動に格段のご支援とご理解を賜り、心より感謝申し上げます。本稿におきまして、2023及び2024年度における市大機械工学科の状況についてご報告させていただきます。

卒業生の進路状況につきましては、2023年度末に55名が大阪市立大学工学部機械工学科を卒業しました。内42名は大阪公立大学大学院、1名が他大学大学院の博士前期課程へと進学し、残る12名の学生は様々な分野の企業へと就職いたしました。2024年度には、大阪市立大学機械工学科に入学した最後の学生が最終学年を迎え、卒業研究に日々励んでおります。

次に教員の異動についてご報告いたします。2023年度4月に三好英輔先生が材料物性工学研究グループの講師として着任されました。そして、同年度末に、同研究グループから2名の教員が転出されました。教授として学科の教育・研究及び大学運営にご尽力された多根正和教授は大阪大学大学院工学研究科の教授として、また、東野昭太助教は、ブリティッシュコロンビア大学（カナダ）化学部門のポストドクトラルフェローとしてそれぞれ異動されました。現在は、19名の教員にて市大機械工学科の教育・研究を推進しております。

次に、教員及び学生の受賞についてご報告させていただきます。熱プロセス工学研究グループ伊與田教授が、2023年8月に日本食品工学会研究賞を、2024年には日本塗装技術協会論文賞（2023年度）を受賞いたしました。また、同グループ増田勇人講師は、「攪拌を基軸としたアイスクリームのフリージングに関する工学的研究」に対して、一般社団法人日本食品工学会より奨励賞（2024年8月）を受賞いたしました。さらに、同研究グループ藤本恵美子助教（クロスアポイントメント制度・日立造船（株）兼務）が2024年8月に一般

社団法人技術同友会主催第10回女性技術者育成功労賞を受賞いたしました。この賞は、女性技術者の活躍を推進・支援するために、女性技術者の育成に顕著な成果をあげられた個人や組織の功績をたたえる表彰制度です。学生表彰については、一般社団法人日本機械学会が日本国内の大学院機械工学系及び4年制大学機械工学科の当該年度卒業者で、人格、学業ともに最も優秀であると認められた方々に、それぞれ、三浦賞及び畠山賞を授与しています。2023年度には、和田光生君が三浦賞を、星加拓海君が畠山賞を受賞いたしました。また、中崎大雅君が、2023年度自動車技術会の大学院研究奨励賞を受賞しましたことをご報告いたします。

最後に、キャンパスの変更についてご報告いたします。2022年に大阪市立大学と大阪府立大学が統合し、国内最大規模の公立総合大学が誕生いたしました。統合後、中百舌鳥キャンパス（旧大阪府立大学キャンパス）内に工学新棟（B7棟）の建設が進められ、2023年末に開設されました。それに伴い、市立大機械工学科教員の研究室は順次、長年住み慣れた杉本キャンパスを離れ、中百舌鳥キャンパスに移転いたしました。2024年度からは新しい学舎にて研究・教育活動を開始しております。新棟はキャンパス内の府大池近くに位置し、春には池周辺に植えられた桜の木々が美しい花を咲かせます。同窓会の皆様におかれましては、ぜひ足をお運びいただければ幸いに存じます。

2022年の大学統合に伴って、大阪市立大学機械工学科は大阪府立大学機械工学科と学科統合し、2024年度には大阪公立大学機械工学科として43名の教員で、科学技術力や産業競争力を備えた人材の育成や最先端研究によるグローバルな競争を展開しております。今後、機械分野の基本的な研究領域を深化させつつ、新しい研究分野の人材や技術も取り入れ、教員・学生全

員で大阪公立大学機械工学科の発展に尽力してまい
る所存です。皆様にはこれまで同様、本大学における研
究・教育に対しても、倍旧のご懇情を賜りますと幸甚

です。末筆ながら、皆様の益々のご活躍をお祈り申し
上げます。

電気情報工学科の近況

電気情報工学科 学科長
阿多 信吾



卒業生の皆様におかれましては、ますますご健勝の
こととお慶び申し上げます。また、平素から電気情報
工学科への種々のご支援をいただき厚くお礼申し上げ
ます。

2024年度は、大阪市立大学として最後に入学した学
部生（2021年度入学）がいよいよ卒業する年となりま
した。新型コロナウイルスによる難局を乗り越え、無
事卒業研究までたどり着いた学生はとても遅く見え
ます。2024年4月に中百舌鳥キャンパスに新たに新棟
（B7棟）が竣工し、電気情報工学科のうち、大阪公立
大学工学研究科（電子物理系専攻、電気電子系専攻）
に所属する教員・研究室は中百舌鳥キャンパスへと移
転したことから、電気情報工学科は所属研究室により
2つのキャンパスに分散して活動することになりました。
なお、電気情報工学科のうち情報学研究科（基幹
情報学専攻、学際情報学専攻）に所属する教員・研究
室については、引き続き杉本キャンパスで活動を継続
する予定です（森之宮キャンパス1.5期完成のタイミ
ングで移転）。

教員人事については、今年度は新たな転入・転出は
ありませんでしたが、2025年3月をもって中島重義准

教授がご退職されます。中島先生の長年にわたる本学
科へのご貢献に心より感謝申し上げます。

学生の進路についてですが、電気情報工学科の学生
の多くは大阪公立大学の大学院（工学研究科、情報学
研究科）へ進学、就職についてもデジタル・情報分野
へのニーズの高さから堅調であったように思えます。

2025年度は、いよいよ大阪公立大学の工学部1期生
が卒業します。また、10月には森之宮キャンパスが開
学し、2025年度の新入生は後期から新しいキャンパス
で授業が始まります。大阪市立大学としての活動は、
一部学生を残すのみとなってしまいますが、最後の卒
業生・修了生を輩出するまでは引き続き教育環境を提
供していきたいと思えます。また大阪公立大学では、
大阪市立大学時代の学生への丁寧な教育・指導するマ
インドを継承しつつ、充実した教育研究活動を行って
いきたいと考えております。

最後に、卒業生の皆様のご健勝と益々のご活躍を祈
念いたしますと共に、大阪公立大学共々引き続き変わ
らぬご支援、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

電子・物理工学科の近況

電子・物理工学科 学科長
呉 準席



卒業生の皆様におかれましては、平素より工学部及
び工学研究科の活動運営に多大なご協力、ご支援を受
けております。ここに改めて感謝を申し上げます。

電子・物理工学科は2023年12月から2024年3月末
まで期間中にすべての研究室が杉本キャンパス工学部
B棟から中百舌鳥キャンパスの工学部新棟（B7棟）に

移転を完了しました。B7棟には市大の機械工学科と電気情報工学科（公大の電気電子システム工学科）を含めて3学科が移転しました。当学科はB棟の東側の1階から5階の一部を使用しています。2024年度は移転に伴う研究室の立ち上げとともに講義や卒業生と修了生の研究指導で怒涛のように過ぎた一年でした。教員のみならず、学生達も住み慣れたキャンパスを後にする寂しさと不安を抱えて始まった一年でした。本当によく頑張ってくれたと思います。電子・物理工学科全員で乗り切りました。

学生の進路状況を報告いたします。2024年3月に44名が電子・物理工学科を卒業しました。内9名が就職、その他1名、2名が他大学大学院に進学、32名が大阪公立大学大学院工学研究科電子物理系専攻・博士前期課程に進学しました。大学院では34名（市大を電子・物理工学科を卒業して大阪公立大学に進学した者）が電子情報系専攻・前期博士課程を修了し、全員が就職しました。2024年度が市大工学部の電子・物理工学としての最後の年となります。2025年2月の時点では、2025年3月の卒業予定者は41名、大学院の修了予定者

は37名となります。心ならずも事情により若干名の市大生が残っていますが、キャンパスの移転に伴い慣れない環境でも無事に学業を続けるように学科として自習室を提供するなどサポートを続けています。

これから約3割の教員が退職することで、当学科の構成は大きく変わることになります。学科所属教員16名の内（敬称省略）村治 雅文 講師（電62）が30年間の勤続を終え2025年3月末を持って早期退職することになります。2025年度は非常勤講師として引き続き学生の指導に務めます。他に2025年度には寺井 章 教授、小林 中 准教授、福田 常男 准教授、以上3名の教員が定年退職することになります。個人の事情により梁 剣波 准教授も2025年度の途中で退職することになります。そして今回の寄稿が工学部同窓会だよりの最終号となりますが、電気系同窓会会報誌を通じて報告できればと存じます。これからも諸先輩方のお心を引き継ぎ、今後の学生指導・学科の運営に取り組んで参ります。

卒業生の皆様のご健勝・ご活躍を祈念しますとともに、公立大学工学部電子物理工学科（電子材料コース）へのご支援・ご鞭撻をお願い申し上げます。

化学バイオ工学科の近況

化学バイオ工学科 学科長
立花 亮



卒業生の皆様におかれましては、時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。また、平素より化学バイオ工学科に対し様々なご支援を賜り、厚くお礼申し上げます。

皆様ご存知のように2022年4月に新大学「大阪公立大学」が開学しました。化学バイオ工学科も名称こそ変更はないものの、教育カリキュラムを大幅に刷新し、化学と生命科学の融合をより高めた新たな学科としてスタートを切りました。この時入学された学生もこの2025年4月には研究室に配属され、新たに研究をスタートさせることになります。

このような状況下で、化学バイオ工学科では、教授11名、准教授6名、講師3名、特任講師1名、特任助教2名

の合計23名の体制で教育・研究活動に励んでいます。

教員の異動としては、まず2024年4月に弓場 英司 准教授が応用化学科から移籍されました。新たに免疫工学という研究室を立ち上げ、化学とバイオの融合領域として、学科に貢献していただくことになっております。

また、生物応用化学科の時の最初の生物化学工学研究室教授であられた、加藤錠治（現姓、伊佐）先生から卓上SEM（約1000万円）のご寄付を頂きました。生物化学工学研究室に設置される予定です。この場を借りて、御礼申し上げます。

卒業・修了予定者の進路状況については、企業への就職希望者のほぼ全員が内定をいただいています。こ

れも卒業生の皆様が社会において活躍され、本学科の評価を高めていただいている賜物であると感じています。

また、4年前に大阪市立大学に入学された学生はこの春に卒業論文を書き、社会に巣立っていき、あるいは大学院に進学することになります。大阪市立大学とい

う名前、また「イチダイ」と親しまれた名前がだんだん薄くなっていくことは、私自身もこの大学の卒業生として寂しいかぎりです。

最後になりますが、卒業生の皆様の益々のご活躍とご健勝を祈念いたしますとともに、引き続き、本学科への変わらぬご支援とご鞭撻をお願い申し上げます。

建築学科の近況

建築学科 学科長
倉方 俊輔



卒業生の皆様には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。また、平素より本学科同窓会である建築会を通して格別のご支援を賜りまして厚く感謝申し上げます。

まず2023年度の学部卒業生は31名で、うち本学大学院進学20名、他大学院進学1名、ゼネコン1名、ハウスメーカーなど3名、公務員など1名、その他5名です。

2023年度の学部の新入生は35名、大学院の建築学分野は前期課程31名、後期課程に1名です。2024年度の学部の新入生は34名、大学院の建築学分野は前期課程23名、後期課程に2名となっています。新大学となった2022年度からはこの新年度入学試験の実施に際して後期日程を止めて中期日程を実施し、大学院入試を8月に加えて2月にも実施するようになりました。また、編入学試験を実施するようになり、他学校の2年生にあたる学年を終えた若干名が、本学の2年生に編入しています。学部の前期日程、中期日程とも工学部の中でも高い倍率を維持しており、建築分野を志す学生が一定数存在することを実感しました。

他にもお伝えしたいことはございますが紙面の都合もありますので、次に教員や学生の活躍を報告します。

●古川幸講師が14th International Conference on GEOMATE 2024でBest Paper Awardを受賞。

●倉方俊輔教授が2023年日本建築学会教育賞（教育貢献）を受賞。

●修士2年生の岸本結花さんが「音がある図書館の空間構成と音環境の構築に関する研究」で日本建築学会

2024年優秀修士論文賞を受賞。

●修士1年生の盛屋匠さん、王佳怡王さんが2024年度建築学会大会で若手優秀発表賞を受賞。

●修士1年生の中嶋立樹さんが2024年度日本建築学会近畿支部研究発表会で優秀発表賞を受賞。

●学部4年生の水野翔太さんが卒業設計「『blind urbanism』-触常者の三原則-」で、せんだいデザインリーグ2024卒業設計日本一決定戦・特別賞、Diploma×KYOTO' 24・day1一位/day2二位、赤れんが卒業設計展2024・100選、JIA近畿支部学生卒業設計コンクール2024・最優秀賞、JIA全国学生卒業設計コンクール2024・銀賞を受賞。

●学部4年生の水野翔太さんが近畿建築士協会主催「第3回近畿学生住宅大賞」で奨励賞を受賞。

●学部3年生の鄭佳恵さん、伊藤佑那さん、田口紗衣さんが近畿建築士協会主催「第3回近畿学生住宅大賞」で奨励賞を受賞。

学生たちの活躍が頼もしい限りです。

教員の異動について報告します。2023年度末で梅宮典子先生が退職され、教授4名、専任の総数12名の体制で運営していましたが、2025年度からは後任の教授が着任する予定です。2025年度末には本学に長く貢献していただいた谷口与史也教授、谷口徹郎教授が退職の時期を迎えます。大阪市立大学からの伝統を生かし、良き建築教育を永続させていきたいと思います。

末筆になりましたが、くれぐれも健康にご留意いただき、益々のご活躍をお祈りいたします。

都市学科の近況

都市学科 学科長
西岡 真稔



卒業生の皆様には、平素から都市学科への種々のご支援を頂き、厚くお礼を申し上げます。

2024年は地震が頻発し南海トラフ地震がいつ発生してもおかしくないとされる中で、日本の年平均気温は2023年（過去の1位）を大きく上回るなど、自然災害・極端気象が続いています。地震大国と言われる日本に住まう以上、地震と隣り合って生きていくしかないことを痛感させられます。能登半島は過疎地域であるために財政基盤が脆弱で地震対策・防災対策が進んでいなかったことが被害を甚大化させたと言われますが、程度の差こそあれ、大都市大阪でも同種の問題を抱えています。帰するところ、防災対策を始めとする都市問題は工学技術の視点だけではなく、社会や経済など多様な視点から取り組まなければ解決できない種類の問題ですので、深く鋭く課題を追求する先端的な工学とともに、都市学科では広く多様に課題解決に挑む都市学的アプローチから教育・研究に取り組んでいます。

都市学科・都市学分野の卒業生・修了生の進路の概要は、次のようになります。2024年3月には都市学科10期生44名が卒業し、また大阪公立大学大学院前期博士課程としては第1期生となる都市学分野の44名が修了しました。また、大学院の後期博士課程（都市学分野）では、2名のかたが博士（工学）の学位を授与されました。2023年度学部卒業生44名の進路は、33名

（75%）が大学院前期博士課程に進学し、残りの11名が社会人となりました。就職先は、公務員が5名（奈良県、大阪市2、名古屋市、堺市）、民間会社が6名（ゼネコン2、建設コンサル1、住宅・不動産2、その他1）です。同じく2023年度大学院前期博士課程修了生41名の就職先は、公務員が4名（近畿地方整備局1、東京都1、大阪府1、大阪市1）、民間企業35名（ゼネコン2、建設コンサル12、インフラ系7、メーカー7、住宅・不動産5、その他2）でした。2023年度は、大学院修了生のコンサルタント系への就職が多く、ゼネコンへ進む学生が少ない印象です。最近の学生はワークライフバランスを重視していると言われますが、これもその現れかもしれません。今年働き始めた学生達は、学生から社会人へと意識を変革する時期にあると思います。卒業生の皆様には、仕事には厳しくとも、後輩として温かな目で見守り、サポートいただければ幸いです。

教員の異動については、2023年度末の教員の退職、および2024年度4月の新規着任はなく、都市学科では教授11名、准教授6名、講師1名、助教2名の合計20名の体制で教育・研究活動を進めています。

末筆となりますが、都市学科がこれまで培ってきた教育・研究の基盤の上に、これからの時代に求められる都市像を描くべく、教員一丸となって取り組む所存ですので、卒業生の皆さまからも厚いご支援を頂きますと幸いに存じます。



歴代研究科長からのメッセージ

人を育て、高次の教育研究を展開し、 社会に貢献する大学

元工学研究科長（1994.4.1-2000.3.31）

多胡 進



2025年は、工学部発足から約80年になる。1949年新制大学発足され、理工学部が発足し、都島工業専門学校は長い経過を経て1944年に改称発足した。1953年には、大学院工学研究科2専攻（電気工学専攻（電気工学応用物理）と建設工学（建築学と土木工学））と理学研究科5専攻が開設された。1956年には、2専攻に博士課程が開設された。周辺の神戸大学、京都工芸繊維大学、福井大学など、大阪工業大学、関西大学などより約10年早くに開設された。1959年には理工学部が分離し、工学部は、機械工学、電気工学、応用化学、建築学、土木工学、応用物理の6学科構成となった。大学院は修士課程・博士課程をもつ工学研究科6専攻となった。工学部は、当時の三瀬貞学部長の先導で工学部創立40周年を開催し、工学部卒業生は後援会を結成し、1988年に工学学術交流センターを寄贈した。

1965年には、工学部・工学研究科は杉本町に移転した。①研究棟など学舎の設計、②大阪商業学校卒業の田中吉太郎さん寄贈金を使った田中記念館、国際競技で使える体育館などを工学部建築学科教員と卒業生が実施設計を担った。杉本町の機能が強化された。

1970年代初期から、大学紛争の継続となり、その後工学問題も発生した。大学の在り方について考え、検討した。工学部教授会の三輪学部長と三瀬学部長の工学部の改革案をまとめ、2学科増設を進め、1990年には「生物応用化学科と情報工学科」が開設できた。

1980年代になると、大学の若手教授が選出され、大学のマスタープラン、大阪市立大学基本計画（一言でまとめると都市型総合大学の形成、キャンパス形成はパークユニバーシティ）、大阪市立大学学術情報総合センターの基本構想・基本設計・実施設計・建設推進の3つの作業を計10年以上に渡って課せられた。3委員会は完成させ、評議会で可決された。

1994年には、先の2新設2学科が卒業生を送れる、正規に大学院に進学できるようにする必要があった。先の前任者で大学設置審議会への申請が停滞していた。急遽1995年3月まで申請受理と認可を求め交渉を行い、1995年4月に新2専攻の大学院生を迎えることができた。その後、大学基本計画に組み入れていた「環境都市工学科と知的材料工学科」の開設認可申請を行い認可され、10学科で、2000年4月に新入生を迎え入れることができた。

国際学術交流は（1）1993年から1999年までは、工学部として「JICA—国際協力機構（日本政府の機関）」と共同して、東南アジア、オセオニアなどの諸国と、太陽光発電とその利用に関する技術指導と技術開発協力をおこなった。もう一つは、（2）大阪市立大学の国際学術交流シンポジウムの第5回の実施を申請し認証され、工学部全員で実行できた。1996年に完工できた学術情報総合センターを使用して1997年12月11、12日に開催した。集約テーマは「豊かな都市環境の実現に向けて」。6つの分科会で、発表・議論した。参加者は、上海、サンパウロ、サンクトペテルベルグ、メルボルン、ハンブルグ、シカゴ、大阪の大学研究者、公的機関の研究者、加えて国内の大学、そして多数の在学生在が参加した。

以上、公立大学協会などでの議論、科学技術基本法制定に照らしてわかる新たな段階に教育研究は進む。このような動向のリーダー、その責任者を確保・確立していくことが肝要と心得た。若い研究開発者が自分のテーマを発見し、遂行できることに留意した結果である。

大学での思い出～法人化準備と人員削減～

元工学研究科長（2002.4.1-2004.3.31）

山田 文一郎（昭和40年修了）



2年の任期で学部長・研究科長を務めたが、20年以上前であり本人の老化も進み断片的な記憶も薄れがちである。この2年間で印象に残っているのは、楽しい思い出ではないが法人化の準備と財政悪化による人員削減の解決に迫られる気の重くなる日々であった。毎年繰り返される恒例の行事（入試、入学式、卒業式など）も当然行われたから、それらに加えて法人化等に関連した多くの会議に時間を取られた。

国公立大学の法人化では、大学の研究成果で得た資金を経費の一部に充てることで設置者の負担を軽減することが目指された。市大では、大学独自案の作成がまず求められ、そのための工学部および全学での議論（会議）が続いた。法人化については工学部教員のすべてが素人のため、初期には法人化のとりえ方も各人各様であり、法人化後の理事長、学長、教授会などの役割を理解するのに時間も要し、全学では法人化後の職員の所属（法人化した市大か市役所）で折衝が続いたと聞く。

工学部に大きく影響する法人化に伴う変更のひとつに、外部からの研究費の取り扱いがあった。大阪市の一部局であった市大では、後援会研究部が外部資金の窓口となり会計処理を行っていた。法人化後は、大学と企業などとの契約により資金を直接受け入れるための準備が行われた。しかし、工学部は10学科（機械工学科、電気工学科、応用化学科、建築学科、土木工学科、応用物理学科、生物応用化学科、情報工学科、知的材料工学科および都市工学科）で教員が約140名と小規模であり、講義や研究指導で手一杯であり、不慣れのためか資金獲得の動きが活発とはいえなかった。卒業生の産学連携のコーディネータは、各種外部資金への応募の少なさを指摘しており、学科の壁を越えた体制の整備と定着が急がれた。

同時期に教員の外部評価を行い、大阪市立大学は大学院大学へ変わり学科の再編成が行われた。従来は、

（小）講座制であり講義担当者が講座に固定されており、人事案件の柔軟な運用はむずかしかったが、大講座制への移行により問題解決が図られた。教育の面では、大学院大学を標榜しながら大学院後期課程の定員充足率が低いことが問題であった。後期課程で、学位を取得するには学部卒業後5年を要することに加えて、経済的理由（授業料）と就職のむずかしさも進学者が増えない理由とされてきた。後述する人員削減はあったが、5年の年限短縮の実現や社会人の後期課程への受け入れなど、進学への追い風はあったが根本的な解決には至っていない。学生諸君が、魅力を感じる後期課程であってほしいものである。後継者育成の観点からも、大阪公立大学でも学位取得者は必須のように思われる。筆者は法人化実施前に定年を迎えたため、新体制（法人化した大学院大学）の状況はよく知らないが、教員の意識改革が求められたことであろう。

法人化と直接の関係はないが、財政難による人員削減も難題であった。約140名の教員から、3年間で1割の削減が求められた。しかし、教員の減少は教育の質に直接影響するため、特定の学科に負担が集中することなく、定年退職者を補充せず削減者数の充足が試みられた。ある学科で定年退職者1名が出ても、同じ年に退職者がいないか2名出る学科もあり、複数の退職者が出ると講義担当がいなくなることも危惧される状態であった。学科間の不均衡は、できる限り短期間に留めることが求められた。しかし、当初はこのような原則で削減計画ができる見通しはなく、試案作成に集中したため会議へ遅刻したほどであった。試行錯誤を繰り返した結果、学科間の不均衡が固定化されることのない試案ができ安堵した記憶がある。しかし、その後もさらに人員削減が行われたようである。

工学部にとって、喜ばしいことあるいは楽しいできごともあったと思うが、印象に残っていない。思い違いや、記憶漏れもあると思うが容赦下さい。

学部長時代の学科再編

元工学研究科長（2004.4.1-2007.3.31）

東 恒雄（1966年機械工学科卒）



1. まえがき

大阪市立大学と大阪府立大学の統合により大阪公立大学が開設され4年が経過した。市立大学最後の卒業生が今年(2025年)3月に卒業するのを受けて、「同窓会だより」編集部より『同窓会だより』最終号を発行する。ついては私の学部長時代に行われた工学部の学科再編について記録に残しておきたい」として当時の経過をまとめるよう依頼を受けた。

2. 学部長就任以前（2004年3月まで）の経過

1960年に理工学部が理学部と工学部に分離された。1983年6月発行の大阪市立大学百年史部局編・上によれば、1964年当時の工学部の学科は機械工学科(6)、電気工学科(5)、応用化学科(5)、建築学科(5)、土木工学科(6)、応用物理学科(4)の6学科であった。カッコ内の数字は学科に所属する講座の数であり、当時の講座は原則として教授1、助教授1、助手2で構成されていた。

1989年3月31日付で大阪市立大学原子力研究所の閉所が決定し、これに伴い同研究所から工学部の応用化学科に1講座(4人)、応用物理学科に1講座(4人)が経過措置的に移設された。しかし、これらの教員枠は当該教員の退職・転出とともに工学部教員枠から消滅している。

1990年4月、工学部教員定数140の範囲内で教員の学科間移動や新規採用により情報工学科と生物応用化学科が新設され、1999年4月に環境都市工学科と知的材料工学科が新設された。教授、助教授、助手各1名で研究室を構成し、4つの研究室があれば文部科学省は学科の新設を認めていた。

2002年、大学は設置者(大阪市)から5年間で教員を10%削減するよう指示された。工学部で10%といえは14の教員枠であるが、定年退職教員の教員枠を返上するなどして対応がなされた。工学部の教員定数は140から126に減少した。

3. 学部長在任中の学科再編

私が学部長を務めたのは2004年4月から2007年3月までの2期3年である。

2002年4月に国立大学は法人化され、大阪市立大学も2004年4月に法人化された。法人化当初は法人の理事長が学長を兼務しており、法人化以前と比べて教育・研究体制にほとんど変化はなかった。ところが2006年、大阪市が財政再建を目指した市政改革「5年間で人件費20%削減」が大学にも適用された。2002年から5年間で10%削減が課せられており、さらに20%削減が加わると工学部の専任教員は2001年以前の140人から2011年には100人余りにまで減少することになる。10学科を維持することは困難であり、10学科を6学科に縮小再編することを余儀なくされた。

知的材料工学科はもともと機械工学科の材料系分野が移って新設された経緯もあり、両学科が統合されて新たな機械工学科が開設された。バイオ工学科(旧生物応用化学科)も応用化学科の生物系分野を核にして構成されていたので両学科の統合により化学バイオ工学科が新設された。環境都市工学科の建築系分野は建築学科と統合して新たな建築学科が開設され、土木系分野は都市基盤工学科(旧土木工学科)と統合して都市学科が新設された。電気工学科のうち材料系分野は応用物理学科と統合して電子・物理工学科が新設され、通信系分野は情報工学科と統合して新たな情報工学科(のち電気情報工学科に改称)が開設された。

4. あとがき

以上の学科再編は文部科学省に申請・認可を経て実施されるため、工学部が機械工学科、電子・物理工学科、情報工学科、化学バイオ工学科、建築学科、都市学科として入学生を迎えたのは2009年4月である。この学科体制は2021年4月入学生まで続いている。

工学部・工学研究科の明るい未来を目指して ～今は昔の物語～

元工学研究科長（2007.4.1-2009.3.31）

濱 裕光



1. まえがき

工学部同窓会員の皆様！永らくご無沙汰しておりますが、お変わりなくお過ごしでしょうか。この度、寄稿のご依頼があり、いい機会を頂きましたので、私の教員人生を振り返ってみますと、色々なことが走馬灯のように蘇ってきます。その一端をご紹介しますと思います。

2. 専攻再編

当時は、どこの大学でも、法人化、人員削減、教育・研究に関わる組織改革が叫ばれており、正にそれは喫緊の課題でした。また、真偽のほどは定かではありませんが、大学は教育機関であるから「研究・教育」でなく「教育・研究」と並べるべきであるというような話もまことしやかに語られていました。また、文科省でもトップ30大学の選別など、世界レベルでの競争に負けないように教育・研究の場に積極的に競争環境を導入する試みもありました。NHKのチコちゃんではないですけど「ぼーっとしているとバスに乗り遅れますよ～」といった緊張感も漂っていました。詳細については、またの機会に譲りたいと思います。

教員人生の中でも一番印象に残っているのは、工学研究科の「専攻再編」に、学科・専攻の壁を越えて、先輩、同僚と取り組んだことです。私が研究科長を務めたのは、2007年～2009年に亘る2年間でしたが、先人たちのご尽力により、大きな課題はほぼクリアされていました。当時、日本の大学では、法人化、学部・専攻の統合・再編と続く大学変革の嵐でした。

文科省への再編案の申請を無事終えた後で、オープンキャンパスで説明をしたときの、受験生からの期待には手ごたえを感じました。申請書が完成するまでは、喧々諤々、夜寝る時間も惜しんで、議論を重ねました。同時に、コンサルタントの方からの貴重な問題提起やアドバイスを頂きながら、A棟の会議室で議論を続け、工学部・工学研究科の将来について語り合いました。

「10学科→6学科、6専攻→4専攻」と統合・再編する方向で文科省に提出するための原案作りは進みました。申請書が受け付けられた後には、重たい荷物を降ろした晴れ晴れとした気分と同時に気が抜けた気分でした。ご苦勞をおかけした関係各位にはこの場を借りて改めて感謝を申し上げます。

3. 法人化と教員削減

私の中では、専攻再編はとても大きな出来事でしたが、もう一つ忘れてならないのは、法人化に伴う教員削減でした。人事が絡むことは、神経質にならざるを得ない大変な問題でしたが、教員は意見が言えても、内部調整に留まり、主体的に関与する余地はほとんどありませんでした。逆に、大阪市主導で進んだので、専攻再編のときほど神経は使わなかった印象を持っています。このように時代とともに、工学部・工学研究科は何度も統合・編成を繰り返して今日に至っています。

法人化に関しては、人員削減が一番重要なミッションで、大阪市からの要請は、現状から101名への教員削減でした。私は、ウォルト・ディズニー・プロダクション制作の名作アニメ『101匹わんちゃん』が好きだったのですが、この数値は偶然とは思えない自分でも驚くものでした。皆様よくご存じのダルメシアンたちが繰り広げる愛情物語を通して、大切にしたい家族の愛と絆を描いたディズニーの名作です。科学的に考えれば、特に意味のないものです。

4. おわりに

この度、同窓会解散のニュースを耳にし、寂しい思いですが、私たちの世代の誰もが好きな歌手 坂本 九ちゃんの「上を向いて歩こう」をYouTubeでたまに聴いています。

末筆ながら、工学部同窓会員の皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

研究科長として

元工学研究科長（2009.4.1-2012.3.31）

大嶋 寛（昭和49年応用化学科卒）



研究科長として工学部・工学研究科の運営に関わって、心に残ったことをいくつか述べたいと思います。

同窓会との関わりと言えば、「入学時に大学に納める入学金を半額補助するという支援」を、同窓会が工学部受験者に募り、選定して、約束して、合格・入学が決定すれば、それを実行するという同窓会の工学部（入学者）への支援活動が印象的です。補助金は返済が必要でしたが、入学時の負担が軽減され、喜んでいただけたと思います。さらに、大学院後期博士課程学生に対する支援などを推進していただいたのは、大変有り難かったと思います。

また、当時、医学部出身の西澤学長は、「学内で行われている研究を支援する施策」を実行されていました。教員は、外部資金を獲得するのが基本ですが、大学としては学内の資金も活用して、独創的な研究の成果を世に出していこうとする活動の一環でした。研究科長としても、工学研究科の研究実態を把握して、大学支援に繋げるように努力しましたが、工学研究科教員全員が積極的に参加したことを覚えています。大阪市立大学の教員は協調性に優れたことが、良くも悪くも一つの特徴であったと思います。

大学の研究室や学科、研究科で、何が行われているのかを互いに知る機会は非常に少なかったと思います。そこで、工学部玄関脇に学生を含む構成員の活動をアピールするディスプレイを設置することにしました。建築学科の横山俊祐教授にお願いして、設置スペースのデザインをしていただきました。そこに、学生や教

員の研究賞、ポスター賞などの研究成果や活動を映像として表示しました。管理は工学部の事務職員にお願いしました。その結果、思いもしなかった数の研究成果が次々と映し出されることとなりました。皆、頑張っていると実感した次第です。このディスプレイは、2024年末も設置され、機能していました。

研究科長として、悲しいこともありました。期末試験でカンニングする学生もいました。筆記試験でカンニングした学生は、その科目だけではなく、当該学期すべての科目の試験結果が無効となって、直ちに留年が決定してしまいます。監督者の証言と、カンニングの証拠と本人への事実確認をへて、学生への処分言い渡しをする責任がありましたので、数人の学生に実行しました。10年以上経った今、彼らはどうしているのか、どこかで活躍していることを願っています。

いよいよ、大学統合の話が出て来ました。大阪市立大学と大阪府立大学には、重複する学部があると指摘され、その一つが工学部でした。統合の議論が始まったときは、比較的重複の程度が低い両大学の学科を統合して、理工学部を造るというものでした。大阪府立大学からは、造船と航空、大阪市立大学からは、都市基盤（土木）と建築が出て、そこに工学部の他の学科を理工学部に必要な形で編成するというものでしたが、両大学共にいろいろありました。その後今日の結果となっています。大阪公立大学が、教育・研究・社会活動にとびきり優れた業績を出せるように、新同窓会も応援できればいいと思います。



工学部と同窓会への思いをつないで

元工学研究科長 (2012.4.1-2016.3.31)

日野 泰雄 (1975年土木工学科卒)



私が大阪市立大学工学部土木工学科を卒業したのは昭和50(1975)年。昭和100年に当たる今年、卒業50年を迎えた。工学部同窓会正会員としても50年になる。節目というのは、個人的には何かしら意味があるように思える。

実は、土木会(現都市会)では幹事長を務めるなど、学科と同様それなりに同窓会に愛着を持っていたが、工学部同窓会には馴染みがなかった。それどころか、工学部に対する意識も希薄だったように思う。しかし、2001年に工学部教授会に出るようになって、工学部の枠組みを知り、2005年の10学科への改編、そしてまさかの2009年の6学科への再編の際には、良くも悪くも工学部の中での学科の位置づけを再認識するようになった。さらに、大きな転機となったのは、2009年からの副学部長、2012年からの学部長の職務に就いたことだった。

工学部の運営を任され、教職員の皆さんと多くの課題に対応しながら、同窓会との連携を深めるべく、工学部主任会と同窓会役員会との意見交換会を開催し、学生への支援を強化していただくに至って、個人的にも同窓会との距離が急速に縮まったと思う。

しかしながら、学部長在職中に、あり得ないと思っていた市大存続の危機に直面することになった。まさに青天の霹靂で、双方とも「まさか」と思いながらの話し合いが続く中、次第に危機感が増し、このままでは規模の小さい市大工学部はシナジー効果の言葉の陰に埋没してしまうのではないかと、「工学部(工学研究科)あり方検討会」を立ち上げ、総動員体制で、従来の学科の概念を超えた新しい枠組みを模索し、そこでの教育・研究と社会への貢献の可能性を示すための検討を続けた。しかし、結局、決定的な将来像を描くには至らず、教育・研究以外の大きな渦に飲み込まれ、気づけば長い時間をかけて描き続けた計画はどこに行ったのやら、結局何も成しえなかったのか、という悔い

に似た思いだけが、その時には、残された。その時には書いたのは、尽力された教員には、その後の新大学では、その経験と知恵の蓄積を生かして新たな挑戦を始めているに疑いはないと思っているからである。

一方で、その危機に接して、改めて、そもそも市大工学部は、設立時から旧帝大に伍して、早々に博士課程を有する教育・研究に秀でた公立大学の中核を担ってきたことを再認識し、その礎を築いてこられた先人に思いを馳せる機会ともなった。いま、先人の思いはいかばかりであろうか？

退職後は縁あって工学部同窓会の副会長の一人として、支援を受ける側から支援する側に立って、これから恩返しという時に、新大学への移行が決められ、市大最後の学生が卒業する2025年、私が卒業50年を迎える年に、同窓会も解散となる。今となっては、新大学とその同窓会の発展を祈念しつつ、区切りの年が私としての節目となったことを記憶に残すことにしたい。

人の心は移ろいやすく、今では大阪公立大学も受験生を中心に大阪の国公立大学の一つとして定着しているようである。何年かすると大阪市立大学、大阪府立大学があったことを記憶している人も少なくなっていくのかもしれない。しかし、それは長い歴史とともに確かに存在し、それぞれのアイデンティティを社会に示し、そこに学んだ人々はそれぞれの母校に愛着とそのアイデンティティに裏付けられた自負を持ち続けていると思う。

市大工学部同窓会も、その名が消えても、多くの同窓生ともども新たな公立大学の同窓会に籍を置き、市大工学部の卒業生の遺伝子の受け渡し役として、大阪公立大学の教職員と学生のみなさんを陰ながら支援していければ何よりだとの思いを記して拙文の結びとしたい。

大激動時代

元工学研究科長（2017.10.23-2022.3.31）

長崎 健



昨今、世間は少子高齢化、国際競争力の低下、環境面における諸々な制約、エネルギー問題など多くの課題に直面し、そして大学も受験人口減少による大学間競争を筆頭に問題が山積している。そのような背景の中、大阪市立大学大学院工学研究科長（職務代理も含む）を務めさせて頂いた2017年10月から2023年度末までの四年と半年余りは、2019年の大阪府立大学との法人統合をはじめとし、まさしく大激動時代の真っ只中で、自らの変革が強く求められた時代であった。

二代前の日野研究科長時代よりスタートした「あり方検討委員会」は、前任の故佐藤嘉洋研究科長の代に研究・教育・国際化・人材確保などに関し変革の必要性を大いに感じ議論し、小職が在任した四年半はそれら変革の実現に向け市大工学が一致団結し突き進んだ時代であった。研究に関しては、“活性化”と“見える化”を目的に「工学研究科教育研究センター」を開設した。教育に関しては、「工学教育改革検討委員会」を新設し時代に適合した教育システムの構築を目指し議論を行なった。人材育成に関しては、博士課程生への経済的支援増強や工学に興味を持つ女子中高生への応援サイト開設やパンフレット作成、そして女子在学生の就学環境の整備を推進した。国際化に関しては、海外の大学や研究機関との学術交流協定や学生交流に関する覚書を積極的に締結し、学生の海外派遣・受入など国際交流の増強を謀った。この間、市大工学の教員の皆様には多大なるご力添えを頂き、これらの目標達成に向かって叡智を絞り、着実に一步一步成果を残し前進した。このような市大工学の大変革期にあって、同窓会からは教育・研究に対して多大なる支援を頂いた。2010年度よりスタートした予約制奨学金制度である『大阪市立大学工学部同窓会奨学金』や『後期博士課程大学院生に対する奨学金』の他、2017年度よりリーディングプログラム『グローバルリーダー演習への支援』、その他『ホームカミングデーにおける新任・

若手教授による講演会』、OBが活躍する企業への『学生見学会』、『D棟耐震強度不足による教室不足時の同窓会スペースの工学転用』など枚挙に遑がない。中でも、他に類を見ないものが『COVID-19困窮工学生支援奨学金基金への資金援助』である。

2019年12月に初の患者が報告されてからわずか数カ月ほどの間にパンデミックは世界を震撼させ、経済状況は一変し経済的に困窮学生が多発する中、研究室活動と並行してのアルバイトが困難な工学生ならではの窮状が浮かびあがってきた。そこで、教授会では工学部・工学研究科に在籍する学生への支援策として「経済的な理由により修学を諦めなければならない学生を一人も出さない」の精神のもと、2020年7月に「COVID-19困窮OCU工学生支援制度」を開始した。累計延530名の工学生に総額2024万円という多額の支援を当初の想定（半年）よりも遙かに長く一年余りに渡って支援し、工学生達に学業や研究室活動を継続する上で多大なる勇気を与えることが出来たのは工学部同窓会のご支援の賜物であった。市大工学の教育・研究に対する同窓会の貢献は何物にも変え難いものがあり、改めてこの場を借りて感謝申し上げたい。

2022年4月に新大学として再スタートを切った工学部・工学研究科にとって大激動時代は終わっていない。大阪の気質の特徴は、新しいことやタブーに果敢に挑戦するチャレンジ精神旺盛であることであり、本音でことにあたる合理精神にある。進取の気性に富んだ地域性を活かし、今後も大阪公立大学工学部・工学研究科の変革の流れが加速していくことを期待している。

歴代会長からのメッセージ

元会長（2001-2002年度）
行藤 三男（昭和36年電気工学科卒）



大阪公立大学の2022年開学を機に、市大・府大・新大学の同窓会が一本化することになり、新大学の同窓会が統合発足しました。

20数年前、私が関空熱供給（株）の専務をしていたときに同窓会役員のお声がかかった際に同窓会に規約のない中で、「会長職は2年の任期、副会長は2名、会長は副会長から就任」というルール作りを条件にお引き受けいたしました。永い市大工学部同窓会を思い返すと、あの様にしておけば良かった、この様にしておけば良かったと色々思い起こすことはありましたが、懐かしい気持ちでいっぱいです。

新同窓会に期待することは、ものごとを想像し、それを口にして、実現に向けて集中して実行することです。

今の時代にはイーロン・マスクという起業家である世界一の大富豪がいます。彼に関しては賛否両論ありますが、世界に先駆けて電気自動車を普及させ、宇宙飛行士をロケットで宇宙へ送った世界で初めての民間企業を造るなどの不可能と言われていた偉業を実際に成し遂げています。

彼がカリフォルニア工科大学の卒業式のスピーチで『どんなものにもためらってははいけません。皆さんの想像力が限界を決めてしまいます。世界へ出てゆき魔法を作り出して下さい。』と語っております。何かを作り出すためには大勢の人を取りまとめて協力してもらう必要があります。

大学、学生、同窓会が一緒になって、新しい未来に発展させて下さい。

「土木会」と「剣友会」

元会長（2003-2004年度）
湊 勝比古（昭和41年土木工学科卒）



2022年4月に大阪市立大学（市大）と大阪府立大学（府大）が統合し大阪公立大学が開学しました。入学以来60数年の付き合いであった大阪市立大学の名が無くなり非常に残念で複雑な気持ちです。工学部同窓会についても再編を検討され、工学部全体ではなく各学科別に同窓会を設立し同窓会活動を行っていくことになりました。工学部同窓会も解散の方向が決まり重要な交流の場が無くなるのは寂しい気持ちになりますが、学科別同窓会では今まで以上にきめ細かく充実した同窓会活動が可能となると思いますし、実現されていくと確信しています。

私は1962年（昭和37年）に市大工学部土木工学科に

入学しましたが、いきなり新入生歓迎会を卒業生先輩の方々の出席のもとやって頂きました。先輩の方々と初めての話し合い、土木界への入門です。土木工学科には、先生方・OBの方々・現役の学生の方々に組織する同窓会組織「土木会」（今の「都市会」）という学科別同窓会が既にあり、卒業生送別コンパ、秋の運動会、名神高速、東海道新幹線などの工事現場見学会、先輩が勤務する職場訪問、就職ガイダンスなど卒業生の方々と一緒にする機会を多く設けていただきました。悲喜こもごもの学生生活、就職後の苦労話、土木現場で働くことの気構え、土木に関する各種情報、就職に関する情報などを教えて頂くなど大変お世話になり、「就職

しても何とかやっていけそうだ」の気持ちが醸成されていったように思います。卒業後、大阪市に就職しましたが、既に役所内には土木会の先輩方が多くおられ大変心丈夫でした。仕事では、大阪市内の大きなプロジェクトを多く担当しましたが仕事を進める過程で民間企業に勤めておられる土木会の先輩方、後輩の皆さんとも多く出会いその時々で大いに支えて頂き大変感謝しています。その後、私自身も土木会会長をさせて頂き、学生諸君と先輩方の繋がり、卒業生同志の交流の重要性を痛感した次第です。

私が所属していた剣道部には創部（明治38年）120年に及ぶ「剣友会」というOB会があり、先輩方は暇を見つけては熱心に稽古会に参加され、試合にも必ず応援に駆け付けて頂きました。先輩方の中には大企業の社長、役員の方も多くおられ、よく2次会にも一緒させて頂きました。ここでは社会人としての心構え、礼節を重んじる、誠意を尽くす、不屈の精神、自己を律するという剣道精神を強く教え込まれたように思います。

就職後仕事で苦労した時など、相手の立場を受け入れ、自分を開いて対峙し、粘り強く取り組んでいくという姿勢は剣道のお蔭だと思っています。剣友会では2003年（平成15年）に創部100周年記念事業の実行委員長、その後2008年（平成20年）からは剣友会長をさせて頂きましたが、剣友の絆は強く今でも年に3～4回程度誘い合って飲む機会を持っています。元気な間はまだまだ続けたいと思っています。

最近では、インターネット社会ということで人と向き合わなくても知識、情報は入手できます。否定はしませんが、やはり同窓会などで直接顔を合わせ本音で語り合うことがより強い絆を生むのではないのでしょうか。今後、各学科別同窓会の役割は重要で、先生方、卒業生、現役学生がより多く参加されるような積極的な取り組みを期待しております。

最後になりましたが、大阪公立大学工学部がますます発展、飛躍されますことを祈念しております。

同窓会への思い出

元会長（2011-2012年度）
宮本 万功（昭和43年機械工学科卒）



大阪市立大学工学部同窓会との関係は、私は男三人兄弟ですが三人とも工学部にお世話になり、長兄は電気工学科奥田研で修士迄在籍し、弟は同じく電気工学科北浜研で博士課程まで修了しました。それと私事ですが、家内は大阪女子大の家政学部生活理学科を卒業していましたが、大阪府立大学と合併して、その府立大学が大阪市立大学と合併して大阪公立大学となったことから、夫婦二人が同じ大学の卒業生となりました。

工学部機械工学科の上田研究室に所属していた時、後に工学部同窓会の事務局と談話室が設けられたA棟との連絡通路で、時の昼休みにテニポン（フリーテニス）をしていました。今は故人の人見宗男先生が事務局長として同窓会の再開と存続に長期間多大なエネルギーを注いでくださいました。

市大の卒業、就職の段階で、唐沢惟義教授から機械

を卒業すれば機械が中心の企業に就職すれば将来とも遣り甲斐のある業務に従事出来るからと就職先を勧めて下さいましたが、当時は1970年の公害国会が開催され、環境問題がクローズアップされている時期で、教授に民間企業に就職すると利潤を追求しなければならなくなり、公害防止を最優先とすることが困難になるので、大阪市の下水道局に奉職して水質汚濁防止の仕事がしたいと教授の考え方に従わなかった経験があります。

工学部同窓会との関わりのきっかけは、学校を卒業して、大阪市下水道局に奉職した時に、大阪市立大学工学部機械工学科の、その時は上田祐男研究室の当時は助手であり、今では故人ですが南斉征夫先生が大阪市内に勤務していれば同窓会に出席し易いのでと評議員になるように勧められたのが始まりでした。

当番制で、工学部機械科の卒業生が会長を担当する

ことになり、西暦2011～2012の間会長を仰せつかりました。その時は大阪市立大学としての全学同窓会の立ち上げ、工学部同窓会の設立50周年に当たることから、周年事業の企画が検討されていました。同窓会として工学部同窓会50年史の編纂、交流のためのITインフラの構築、奨学金制度の構築、等を議論して、東恒雄先生の尽力もあり、田守芳勝氏を実行委員長として寄付を募ることとして、3,000万円を目標に、関係者に呼びかけました。その結果、805名2,277.6口11,385千円の協力を得ることができましたが、目標額には達しませんでしたので残念でしたが、給付型ではなく応

募制貸与型の制度として発足し、現在まで継続しています。同窓会として奨学金制度を行っているのは珍しく自慢のできる活動ではないかと自負しています。大阪市の海外研修に応募し、48年前に4か月半イギリスのロンドン大学インペリアルカレッジに留学する機会が有りましたが、イギリスでは税金は高いですが、自国民は勿論、旧大英帝国からの留学生を含め教育費は無料でした。わが国では教育費が国民に重くのしかかっています。将来、収入に関係なく高度な教育を取得できるよう給付型の奨学金制度を同窓会で実施出来ればと希望します。

同窓会の思い出

元会長（2013～2014年度）

木村 雅之（昭和51年電気工学科卒）



同窓会活動に参加するきっかけは、恩師である建部先生からの電話だった。

建部先生「工学部同窓会の理事をやってほしいんだ」私「？」

そういえば、卒業時に同窓会費（終身会費）として幾らかを払った記憶はあったが、それまで同窓会活動に参加したことはなく、クラス会を細々と続けていたくらい。聞けば、それまでやってくれていた電気科の理事さんが、職場の都合でやめるので、埋める必要があるとのこと。ありていに申せば、「かなわんな」という思いだった。それでも恩師の依頼でもあるし、市大には学費月1000円で学ばせていた恩もある。さらに、卒業後は消防局に職を得て、長年勤務させていただいている恩もあり、消防に奉職してからも、大学院委託研修生として1年間電気科にお世話になった恩もある。言ってみれば私のこれまでの人生「みおつくし」一色だった由。それだけではなく、贖罪？の意味も。我々の卒業した昭和51年は、市大工学部はまだ学生運動のさなか。「アカハラ」が糾弾され、また、オイルショックの余波で就職が思わしくなかった。そんな不満からクラスが一致団結して教授会と強硬にぶつかった過去がある。本稿の趣旨から外れるので、多くは語らない

が、やり方は未熟だったかもという思いである。

初めて理事会に出席したら、周りはほとんど先輩でしかもアカデミックな経歴の方々ばかり。こちとらアカデミックとは正反対の体力勝負の道を歩いてきた。しかも、副会長という肩書だそう。建部先生をにらんでも後の祭り。ニコニコ笑っているばかり。こうなったらしゃあない。「同窓会の役員といってもしょせんパシリやん。パシリやったら年の若いもんがやるのは当然やし、体力やったら任しといて」と任務に励むこととした。理事会の間は、難しい話を分かったような顔で聞き流し、理事会後の懇親会が私の主戦場。先輩理事さんたちはこんな毛色の違う私を面白がってくれた。

そうこうするうちに、「同窓会長は学科持ち回りで、次はあんたの番よ」と言われてしまった。「パシリじゃすまんやんか」。しかも、この頃にわかeni市大府大の合併構想が動き出し、全学同窓会が出来た。学部の同窓会長は、全学同窓会の副会長を兼ねることとなった。全学同窓会では、大学の合併構想をうけ、あるべき同窓会の姿が主な議題となった。

私はこれまでの人生の結果、半ば筋肉と化した脳みそで必死に考えた。そもそも同窓会って、卒業生のもの。確かに大学や、在校生への支援も目的ではあるけ

ど、学校が統合され母校が亡くなっても同窓会は存在できる。卒業生だけで仲良くやってもいいじゃない。いや待てよ、それでは先細りだ。名前は代わっても、母校は存続し、在校生がいるのであれば、そこと積極的にかかわっていくべきではないか。

議論は後者で進んだ。学校当局が合併で腹をくくったら、同窓会は付いていくしかないし、私も若い人とかかわっていきたい思いが強かった。しかし、具体論になると、課題山積。市大、府大とも単独で存在する学部はそのまま残し、両方に存在する学部を統合する

という方針が示された。そうなるとう工学部はもろにこの波を受ける。一方同窓会は、府大工学部は学科で、市大工学部は学部で活動している。言い出したらきりが無いが、万難を排し、大学とともに同窓会も合併することになった。私はといえば、「大変だ」と騒いだけで、会長任期終了に。私以降の会長さんには、大変なところでバトンを渡すこととなり、申し訳ない思いでいっぱいです。しかしその後の会長さんたちの大変なご努力により、見事に同窓会の合併も果たされました。感謝、感謝です。

私の市立大学の思い出と同窓会

元会長（2015-2016年度）
西口 克彦（昭和43年応用化学科卒）



経歴

1945年8月17日生まれ
1964年4月 大阪市立大学工学部応用化学科入学
1968年3月 “ 卒業
1973年3月 大阪市立大学・大学院工学研究科修了
1973年4月 （株）クラレ入社
2008年7月 （株）クラレ退社（倉敷事業所長）
2013年 市大工学部同窓会理事
2015年～2016年 大阪市立大学工学部同窓会会長

大学の思い出

大学入学試験及び合格発表会場は大阪市都島区の古く汚い扇町校舎であった。

工学部の専門課程から新しい杉本町学舎で受講した。

大学院入学後は全国的な学園闘争で殆ど実験・研究が出来ず、博士学位は取れなかった。

楽しかった事は昼休み内庭でのバレーボール、C棟北でテニス、又ソフトボールを楽しんだ事が思い出に残る。

工学部同窓会の思い出

反応工学研究室（井本立也研究室の先輩（橋本氏）より理事を引き継ぐ。会議運営に不満が有り、発言により応用化学科から副会長に就任、2015年から2年間同窓会会長に就任した。成果は下記と考えている。

＊執行役員の任務を明確化・規約の一部改定

＊会計責任者の複数人（理事の会計と事務員）管理とした。

＊会議時間が予定時間内に終了するように管理強化した。

＊教職員との親睦強化及び理事会の親睦（年2回の懇親会）を強化した。

＊府大・市大の合併後の両工学部同窓会の併合準備を始めた。

同窓会会長としての思い出

1、卒業式や学位授与式の来賓挨拶は事業所長時代の経験を思い出して話した。

2、市立大学全学同窓会の学部代表として副会長となり。大学運営に参加

3、在校生の工場見学（年1回）やその後の懇親会は楽しかった。

4、奨学金の運用（貸与と供与）方法の議論を始めた。工学部同窓会は理事の皆さんの協力により和気あいあいで運営できていた。

最後に

今回、府大、市大が統合され大阪公立大学となり、各学部同窓会の統合が進められたが、工学部の同窓会は統合できず、学科同窓会に分裂した事は誠に残念である。後日の統合を願う。

同窓会活動について

元会長（2017-2018年度）
黒山 泰弘（1975年土木工学科卒）



市大工学部同窓会の解散という節目にあたり、同窓会だよりの最終号に寄稿できることに感謝します。

まずは自己紹介。まだ大学紛争の余波が残る1971年に大阪市立大学工学部土木工学科に入学し、75年に卒業。その後構造工学研究室での修士課程を終え、77年4月に大阪市に就職しました。市では2年間の経営企画室勤務を除き道路・河川などの都市基盤施設の建設・管理を担う土木局（建設局）に在籍し、実務時代は橋梁や地下街、地下駐車場などの地下構造物の建設に従事しました。2011年東北での大震災の年に退職、その後市の関連団体で勤務し、2018年春以降は完全無職、年金生活者です。

同窓会活動に関しては、市での仕事をはじめ、土木学会、地盤工学会、関西道路研究会などの学協会での活動の中でも母校の先生方にお世話になっていたこともあり、よく大学に出入りしていたので、卒業後現在に至るまで学科同窓会である土木会（現都市会）に関わっており、現役の頃に役員を10年ばかり務めました。そんなことから、市を退職して数年後、市および土木の先輩から「工学部同窓会の会長が数年後に土木の順番になるので役員をやれ」との指令で、頼まれたらいいやと言えない悪い性格で引き受けました。その後は、ずるずると工学部同窓会にかかわっていて、現在は事務局を引き受けています。そして、理由は後述しますが、2022年に発足した市大、府大の全学的同窓会が統合した大阪公立大学校友会の運営を2020年頃からお手伝いしています。工学部同窓会に最初関わった頃は市大と府大が統合されるとは夢にも思っていなかったもので、「えらいことを引き受けてしまった」と今は後悔しています。

本稿では元会長の立場で当時の状況や印象に残った出来事などを書くべきかもしれませんが、統合後の大阪公立大学校友会に関わっていることから、全学的な同窓会活動の現状や課題、今後の見通しなどを少し記

したいと思います。ただし、校友会の公式見解ではなく、すべて個人的な感想・意見であることを申し添えます。

今回の大学統合の結果、同窓会においてもいろいろな影響や課題が生じていますが、その中で最も影響が大きかったのは工学部および市大工学部同窓会ではないかと思っています。工学部以外の学部は片方にしかない、あったとしても規模の差が大きく異なっていて、工学部のようにほぼ均等の統合ではありません。また、府大には工学部同窓会がなく（一時は存在したようすが廃止）、公大工学部同窓会の設立に向けた話し相手が府大には不在でした。というようなことで、市大工学部同窓会が望んだ公大工学部同窓会は設立できませんでした。さらに、市大の同窓会活動は大阪商大の伝統を引き継ぐ有恒会が主導し、各学部の同窓会が補佐するという体制でしたが、一方、府大はいわゆる文系に比して理系の規模が大きく、同窓会活動は主として理系各学部・学科同窓会が中心となった集団運営体制でした。このように両大学の同窓会の歴史、活動内容や運営方針は大きく異なっています。この両大学同窓会の違いも工学部同窓会の統合に影響を与えたのではないのでしょうか。両大学の同窓会の統合にあたって市大での理系同窓会運営経験者として両大学同窓会関係者間の調整が必要だと感じてしまったのが間違いのもとでした。

市大同窓会、府大校友会は市大工学部同窓会と同様に今春幕を閉じ、来年度は公大校友会が唯一の全学的同窓会組織になります。課題は山積ですが、公大に入学し、卒業していく後輩たちに信頼され、頼ってもらえる同窓会（校友会だけでなく各学部や学科の同窓会、さらには、地域単位の同窓会などを含む）にしていく必要がありますので、皆様のご支援、ご協力をお願いして筆をおきます。

同窓会の思い出



元会長（2019-2020年度）
宇野 勝久（昭和49年建築学科卒）

私は、2019年から2020年の2年間大阪市立大学工学部同窓会（以下「工学部同窓会」）会長を務めさせていただきました。

2020年は、大阪市立大学創立140周年、工学部同窓会創立60周年を迎えました。全学同窓会では、五代友厚記念事業委員会が中心となって取り組んできた『新・五代友厚伝』出版並びに学生支援事業(国際ビジネス演習開設・海外インターンシップ派遣)を記念する記念碑建立披露式典が9月26日に執り行われました。また、2020年は世界を震撼させた新型コロナウイルスが蔓延した年です。2020年1月15日に初めて感染が確認されて、2020年4月7日には緊急事態宣言が発令されました。2020年の1年間で罹患者数が24万人を突破しました。

コロナ禍は、学生にも多大なる影響を与え、入学式の中止、オンライン授業、アルバイト先の激減による生活困窮学生の増加等、今までに経験しなかった事態が発生しました。5月には大学が「新型コロナウイルス感染症拡大に伴う生活に困窮する学生のための緊急支援給付金制度」設立しました。工学部同窓会においても、5月に臨時の理事会を開催（リモートによる開催）し、「新型コロナウイルス感染症拡大に伴う生活に困窮する学生のための緊急支援給付金制度」に500万円を寄付することを決定しました。また、工学部・工学研究科は、工学部・工学研究科に在籍する経済的に困窮している学生に対する支援として「COVID-19困窮OCU工学生支援奨学金制度」を設立しました。工学部

同窓会にも協力要請がありましたので同窓会特別基金から300万円を寄付しました。また、困窮学生のさらなる支援のために、同窓会会員に『募金』をお願いすることについて工学部同窓会の理事会で全員の賛成を得て決定し、募金を募ったところ、9月には約330名の方々より600万円を超える寄付があり、諸経費を差し引いて600万円を寄付しました。

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、毎年11月に開催される「市大ホームカミングデー」や同日開催の工学部・工学部同窓会共催の「工学部新任・若手教授による講演会」も中止となりました。また、工学部同窓会主催の、在学生を対象とした「工場見学会」は、学生には好評な行事でしたが、バスでの移動や受け入れ企業の困難な状況から取りやめることにしました。このように2020年は、同窓会活動が大変制限された年でもありました。

同窓会は、卒業年次による先輩後輩という縦の関係と、同期卒業の横の関係を基盤としています。同窓会は、同窓会員の親睦を深める会であり、母校の応援をする会であり、また社会貢献をする会でもあります。工学部同窓会の会長は各学科の卒業生が持回りで就任しており、工学部同窓会を通じて「異業種交流」が実現しておりました。工学部同窓会が解散することは誠に残念であります。今後は、学科別同窓会が中心となって同窓会活動を行ってまいります。今後機会があれば、工学部の学科の横の連携を強化する何らかの同窓会組織が復活することを祈念して筆をおきます。



同窓会の思い出



元会長（2021-2022年度）
齊藤 寿士（昭和44年応用物理学科卒）

私は、2021-2022年の間、大阪市立大学工学部同窓会第18代会長を務めました齊藤です。

この時期は、新型コロナウイルス感染が爆発的に拡がり終息が見えない状況でした。大学ではオンライン授業が行われ、先生方はその資料作りに追われて大変だったと聞いています。当同窓会においても、役員会・理事会のオンライン会議に加え、2022年の大阪公立大学の開学に合わせ、2021年から統合後の両校同窓会の扱いについて府大同窓会代表と協議を開始するなど、工学部同窓会にとっては大変難しい課題に取り組む2年間でした。

このようなコロナの流行の真ただ中ではありましたが、同窓会は理事会を年4回、役員会はその準備のために同様の回数、オンライン会議を実施しました。その結果、会報誌は従来通り21年度は「同窓会だより第37号」、22年度「38号」を発刊することができました。しかし同窓会が大学行事に協力していた、ポート祭、工学部・研究科の卒業送別会、ホームカミングデーがすべて中止となりました。また、同窓会主催・共催していました、「工学部同窓会の集い(工学部同窓生が一堂に集まり歓談する場の提供)」や、「在校生対象工場見学会(OB在籍企業訪問)」等がことごとく取りやめとなりました。

そのような状況で、評議員会は、21年度は郵送による決議に、22年度はオンライン開催となりましたが、いずれも理事会提案の議案が承認されました。また、22年4月の大阪公立大学の開学を受け、前年21年度から、府大同窓会代表と統合後の工学部同窓会の組織・形態について協議してきました。新大学工学部は12学科と大所帯となるため、市大工学部同窓会のような工学部一体とする同窓会組織を作る事が困難であるため、各学科別同窓会を設置することになりました。同時に、全学科同窓会の緩やかな連合体としての新工学部同窓会を設立する事も決めましたが、現状、設置にはもう少し時間を要するようです。

両大学の多くの学科は重複がなく、府大に無い学科

「建築学科」「都市学科」同窓会は従前からの同窓会を引き継ぐことになりました。府大に無い化学バイオも新たに「化学バイオ工学科同窓会」を立ち上げ、機械工学科は市大・府大が合流した新たな「機械工学科同窓会」を、電気系2学科（電子・物理工学科と電気情報工学科）は府大3課程と合流し新たな「電気系同総会（後に電気クラブに改名）」を、それぞれ大阪公立大学開学に合わせ設置されました。

以上、各学科同窓会は順調に活動されていると思います。学科別同窓会の弊害かも知れませんが、市大工学部で見られたような横の繋がりが少なく、他学科同窓会の情報や工学部全体の情報が少なく感じられます。学科別同窓会への移行により市大卒業生は学科毎に離ればなれとなり、横の繋がりが疎遠になることを心配します。

一方、統合後の市大工学同窓会の対応を検討するために、役員、理事の代表で構成する「同窓会在り方検討会」ワーキンググループを設置し、統合後も存続させるか、解散するか真剣な議論を行いました。同窓会に強い愛着があり存続を希望するメンバーが殆どでしたが、新入生からの入会金も入ってこなくなる状況では解散もやむなしとなり、非常に残念ではありますが適当な時期に解散することになりました。

「同窓会だより」は本号をもって廃刊されます。今まで、年1回の「同窓会だより」を心待ちにしている卒業生も多くおられると思います。工学部卒業生と大学・教員・同窓生との接点である「同窓会だより」がなくなることは非常に寂しい想いがあります。また、工学部同窓会のごく近い将来の解散にも、今まで同窓会活動に参画してきた者ものとしては誠に残念ですし、多くの卒業生も同様な想いでしょう。

最後になりますが、新大学工学部は中百舌鳥の大きなキャンパスで工学新棟を含め新しい環境のもとで思う存分研究や勉学に励む事が出来ると大いに期待しています。

追悼文

田守芳勝さんを偲んで

会長 吉田 稔 (昭和52年機械工学科卒)



市大工学部同窓会第18-19期（2007-2010年）の4年にわたり会長を務められ、その後も理事として永く同窓会活動にご尽力いただいた田守芳勝さんが2024年11月21にご逝去されました。享年83歳でした。この同窓会だより最終号の企画において元会長である田守さんにもご寄稿をお願いしようとしていた矢先のことです。田守さんの携帯に何度も電話を入れたのですがお出にならず、心配しておりましたところ、しばらくして田守さんの携帯から私の携帯に着信がありました。胸詰まる奥様からの訃報でした。

田守さんは、同窓会創立50周年にあたる時期に会長を務められ、記念事業の遂行にご尽力されました。創立50周年を機に田守さんが企画された行事に学生工場見学会があります。私は、第2回から担当させていただき、学生工場見学会はコロナ禍の前の第10回まで続いたのですが、田守さんはそのほとんどにご参加いただきました。いつも優しい笑顔で後輩たちに接しておられたのが印象に残っています。誠に残念です。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(写真は、2017年2月、ダイハツ工業(株)池田工場を訪問したときのものです)



～同窓会の設立経緯ならびに 工学部同窓会事業について～

工学部同窓会65年の歩みを振り返る

名誉教授（1980～2021年同窓会理事）
東 恒雄（1966年機械工学科卒）



1. 工学部同窓会設立のころ

大阪市立大学工学部同窓会は、大阪市立大学理工学部が理学部と工学部に分離された1960年11月に、理工学部工学系、工学部および工学研究科の卒業生を会員として設立された。1964年には旧制大阪市立都島工専同窓会が統合されている。

注）大阪市立都島工業専門学校は1943年4月に機械、電気、建築、土木の4学科で設置された。修学年限は3年。1946年の学制改革（6・3・3・4制）により1949年に創設された大阪市立大学理工学部に継承された。

同窓会設立当時の工学部学舎は大阪市北区扇町にあり、機械工学科、建築学科、土木工学科は北学舎（現在の大阪市立天満中学校）、電気工学科、応用化学科、応用物理学科は南学舎（現在の大阪市北税務署周辺）にあった。扇町から住吉区杉本町に移転したのは電気、応化、応物は1962年、機械、建築、土木は1966年である。

2. 「会員名簿」と「同窓会だより」

設立当時の同窓会の主たる活動は「会員名簿」の発行であり、1961年創刊号、1966年第2号、1975年第3号、そのあと4年ごとに「会員名簿」が発行されている。ところが2005年4月に「個人情報保護法」が施行されたことを受け、2003年12月発行の「会員名簿」第10号が最終号となった。

「同窓会だより」は1980年に創刊され、「会員名簿」と「会員名簿」の狭間の年に発行されていたが、2004年以降は毎年発行されている。

「同窓会だより」では、工学部長より大学および工学部・工学研究科のその時々状況が報告され、各学科の主任教授より学生の就職状況や教員の移動につい

て報告されている。また、各学科卒業生からの近況や同窓会諸活動の報告、理事会役員紹介や年度決算報告等が掲載されており、まさに同窓会員相互交流の根幹を担ってきている。

3. 工学部創立40周年事業

1984年6月、工学部現旧教員と同窓会現旧役員ら有志が「大阪市立大学工学部創立40周年記念事業後援会」を発足させて広く募金活動を行い、記念講演・記念式典・祝賀会を開催するとともに、1987年には工学部事務棟2階に「工学部学術情報交流センター」を増築し、大阪市に寄贈した。同センターには談話室とセミナー室が開設された。センターの一角に工学部同窓会事務室が設けられ、事務員が配置され現在に至っている。

4. 後期博士課程学生就学援助

2006年、工学研究科からの要請を受けて「工学研究科後期博士課程学生修学援助制度」が創設された。工学研究科後期博士課程に進学する日本人学生のうち経済的に困窮な成績優秀者に対し、授業料の約半額の25万円を2年間援助する制度である。援助限度額は1,000万円、制度の期間は5年と制約されていた。延べ6名が援助を受けた。

5. 学術講演会の開催

1996年11月、工学部の正面に地上10階地下4階建ての「大阪市立大学学術情報総合センター」が竣工した。これを契機に、1997年11月に「工学部同窓会員キャンパス交流会（第1回）」と称して、工学部卒業の技術者と大阪市立大学学術情報総合センター教授による2件の学術講演が行われた。以後2018年2月の第13回キャンパス交流会まで主として市大工学研究科教授による学

術講演が18件行われている。また、2014年11月から2019年11月までのオープンキャンパスに合わせて「工学部新任・若手教授による講演会」が開催され、合わせて9件の講演が行われた。これら9件の講演の概要は、「同窓会だより」30～35号に掲載されている。

6. 工学部同窓会設立50周年記念事業

工学部同窓会設立50周年を翌年に控えた2009年、「工学部同窓会設立50周年記念事業」が開始された。(1)設立50周年記念募金、(2)ITインフラの構築と会員相互交流の活性化、(3)「工学部同窓会奨学金」制度の創設である。

6-1 設立50周年記念募金

2009年9月、会長・副会長経験者34名、理事・評議員・監事106名、現・元工学部教員118名を発起人として設立50周年記念募金を実施された。趣意書では「優れているにもかかわらず経済的理由により修学が困難な工学部受験希望生を対象にして、入学試験前に奨学金貸与予定者を決定し、入学試験に合格した学生には入学手続き時より奨学金を無利子で貸与する、全国的に見て新しい奨学金制度を同窓会として設ける」とし、寄付額の過半は奨学金に充てると謳っている。募金は2011年3月まで受け付けられ、805名の卒業生等から11,385千円の寄付が寄せられた。このうち、募金に要した諸経費を差し引いて850万円が奨学金制度に、残りの約80万円が情報インフラ整備とその運用に充てられた。

6-2 ITインフラの構築と会員相互交流の活性化

2004年に工学部同窓会のホームページが開設されていたが、2010年の「同窓会だより」で会員にE-mailアドレスの登録が呼びかけられ、E-mailで同窓会主催学術講演会の案内が行われるなど会員交流の活性化が図られた。

50周年記念事業の一環として2011年2月から2019年9月まで年1回のペースで「学生工場見学会」が工学部と共催で実施された。工学部卒業生が所属する企業の製造現場等の見学と卒業生による講演が行われ、懇親会が催されるのも常であった。見学先は計11社。毎回の参加者は工学部教員2,3名、同窓会理事3,4名、学

生・大学院生25～35名であった。

6-3 「工学部同窓会奨学金」制度

「工学部同窓会奨学金」は工学部同窓会設立50周年記念事業の一つとして創設された。当時の同窓会保有資産6,000万円の内から3,000万円、設立50周年記念募金から850万円、合わせて3,850万円で運営された。当時全国的に見て、学部の同窓会が奨学金を出している大学は見当たらなかった。

奨学金は、入学手続き時に入学金と授業料を合わせた額のほぼ半額に相当する50万円、2,3,4年進級時にそれぞれ25万円を貸与し、返還は学部卒業年（大学院進学者は大学院修了年）の6月から10年間毎月均等返済するものとして奨学生が募集された。奨学生募集は11月中旬に行われ、12月上旬に内定し、入試に合格した場合には入学手続き時より奨学金が貸与された。2016年度から推薦入試受験生にも対象が広められた。

こうして2009年から募集を続けてきた奨学金であったが、2019年に大阪市立大学と大阪府立大学の統合が大阪府・市議会で決議されたため、2021年度入学生向けの募集は取りやめ、2020年度入学生向けの奨学生募集が最後となった。

奨学金は2012年度入学生から2020年度入学生まで毎年1～3名合計16名に貸与された。うち3名は2年進級時から辞退しており、貸与金総額は17,500千円であった。

貸与奨学金の返還にあたっては、3年以内に返済する場合は貸与金額の20%を減額、5年で返済する場合には10%減額するものとし、途中一括返済可能として学部卒業前の2月に各自の返還計画書を提出してもらっている。奨学生の銀行口座から同窓会の普通預金口座に「定額自動送金」してもらう方式で送金手数料は同窓会負担とした。2024年12月時点で返済を完了した者8名、返済途中の者7名、返済開始予定者1名である。

7. 最後の学部卒業生

大阪市立大学と大阪府立大学が統合して大阪公立大学が開設されて丸4年が経過し、工学部同窓会設立65周年にあたる2025年3月、最後の大阪市立大学生が卒業した。

卒業生からのメッセージ

機械工学科 知的材料工学科 卒業生

同窓会だより最終号に寄せて

コマツ顧問 坂根 正弘 (1963年機械工学科卒)



1963年機械工学科卒の坂根正弘です。最終号に寄稿の機会をいただきありがとうございます。

我々の時代は機械科と電気科は各25名と少なく、教養課程を合同で学んだ縁で「機電会」として50歳を越えたころから合同の同期会を続けています。さすがに80歳を越えた頃にコロナ禍も重なり、私のように関西以外在住の友は参加できなくなり、昨年は関西地区の参加者のみで10名になったようです。

今回の「市大」が「公立大」に合併したことは、私たち世代にとってはそれほどネガティブなインパクトはなかったと思いますが、現役の人たちにとっては種々の思いが交錯しているかもしれません。

私は2022年4月の「大阪公立大学開学式」に市大の卒業生代表の一人として招待を受け、また記念講演で皆さんにお話しする機会をいただきました。

そこで今回の私のメッセージは、この講演会で話した内容に沿って述べたいと思います。

2012年安倍政権が始まったときから菅政権が終わるまでの9年間、私がライフワークとして取り組んできた「地方創生」と「大学改革」について紹介したいと思います。今でもはっきり覚えています。2012年10月24日、まだ自民党は野党時代で総裁選が終わり、安倍総理に決まった直後、自民党「日本経済再生本部」がスタートし、第1回会合に私が呼ばれ、約70名の参加者を前に講演をしました。私はこの国が取り組むべきテーマは「デフレ脱却」「地方創生」「東京の国際都市化」の3つですと提案しました。この国は戦後、中央集権で「産官学金」が皆で東京を向いて「個別最適」で頑張れば「全体最適」につながった国づくりが、団塊世代の2世が18歳を迎えた1990年ころに限界に達し、バブル経済がはじけたのだと話しました。この国の総人口は2008年をピークに減少に転じましたが、それでも高齢者が労働力を担っていますので、人口減少の危険度がそれほど高まってきていませんが、18歳人口は

本当に危機的です。1990年ころの200万人が現在110万人、そして15年後の2040年ころには約80万人以下が確実です。この変化を直接受けてきたのは「大学」のはずですが、信じられないことに1990年頃の大学総数が約500校だったのに今790校以上に増えているのです。大学進学率は現在55%とまだ伸びを期待できるように思いますが、短大専修学校を含む進学率はすでに80%以上に達しています。

私は「地方創生」で全国各地の状況を把握するなかで、全国共通の地方創生のテーマは「観光」「一次産業」そして「地方大学改革」だと思ふようになり、注力してきました。全国の道府県にある国立大学の共通の課題は、「総花・平均・自前主義」です。これは多くの日本企業の課題も同じキーワードですが、大学ははるかに深刻です。まず「総花主義」は9学部を超える大学も多く（大阪公立大学は12学部で全国最大規模）、その上、入学時の偏差値競争を大学教育でも引き継いで「平均点主義」です。そして「産官学」や大学間の協業はもちろん、大学内の学部間協業も少ないように思います（「自前主義」）。戦後、日本は「中央集権」、ドイツは「地方主権」の道を歩んできて、ドイツの目指した国策で参考になるのは国の研究機関が日本の「省庁タテ割り」と違って、基礎研究は「マックス・プランク研究所」、応用研究は「フラウンホーファー研究所」にわかれ、各研究所が地方の大学とタイアップし各地で「産官学金」が連携し地元産業の特色ある発展を目指してきていることです。私はこの視点で「大学改革」を進めるべきと政府に提言し、現在全国約10の大学で地元の特色ある発展を目指し、「研究機能」を中核に地元の首長さんのリーダーシップのもとに本気で「産官学金」が一体となり取り組んでいるテーマに国の支援金で応援することを始めました。私がこの活動の中で本当に残念に思ったのは、大阪市をはじめ全国の大都市の行政や大学の人たちが自分たちは「地方創

生」の対象ではないと思っていますことです。(東京一極集中で最大のダメージを受けたのは、こういった大都市のはずですが)。

最後になりましたが、今回の「市大」と「府大」の合併を機会に公立大学関係者はもちろん、大阪の行政の人たちがこの合併を単なる「合理化」の視点ではな

く、かつて「医薬」や「証券」の企業の多くが大阪を拠点に頑張っていたように、この分野なら少なくとも日本一、できれば世界一を目指した「新しい大阪」づくりの中核となってほしいと願っています。そして、同窓会の皆様も今回の公立大学のスタートを前向きにとらえて応援してほしいと思います。

開発者の記録

伊藤 博之 (1966年機械工学科卒)



1966年大阪市立大学工学部機械工学科を卒業し、本田技研工業に入社し38年間ホンダで仕事をして来たことを私なりに纏めて見ました。参考になれば幸いです。

私の入社したころのホンダは2輪車が主で4輪車は軽トラックとスポーツカー (S600,800) しかありません。研究所に配属された私は4輪車の開発担当でした。当時研究所に最高顧問の本田宗一郎が毎日来ておりました。N360、H1300の開発部隊で振動騒音を担当しましたが、振動騒音に関心が強い、最高顧問に連日のようにしかり飛ばされ、解決策を直ぐに出せ、知恵は只だからどんどん考えろと怒られながら開発に励みました。しかしながら販売はうまくいかなかった。4輪撤退と言われて4輪部隊としては、全精力で開発に取り組み他社とは違った新しいコンセプトのFF2BOXカーで俊敏に走るCIVICを販売しました。この車にCVCCエンジンを搭載し、アメリカで販売し、その後ACCORDで静粛な車を作り上げ、4輪車の基盤を作り上げました。国内ではCITYを、その後CIVICルネッサンスの合言葉でCRX、3D、4D、シャトルを作り上げ、日本カーオブザイヤーを受賞しました。この時は大変な投資をし、開発費を使いました。

この時には、これが売れてくれなければと寝る時間も惜しんで開発に専念しました。その後開発の総括責任者となり、アメリカで生産する事も含めてCIVICの総仕上げを指揮しました。

この頃にホンダでは社長交代があり新しい体制で開発を行うことになり、4輪事業本部の開発総責任者 (RAD) として本社ビル青山勤務となりました。決めたことは社長、副社長で行うこととなり、非常にスムーズに進めることが出来ました。ホンダにおいても各部門の調整業務が増えてきたので、開発については、RADで決裁出来ることとしました。この頃将来的には燃費が重要になってくると考え、新しいVTEC-Eエンジン

を含め3種類のフォーメーションを作り上げました。

CIVICも発売以来20年経っていたので、若者向けにサンバボディというコンセプトデザインと新ダブルウィッシュボーンサスペンションを採用し、インテリアもブラジル風の仕上げにしました。同時にデルソルという電動オープンを作り上げると共にアメリカ向けには2ドア車を作り、販売台数を揺るぎないものとする事が出来ました。本社では4輪事業本部で新車開発の方針を定め、世界での生産段取り、開発、販売を決めていきました。ホンダとして車種構成を拡げていくことが必要になり、新しいコンセプトのオデッセイを含め複数車種を作りました。この時期開発に対して社長から命題が出て、TQMによるCIVICの開発手法を以後の車作りの基本とするように言われました。この為QCD-No.1の車となるよう世界中のユーザー、販売店、販売担当者を含め徹底的に調査した結果、クオリティーが1番だと結論付けて開発を進めました。又、ホンダの弱点であったSUVがぜひとも必要だと考え、長年の構想を具体的に作る為にCRVを軽量で新しいコンセプトカーとし、視界が良く、扱いの良い新しい4輪駆動方式を持つ車として作り上げました。

その後ヨーロッパホンダの副社長及び研究所社長としてヨーロッパホンダの立て直しに行きました。生産が順調にいけないHUM工場にCRVを投入することで工場の生産が順調になりました。研究所においても現地の採用者の技術向上を常に心掛け、現地スタッフが中心となる組織に作り替えました。

以上色々な事をしてきましたが、主な仕事は新車開発、開発組織作り、新しい開発手法等ホンダの4輪開発全般を進めてきたことであり、常に楽しく仕事をしてきたと自負しております。私は次のことを心掛けてきました。人は経験の産物と考え、経験する機会を持つとともに、物事に貪欲で、外の世界をよく知り、又気

概が一番大切であること、そして、物作りには哲学が必要であり、世の為、人の為、子の為、後世に何が残せるか等の観点から考える必要がある、ということです。

最後に、私が開発を進めてきたCIVICが一昨年50周年となりました。世界170か国で累計2600万台が販売されており、感慨深い限りです。

同窓会だより最終号に寄せて

中尾 隆史 (1974年機械工学科卒)



私は1970年入学、1974年卒業の中尾隆史です。今思うと、工学部に特に興味があったわけではなく、暗記科目が少なく、好きな学科（物理と化学と数3）で受験できる理系ということでもつぶしの効く機械科を受験したというのが実態です。そんな訳で、教養の時代はほぼ毎日杉本町駅前の麻雀屋やビリヤード屋で沈没、ただ専門課程に進んでからは卒論を仕上げねば卒業できないと焦り出し、星野研究室にて、NASAでも適用されているという付着流体素子の実験にこれまでのついでを挽回しようと夜遅くまで、中2階に設置されたタンクと地上の水槽の間を1日何回も上り下りしながらデータを取った記憶が蘇ってきます。しかしこんな状態ですから、技術者としての社会人では全く役立たずであり、結局昔から海外との関りを持ちたいという願望が捨てられず、当時の理系出身者では珍しく、うまく高度経済成長ブームに乗りつつ総合商社（伊藤忠商事）に就職することが出来ました。

ただ折角あこがれの商社に入社できたにも関わらず、国内営業部門の経理担当にアサインされ、これでは海外との関りを持てぬし、大学でまがいなりにも学んだ知識も役に立たず、商社に入った意味がないと腐りかけていたところに、入社2年目の後半になって、当時の「花の自動車本部」への異動を命ぜられ、22歳6か月から60歳で定年退職するまでの37年半、合計19年の5か国の海外駐在を含み、自動車という商材を通じ正に世界をまたにかけた商社マン人生を送ることが出来ま

した。

その中でも私に取っての特筆は、2003年から6年間過ごしたオランダでの、自動車ビジネスの王道である、輸入販売事業会社社長。それは大阪の自動車メーカー様との合弁会社でしたが、同社より好業績を評価され、また社内的にも優良事業会社に授与される経営努力賞候補に挙げられ（結果的に落選すれど）、輝かしい思い出となっています。

海外が長かったせいで、学生時代の友人に会ったり、行事に参加することは叶わなかったのですが、60歳にして、最後の駐在地英国より帰国後は出来るだけ同窓会などに出席、特に市大機械科の関東地区卒業生の集まり「こいさん会」では、2015年から9年間会長職を務めさせて頂くなど、懐かしく友好を温めることが出来ました。

今後、このこいさん会を母体に公大機械科同窓会がより一層発展します様お祈りしつつ、最終号への寄稿の最後のメッセージとさせて頂きます。



オランダでのプレゼン

学び舎の記憶

田中 秀樹 (1977年機械工学科卒)



記憶にはない。生まれたのは京都市内でキリスト教系幼稚園に通い、父の仕事の関係で東京杉並区に移っ

た後は仏教系の園に通ったが、思い出せることはない。母に言わせると泣き虫で両園では先生に抱っこされて

ばかりいたらしい。杉並の現在の街並みはわからないが、家の近くにキャベツやトウモロコシ畑と肥溜めがあり牛が引く荷車さえ見かけることもあった、その頃の武蔵野の風景だけが胸の奥に残っている。

小学校の音楽の先生は志が高く厳しい人だったと記憶している。毎年の運動会で今で言うマーチングバンドのようなことを企画し、その事前練習での指導に泣き出す生徒もいた。私はその他大勢のたてぶえ担当なるべく目立たないようにしていた。

学生運動に参加すると、日本の警察は優秀だからビルの上から顔写真を取られブラックリストに挙げられるぞ、と中学校の理科の先生が授業中に喋りだしたのは、安田講堂事件があったからだろう。その頃は自転車で動ける杉並区内が行動範囲だったが、一人で電車に乗り都心に出た記憶があるのは、そんな先生の話から本郷の大学ではなく、TVでみた新宿西口地下広場フォーク集会の現場に行きたかったのだ、と今は思っている。

中3の冬に再び父の仕事で大阪高槻市に移り住んだ。市内の公立高校に進み、そこでヨシモトの洗礼を受け、級友達との日常会話の中で普通にボケとツッコミが入ることに驚かされた。ラジオで大学受験講座を聞いていたのは、それに続く深夜放送を楽しみにしていたからなのだろうが、ラジオ講座を続けたことで京都の私大に合格できたのかもしれない。最後に受けた市大に合格できたのは思いもよらなかったが、大学に通いだと「幼稚園から含めて学費が一番安い」と母から言

われた記憶がある。大学の月額授業料は千円だった。

オイルショックの影響があったのか、なかなか就職先が決まらなかったが、大阪に本社がある造船会社のコンピュータ部門が分離独立して設立された会社就職できたのは、工学部でFEMのコンピュータ処理やNC工作機の実習をしていたことを評価してくれたからだと思っている。その会社には造船学科のある九大、広大、阪大、府大の先輩同僚が多かったが、市大出身の先輩もいて親身に接してもらい楽しく勤めることができた。印象に残っているのは、本社の研究職の人との会話でウォーターハンマーの話題になり、流体研の輪講で使用したASMEの論文資料を紹介すると、偶然に全く同じ論文を参考にしていて研究室の同志のようにお互い顔を見合わせたことだった。また、担当となったCAD/CAM開発で、主なユーザはものづくりの根幹となる金型製作に関わる会社で、その頃まだ製造現場で実用例が少なかったCAD/CAMソフトの紹介資料作りに、卒論制作や旋盤での実験装置づくりの経験が大いに役立った。

大学での学びは、専門的な技術・知識の習得があるが、そのことに関して物にできなかった自分に情けなく思うが、その学ぶ中での経験・ノウハウがそれ以降の活動に生きてくるものだとして40年以上同じ職場に居たことで実感している。

大阪市立大学は今はいないが、私の記憶から無くなることはない。

同窓会だより最終号に寄せて

弁理士法人伊藤IP特許事務所 **伊藤 和真** (平成15年機械工学科卒・同17年修了)



株式会社ホンダ・レーシング **折原 伸太郎** (平成13年機械工学科卒・同15年修了)



皆様におかれましては、お元気にお過ごしのことと存じます。私は、工学部機械工学科を平成15年に卒業した伊藤和真です。この度、同窓会だより最終号への寄稿という大変貴重な機会をいただきましたので、本寄稿では、前半パートの執筆を伊藤が担当させていただき、後半パートで折原先輩からのメッセージにリレーさせていただきます。

さて、現在、私は弁理士として特許事務所を営み、クライアント様からの無理難題に対応すべく毎日駆け回っているわけですが、学生時代からこの仕事を志していたわけではありませんでした。幼少期から自動車レースが大好きで本当はレーサーになりたかったのです。しかしながら、そのような才能が自分にあるはずもなく、せめて技術の面から自動車に関わることがで

きないかと考えていた折に、大阪市立大学で幸運にも自動車エンジン内のガス流動・燃焼解析の研究を行うことができ、大学院卒業後には、本田技術研究所に就職しF1エンジンの設計にも関わることができました。HondaでのF1業務では、エンジン骨格設計・燃焼設計のセクションリーダーや、車体へのインсталレーション窓口として車体チームとの協業を担当し、非常に充実した時間を過ごすとともに、同窓のよしみということもあり後半パート執筆の折原先輩には大変お世話になりました。

このように、大阪市立大学で学んだことが仕事において大きな糧となっているのですが、卒業生の集まり「こいさん会」(市大機械科の関東地区卒業生の集まり)からの影響もまた、私にとっては大きかったように思います。「こいさん会」での多種多様な活躍をされている先輩方との交流が、当時、HondaでのF1業務に少々燃え尽きを感じていた私にとって、新たな一步を踏み出すきっかけになりました。その結果、冒頭の弁理士としての特許事務所経営の仕事に繋がるのですが、まだまだ自分の可能性を信じて今後も様々な分野にチャレンジしていきたいと思っています！そして、私に新たな一步を踏み出すきっかけを与えてくれたように、この先も卒業生の繋がりが一層発展することを祈願しております。それでは、伊藤からの寄稿は以上とさせていただきます、折原先輩からのメッセージにリレーさせていただきます。

工学部関係者と同窓生の皆様、こんにちは。現在私はHondaのレース活動を司るHRC (Honda Racing Corporation) でF1の現場責任者をしております折原です。F1の現場で働きチャンピオンを獲得することが中学生の頃からの夢でした。今、夢の現場で仕事ができ、充実した時間を過ごしております。しかし、これ

までの過程は順調なものではありませんでした。

88年からのマクラーレンホンダの活躍を見てF1エンジンのエンジニアを志し機械工学科を目指していましたが、一浪の末、応用化学科への回し合格での大阪市立大学への入学となりました。しかし、どうしても機械工学科に入りエンジニアになるという夢を諦めきれず(今にして思えば学科に関係無くエンジニアになる道はありますが、当時の私にはそこまでの見識はありませんでした)、仮面浪人の末、翌年に機械工学科に合格し再入学となりました。

大学院卒業後、本田技術研究所に就職が決まりましたが、希望のF1開発にはなかなか配属されず、しばらくは市販車開発に携わりました。その間も上司には次はF1をやらせて欲しい、と言いつづけてきました。念願叶ったのは入社から10年たった2013年で、2015年からのF1再参戦に向けた新しいパワーユニットの開発に関わりました。ただし、ここからのHondaのF1活動は困難な道のりで、当初は下位に沈む時期が続きました。が、仲間たちと共に自身達を信じ諦めず挑戦と改良を続けた結果、2019年に初優勝、そして2021年には念願のワールドチャンピオンを獲得し、昨年もラスベガスGPでフェルスタッペン選手の4年連続チャンピオン獲得の場に立ち会うことができ、感無量でした。

今の私があるのは、その都度周りの方の理解とサポートがあったおかげです。と同時に、どんな環境でも諦めずに自分自身で夢を追いかけてきたからだとも思っています。若い世代の皆さんの前には将来への無限の可能性が広がっていますが、時には挫折を味わうこともあるでしょう。しかし、どんな時も諦めなければ必ず道は拓けると信じて夢を追いつづけて欲しいと願っております。

世界挑戦を通して感じたこと

坂本 真宏 (平成28年機械工学科卒)



在学中プロボクサーとして活動していた頃、工学部同窓会の諸先輩方には大変お世話になりました。普段学生時代を振り返ることは少なくなってきましたが、同窓会だより最終号への寄稿の機会をいただき、当時を思い返しながら筆を執ることにいたしました。

入学当初はボクシング部に所属し、アマチュアボクシングで競技の魅力に引き込まれました。運よくアマ

チュアで24勝6敗の成績を収めた後、テレビで見たプロの世界に憧れ、やらずに後悔したくないという思いから、2014年にプロボクシングへ転向しました。翌年の全日本新人王トーナメントで優勝し、大学院進学後にはアジアタイトルを獲得。世界ランカーとなり2018年の大晦日、マカオでの世界タイトルマッチに挑むも敗れ翌年に引退しました。

最も下のクラス、4回戦ボーイとしてデビューし、わずか4年で世界タイトルに挑戦できたのは大阪市立大学の学生であったからこそ、多くの方々から応援、ご支援をいただけたおかげに他なりません。非常に恵まれたボクサー人生だったと思います。しかし、世界戦に敗れた後は、皆様の期待に応えられなかった自分を責め、しばらく立ち直れない時期が続きました。そんな中、大学院での研究テーマが酸化チタンに関するものであったこともあり、今もお世話になる先生から大阪市立大学人工光合成研究センターへとお声をかけていただき、以来研究員として学びの多い日々を過ごしています。

「実験がうまくいかなくても失敗じゃない。その方法ではうまくいかないことが分かったんや。」これはその先生がよく口にするトーマス・エジソンの言葉です。世界タイトルマッチでの敗戦も失敗ではなく、挑戦を通して得られた経験はかけがえのないものだと思いが経つにつれ思うようになりました。

多くの方々に支えられ、掲げた目標に挑戦できたことは私の人生にとって大きな財産です。トレーニング中、応援してくださる方々の存在が、それまでの限界を超えさらに振り絞る原動力となりました。当時感じた力が湧き上がる感覚は今も鮮明に覚えています。

こうした環境のおかげで、幾度となく全力を出し切る経験を積み重ね、最後の最後まで手を緩めず取り組む習慣が身についたように思います。余力を残すことを考えず、全力を出すことへの心理的な障壁も小さくなりました。

動けなくなるまで追い込む練習は確かにきついものでしたが、精神的につらいと感じることはありませんでした。つらさどころか、やり切った練習後に感じるのは充実感と高揚感です。夢中になればなるほど「つらい」と感じる感覚は鈍くなっていきます。周囲から

はストイックに見えたとしても、私にとっては好きなことに時間と労力を費やしていただけであり、苦ではありませんでした。この実感は、今の自分にも大きな影響を与えています。

応援し支えてくれる存在、夢中になることの大切さ——。もし、何かに本気で挑戦したことのない別の自分がいたとしたら、これらを伝えたとこで、「でしょうね」と軽く返してくるかもしれません。そんな自分と決定的に違うのは、実感を伴い、腹の底からそう思えるかどうかです。挑戦に失敗はない。挑戦したからこそ得られた経験がある。そう思わせてくれた挑戦に際し、大阪市立大学工学部同窓会の皆様に賜ったご支援とご厚情に、今もなお深く感謝申し上げます。今後の人生においても、臆することなく全力で挑み続けていきます。

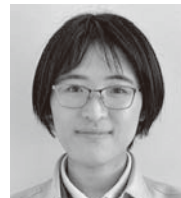
寄稿にあたり、何を書こうかと悩みましたが、学生の方が同窓会報を目にすることを想定し、在学中の経験を綴らせていただきました。

末筆ではございますが、同窓の皆様のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。



同窓会だより最終号に寄せて

(株)島津製作所 橋口 佳実 (2016年機械工学科卒)



同窓会だより最終号という記念すべき号に寄稿の機会を賜りありがとうございます。

私は2018年に前期博士課程を修了し、島津製作所に就職しました。途中約1年の育休取得もありましたが、現在入社7年目となります。

在学中は、流体工学研究室で脇本先生・加藤先生に

大変お世話になり、数値流体力学の研究を行いました。研究のことはもちろん「物事を考え抜く姿勢」をご指導いただいたことを今でも鮮明に覚えています。また学部3年次には、外務省主催のKAKEHASHIプロジェクトで2週間訪米し、多様な文化に触れる機会がございました。温かく送り出してくださった同期・先生方の

おかげで貴重な経験が出来たと思っております。ありがとうございました。

就職後は、質量分析計の設計業務（LCMS-2050という機種に携わりました）に約3年従事したのち、現在は機械設計の効率・品質向上を目的とした研究業務に従事しております。設計部門のみならず製造部門やDX部門など分野の異なる関係者と日々議論し、技術者が各々の能力を最大限発揮できるよう設計業務を刷新しています。本業務は幅広い年齢の方が参画されており私は最年少ですが、「技術やアイデアに年齢は関係ない」という先輩に頂いた言葉を胸に、業務に鋭意取り組んでおります。

正直に申し上げますと、学生時代に専門としていた流体力学と現在の業務内容は一切関連がございません。ただ、だからといって学生時代の経験が無駄、というわけではありません。研究室で先生方よりご指導いた

だいた「物事を考え抜く姿勢」、KAKEHASHIプロジェクトで多様な文化に触れることで得た「様々な方と議論する素地」、と大阪市立大学工学部だからこそ得られた能力が現在の業務に活かされていると思います。私がそうであったように、大阪公立大学の機械工学科で学ぶ在学生には、機械工学の専門的な知識はもちろんのこと、課題を考察し解決策を主体的に発想する能力を身につけていただきたいです。この大学にはその環境が整っています。また同窓会につきましては、在学生のよりどころとなり、大学で得たことを彼・彼女らにフィードバックできるような温かな交流の場になることを期待いたします。

末筆ではございますが、大阪公立大学の益々の発展と、先生方・卒業生・在学生皆様のご健勝ご活躍を心よりお祈り申し上げます。



同窓会だより最終号に寄せて

柳川 重昌（昭和44年応用物理学科卒）



私は今年78歳になりますが、まだ現役で卒業してから56年同じ会社で働いています。市大に入学したころ、当時松下電器の松下幸之助やシャープの早川徳治が時代の寵児であったと思いますが、そんな人たちを夢見て“何か発明して起業家になりたい”と甘い考えでこの応用物理に入りました。入学してから1年間ぐらいはよく勉強もしました。しかし1年生の中頃から7、8人でスタートしていた“自然観研究会”の議論に興味を惹かれ、そちらのほうへ没頭していきました。中身は自然科学を主体にした弁証法的唯物論の討論です。おもにアリストレスの“カテゴリー論”を教材にして討論しながら読んでゆくのですが哲学書であるので非常に時間がかかりました。座長でこの会を呼びかけられたのは漆原さんという先輩の方でした。当時理学部の大山君や歌藤君らリーダーシップのある優秀な学生が多かったように思います。そのころ議論した中で“本質は一つでありそれをそれたらしめるもの”という項目がありました。そこに感銘を受けて後の行動には“何をするにもまず本質を突いていこう”という私の物事の考え方の基本ができたように思います。

4年生の卒業時に叔父に請われて20名ぐらいの小さな機械工具問屋にはいりました。1年ぐらい配達をしてから、口下手であり商品知識もなかったのですが、

大阪近辺の中堅クラス以上の鉄工所を毎日毎日飛び込みで新規開拓に行きました。1年2年3年と続けるうちにだんだんと自信もついて30歳を過ぎるころ“私が行けばどこでもなんとかなる”と思えるようになってきました。“飛び込み訪問も真正面”から、のちにIPOをするときも“一番厳しい監査法人や主幹事証券会社”を選びました。そんな行動が今の私を作ってくれたような気がします。

同窓会については、以前は理事として工学部同窓会に時々出席していましたし、10年ぐらい前から市大全学の青柳会や東京の柳光会にもできるだけ出席しています。中身は別として年を重ねるごとに、同級生や学年は違っても出身大学の方にはなじみを覚えますし、信頼できるように思います。最近では知り合いの府立大出身者も何人かいますが何となくなじみを覚えてきました。やはり若い間は自分の仕事や家庭生活に精いっぱい同窓生のことには関心が薄かったように思います。

最後に若い皆さんには学生時代に学業を身に付け、思い切り運動もして次の社会での、少なくとも30代40代頃の自分自身の理想というものを持って社会に出てほしいと思います。

同窓会だより最終号によせて

宇佐美 照夫（昭和46年応用物理学科卒）



同窓会だよりの最終号に投稿できる機会を与えられましたことは光栄の至りです。母校大阪市立大学がなくなるとは夢にも思っていなかった出来事で、この世は何が起ころかわからない時代なのだと感じています。1967年4月入学し1973年3月に修士課程を修了するまでの6年間杉本キャンパスに通学しました。在学していた6年間には、日本ではじめての千里での日本万国

博覧会や、スキージャンプの金メダルで沸き立った札幌冬季オリンピックが開催されました。また、大学紛争や浅間山荘事件もおこった時代です。

学生時代の思い出は尽きることはありません。ゼミではレーザー光学の研究室で村井先生、曾我部先生にご指導いただきました。社会人となっても2人の先生にはご懇意にいただきました。最近まではお元

気でしたが2020年代になって相次いでお亡くなりになり寂しい限りです。ゼミでは、毎週世界中の新しい論文をみんなで輪講して読解していました。当時、論文は電子媒体ではなく紙媒体で、海外の新しい論文を取り寄せるには時間と手間がかかっていました。国際学会への投稿論文は、締切2週間前くらいまでにタイプライターで作成し国際郵便で発送するような時代でした。講演のスライドやデータの写真は自ら研究室で現像して作成していました。「レーザー光のヘテロダイン検波法」という当時の新鮮なテーマを与えられ、研究室で検出器とするピンポイントダイオードを試行錯誤しながら製作したり、発振しているレーザー光の波長をヘテロダイン検波する方法の確立など指導教員だけでなくゼミの先輩院生や同僚たちに助けられ夜遅くまで実験をくりかえし、大学に泊まったこともよくありました。

毎年11月の大学祭の思い出としては、ゼミでは毎年模擬店を出店していましたが、ある年の模擬店の売り上げが快調だったので、その夜は研究室みんなで飲みあかし翌朝に気がつけば空のビール瓶が60本余りもあったということもありました。ゼミでの恒例行事に夏の登山と海水浴キャンプがあり木曽の御岳に登山したことや丹後半島の経が岬でのキャンプは覚えています。ゼミの帰りには天王寺で下車して阿倍野の医学部から

ジャンジャン横町を通り抜け、新世界のあたりでよく飲んでいました。学生時代の楽しい思い出です。

卒業後、電機メーカーに就職しましたが、塚口にある研究部門に配属されていた間は杉本キャンパスに会社のリクルーターとして毎年新入社員獲得のため先生方をお願いにあがっていました。その後、東京丸の内の本社に転勤となり母校には疎遠になってしまいましたが、会社では社内大学同窓会で親睦を深め、同窓の工学部の先輩たちから暖かい支援を受け、同窓のありがたみを何回となく体感しました。

大学教員に転職してからは、電気工学科の非常勤講師として杉本キャンパスを訪れる機会ができた懐かしい工学部の教室で講義を担当していました。建物の内部は学生のころとあまりかわっていませんでしたが、建物の外の景色は変わっていました、工学部から理学部への通路は樹木が成長して風格ができていました。また、昨年には経済学研究科で大学院生に集中講義を、専門地区にある時計台の1号館の教室で担当しました。その時には、1号館前の広場の芝生にあったシュロの木が伐採されて景色が変わっていて驚きでした。

最後に、2025年3月に工学部同窓会は解散となることは残念ですが、新たに設立された学科別同窓会は新しい大学との密なつながりを構築して、大学の発展に大いに貢献されることを期待いたします。

光物性工学研究室で学んだEIGEN

NHK 田中 功（平成元年応用物理学科卒・平成3年前期修了・平成6年後期修了）



この度、記念すべき「工学部同窓会だより最終号」への寄稿の機会を頂き、大変光栄に存じます。

私は1985年に大阪市大に入学しました。学部時代は体育会弓道部に所属し、春の新人戦、真夏の旧三商大戦、長い秋のリーグ戦、冬の寒稽古など、今でも苦しかった四季折々の思い出が浮かびます。4回生への進級に際し、弓道部の先輩の誘いで固体物理学の授業を担当されていた西村仁先生（現、大阪市立大学名誉教授）の光物性工学研究室を希望し、配属となりました。そのタイミングで中山正昭先生（現、大阪市立大学名誉教授）が当研究室に着任され、以降6年間、中山先生のもとで半導体超格子の研究に専念しました。当

初、研究室には超格子の研究設備はほとんど無かったため、工作センターで旋盤などの工作機器を使用して実験装置の製作から取り掛かりました。さらに実験データをコンピューターに取り込むため、電子回路の製作、



プログラミングに取り組みました。モニター画面に発光スペクトルがリアルタイムで描画されるのを見て大変感動した覚えがあります。当時、無いものは自分で作り、新たな発見を目指して研究室メンバーは毎晩遅くまで実験に励んでいました。設備が制限された研究環境は逆に懸命な思考と工夫が身に付き、そのような状況下でも量子力学の神髄に近づけた研究成果を上げることができたことは、醍醐味を感じるとともに自信となりました。研究室で真理を探究した経験は、卒業後の技術研究所や放送局での研究者・エンジニアとしての仕事のベースとともに財産となっています。

昨年2024年5月にコロナ禍で延期されていた中山先生の退職記念祝賀会が金大貴教授の呼びかけで開催されました。この機に私は先生の功績だけでなく思いを

残したい一心で、先生、スタッフ、後輩たちに原稿を依頼、編集し、退職記念誌が完成しました。記念誌制作は記憶を形として残すためにもおすすめです。今年の1月25日には、西村先生の米寿のお祝い会が開かれ、「かくしゃく」とした先生のお元気を前に、約30年前に戻り昔話に花が咲きました（写真）。今でも私が企画し過酷だった金剛山遠足（ほぼ登山）の話に盛り上がりました。懐が深く温厚な西村先生から「胆力」、研究に厳しい中山先生から「執念」を学び得た学生たちがEIGEN（量子力学の基本となるeigenfunctionなどに使われる言葉で、オリジナリティの高い固有の研究を目指すことを表現）を追求する大阪市立大学・光物性工学研究室の素晴らしさを改めて感じました。

最終号に寄せて、近況のご報告と新同窓会への期待

小島 磨（1997年応用物理学科卒・1999年前期修了・2005年後期修了）



目まぐるしく変化する時代ではありますが、皆様、お元気ででしょうか。同窓会だよりの最終号に寄稿させて頂く機会をいただき、大変な名誉と同時に、プレッシャーも感じています。1999年に修士課程修了後に三洋電機株式会社に入社し、その後、2005年に博士課程を修了して独立行政法人情報通信研究機構、2006年に神戸大学工学部電気電子工学科を経て、2022年から千葉工業大学で教授として勤務しております。大学で学んだ半導体光物性に関する知識をもとに、これまで20年近く研究に携わってきました。このように長きにわたり研究を続けてこられたのも、学生時代はそれほど真面目ではなかった自分を導いてくださった応用物理学科の多くの先生方、友人達、先輩方と後輩の皆様ののおかげと感謝しております。また、その間、英国のシェフィールド大学やグラスゴー大学に滞在をする機会を得たり、文部科学省の学術調査官を2年間担当させて頂くなど、様々な経験をすることができました。

学生の頃は枚方の実家から1時間半ほどかけて通学していて、初めての電車通学でその距離の長さに挫折しそうになったりもしましたが、友人達に支えられ、無事に卒業、修了することができました。自分が千葉に引っ越してきたのを機に、その友人達とも会うことができました。学生生活は通算で9年ということになるのですが、記憶も曖昧になっていく中で今に至るきっか

けとなったのは、1998年3月の初めての物理学会での発表と同年の11月にアメリカのボストンで開催された国際会議への参加でした。このような学会での発表や他の大学の先生方や同世代の人達と議論することの楽しさが、今思えば研究者を職業として選択するきっかけになったように思います。

ところで、このボストンに行ったことで、海外旅行の楽しさに目覚めました。それまでは、「国内旅行で十分、何も言葉のわからないところに行く必要なんてない」と思っていたのですが、ボストンの街を歩いているうちに考えが変わり、「海外ってなんて面白いんだ!」と思うようになりました。一緒に行っていた先生に、着いた翌日の朝食後に「僕はこっちに行くから。じゃ



同期の集まり

あ後で！」と言われ、一人取り残されて「初めての海外なのに」と不安になりましたが、自由時間を与えられたと楽しむ方に気持ちを切り替えたのが功を奏したと考えています。それ以来、毎年どこか新しい国に行くことを目標にしていたのですが、コロナ禍でその記録(?)が30を超えたところで途絶えてしまいました。海外旅行の制限もなくなった昨年からは、行ったことがない国を目指していき、円安や物価高など懐具合を寂くさせる要因も多いですが、現在は34(31か国、2地域、1自治州)まで更新しており、まずは50を目指しているところです。このように世界の様々な地域を歩いていると、新しい文化や価値観に触れるというだけでなく、自分の中にある積極性のようなものも引き出されていると感じます。是非、若い世代の方々には、外に目を向けて、一つでも多くのことを実際に

自分の目で見て、体験していただきたいと常々考えています。困難も多い時代ですが、世界は驚きにあふれていて、それに触れる面白さを感じることは自身の成長に繋がると思います。

さて、最後になりますが、これで大阪市立大学工学部としての同窓会が解散となり、大阪公立大学電気クラブに移行すると伺っています。電子物理工学科だけでも17の研究グループがあり、非常に幅広い研究が行われています。このことから、非常に幅広い分野や企業で活躍する卒業生が輩出されると期待できます。新しい同窓会が、卒業年度や専門性、住んでいる地域等が異なっているとしても、これらの卒業生をつなぐ架け橋となることを期待するとともに、同窓会の皆様の益々のご活躍とご健勝を陰ながら祈念しております。

自由と創造～混迷のAI時代に大事にしたいこと～

田中 勇 (平成10年応用物理学科卒・平成12年前期修了・平成15年後期修了)



大阪市大に入学して31年、卒業して京セラに就職して22年がたちました。「失われた30年」と呼ばれる経済停滞期に一人の研究者から社会人となり、世の役に立つためがむしゃらに生きてきました。本稿では、大阪市大で学んだことを振り返りつつ、これからの時代に大事にしたい「自由と創造」について述べさせていただきます。

在学時には光物性工学研究室で薄膜光物性の研究に従事しました。京セラに入社した後、セラミック、薄膜太陽電池、宇宙新規事業の研究開発に従事してきました。3つの開発を通じて2つの重要な学びがありました。

- ①人・金・プレッシャーをかければスピードは上がるが、イノベーションは起きない。
- ②少人数に対して自由に考える時間を確保すれば、イノベーションにつながる。

大企業では②を経験できる研究者は稀です。しかし幸いにも私は「自由に考える時間」の確保に成功し、いくつかのイノベーションの瞬間に立ち会えました。

私の「自由に考える」力は、大学の研究室で身につけたと考えています。昨年、恩師である中山先生の退官記念講演会にて昔の逸話をお聞きしました。中山先生が

大阪市大に来られたばかりの頃に上司の西村先生から言われたそうです。

「中山さん、うちにはお金はないよ。でもここには自由がある」と。

私が入った'98年の研究室はまだ手作りが多く、研究費も潤沢ではありませんでした。ゴミ捨て場から中古をひろってきて改造したり、金属・ガラス細工で実験装置を組み上げたりと、恵まれた環境とは言えませんでした。しかし、そこで過ごした時間はかけがえない学びの時間でした。そこはまさに「自由と創造」の場でした。中山先生は仕事に厳しい人なので学生にとっては修行の場でもありましたが、「真理の探求」の理念に沿って前進していれば、無限と言えるほどの考える時間とチャレンジの機会を与えていただける場でした。

AI時代の到来でさらなる混迷が深まる現在、大学には各大学の特徴に根ざした多様なイノベーションが期待されています。その中で、大学の存在価値は人間らしく自由に考えることのできる「自由と創造の場」に集約されていくと私は考えます。

2025年は万博の年、母校・大阪公立大学が大阪人の自由と創造の場として益々発展していくことを祈念いたします。

学生の皆様、卒業生の皆様へ

小村 慎吾 (2006年応用物理学科卒)



皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

私は2008年3月に電子情報系専攻 応用物理学講座 光物性工学研究室を卒業し、現在はトヨタ自動車(株)でリチウムイオン二次電池の開発に携わっております。卒業から17年が過ぎ、今回の寄稿を機に、大阪市立大学での学びとご縁を改めて振り返りました。

思い返せば、入学試験当日、試験監督の先生方の存在が私には独特に感じられ、極度に緊張したことを覚えています。後に、そのお二人が中山先生と溝口先生であり、その研究室で学び、多くの先輩方と出会い、それが今に繋がることは、当時の私には想像もつきませんでした。先日、中山先生の退官記念パーティーで皆さんと再会し(写真)、思い出話に華を咲かせる中で、改めて巡り合えた諸先輩方、仲間の皆さんに支えられ、

育てていただいたのだと実感しました。

研究室での経験は、今でも私の原点です。努力を惜しまず研究に打ち込む先輩に憧れ、優秀な後輩に刺激を受けながら、研究室で夜な夜な仲間とカップラーメンをすすった日々。国内外の学会に参加し、世界の優れた研究者たちと交流する中で、自分の未熟さを痛感しつつ、成長する機会を得ました。

社会人になってからは、9年間にわたり「実務技術論」の講義で在学生に向けて自身の経験をお話しする機会をいただきました。この講義を通じて、自分自身も若き日の思いを振り返り、仕事への向き合い方を再確認する貴重な時間となりました。

これから社会へ羽ばたく皆さんへ、私からお伝えできることがあるとすれば、「全力で挑戦すること」です。学業、恋愛、趣味——どれもが、あなたの人生を

形作る大切なピースとなります。そして、先輩や異なる立場の人と積極的に関わってください。価値観の違いに戸惑うこともあるかもしれませんが、その経験こそが成長につながります。

最後に、これまで同窓会のつながりを大切に紡いでこられた歴代会長や諸先輩方に、心より感謝申し上げます。



励起された原点 — 光物性研究室の思い出

山岡 優 (平成27年電子・物理工学科卒・同29年前期博士修了・令和3年後期博士修了)



同窓会の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。このたび最終号への寄稿の機会をいただき、大変光栄に存じます。ここでは、大阪市大での学生生活の中から、私にとって新しい世

界を開くきっかけとなった、中山正昭教授のご指導の下での光物性研究室での事始めについて述べさせていただきます。

私は学部4年時の平成27年に光物性研究室に配属さ

れました。研究室には物性評価に必要な装置が一通り揃い、光学部品用のロッドなどの小物から結晶成長装置に至るまで、多くの設備が自作で整えられている環境の中、私も旋盤などを使って小物を作るところから研究は始まりました。並行して、研究室の通例である“プレ卒”という卒研前の研究指導を先輩から受けた後、私は、「 β -Ga₂O₃単結晶における自己束縛励起子の光物性」という初代のテーマを与えられました。テーマを知らされた際の「世界のトップを目指そう」という先生の言葉によって、平凡に授業をこなしてきただけの私は、初めて高い目標を持つことができ、目が覚めるような気持ちになったことを思い出します。このテーマの第一歩は、当時証拠が明確でなかった自己束縛励起子の安定性を分光学的に評価することでした。テーマが決まったその日に、好奇心の赴くままに、クライオスタットにサンプルをセットして吸収スペクトルの温度依存性を測定し、得られたデータが外挿により見事に一点に収束するのを目の当たりにしました。当時はその物理は良く分からないながらも、その不思議

さと美しさに強く感動しました。さらに、その成果を国際会議（於モントリオール）で発表する機会を得たときは、未知の領域に踏み出すようで、嬉しくてたまらなかったことを記憶しています。思い返せばこういった感情が私の原点であり、現在に至るまで原動力になっています。その後、修士課程を経てNTT研究所に進み、現在に至るまで研究開発の仕事に携わっています（入社後、光物性研究室で社会人博士課程を修了）。現職場においても幸運なことに、研究を通じて感動する瞬間を何度も経験しています。

以上のように、大阪市大の光物性研究室は私に大きな変化のきっかけを与え、今でもその経験とスキルが私の基盤となっていることを確信しています。大学統合により、大阪市大は大阪公大となりましたが、これまで受け継がれてきたものがより洗練され、さらなる発展を遂げることを信じております。そして、現学生・卒業生の皆様に多くの良い変化がもたらされることを期待するとともに、皆様のさらなるご活躍を心より願っております。



研究室の仲間と

大阪市立大学工学部電気科・漕艇部卒の生き様(一例)



森脇 郁朗 (昭和43年漕艇部卒、昭和44年電気工学科卒)

卒業生の皆様には、益々ご健勝の事と、お慶び申し上げます。

この度、“工学部同窓会だより第39号(最終号)への寄稿”機会を頂き、その内容に迷いながら、“幼少期の教育経験が一生の財産”と云うテーマについて市大工学部兼漕艇部卒を自覚しながら自身経験した事の羅列からしてみようと思います。先ず、家族からの教えとそれ等を元に心得としてきた事は：

- ①欲を持つ事 → その欲に振り回される事無く、欲を振り回し引き金に！
- ②金で金を稼ぐな → 汗をかかず楽をして人生のやり甲斐は得られない！
- ③美田を残さず → 子孫に財産では無く“自分で考え生きる心得”を残す！
- ④苦は楽の種、楽は苦の種 → 人間も動物、動く(苦)事の大切さ！
- ⑤迷ったら、先ずやる → やらなければ、貴重な失敗経験すら出来ない

と“この様な心得で精一杯やって来た”と思いながら振り返ると“生涯勤め上げる事が当然”の時代に、電気・半導体の中小企業ばかりを転々と渡り歩き、会社が大きく安定する前に辞し、敢えて綱渡りを繰り返したが、大会社では難しかったであろう、縦横無尽と言える仕事が出来た事、悔いなし！

変人と呼ばれる性格からか、立身出世より、“好きな

事＝先端技術を駆使したい”に目移りして来た結果でしょう、その目移り例として：高精度ICとAD/DAコンバーターの国内導入定着：輸入品を日本品質レベルへ：日系海外企業での現調コスト品質改善：パワー半導体の先端検査技術の国内導入：海外企業の国内立ち上げ：そして今、更に、次へと、気儘に国際化(垣根払い)とやらに精出す日々です！と、この様な仕事を円滑に進めるには“私利私欲”は大敵、前述の“意欲を持つも、金で金を稼がず、美田を残さず！…”と“無欲の欲望”で“動く事”が大切！そして、心する事は“苦は楽の種、楽は苦の種”、動物＝自然人として物事を受入れ、苦難試練は当然：楽をする事の愚かしさを想い、精一杯の心を持って冷静判断し、食える今を喜び、人間として内面を磨き、外見を磨かず＝見栄を張らずにと、この様な心情で100%突き進んで来たかは疑問ながら、多くの友人先達に恵まれ、結果として強くなれた、と云う事は“幼少期の教育・経験を大切に”と“シゴキ・漕艇に没入”は、正しかったと、これから世界を股にと物事を志す若い皆さんにお伝えしたいと思う次第です！今一つ、人間が持つ“欲”で人生が決まると考えられますが、特に幼児期に確立した“欲”への考え方とそれへの対応は一生伴うので“真っ白、無垢な子供達”への、教育の大切さは言うまでも無いが、その指導に“私利私欲”は禁中の菌となります。そして取組対象を“好き”にさせる事が指導の最優先



事項、それで目的の90%達成、好きになった者には“シゴキもパワハラもイジメも無し”で、真に強い子となります！今から思えば、末は博士か大臣か大企業人とかに縁無い者が、市大漕艇部での筋金指導で、その後の体力気力の元となり、生涯スポーツともなり、一生の宝となった事に感謝しております。その宝を元に“生涯漕艇を続け(例：<<https://youtu.be/RnbiUDxV-1I>>)、金・力を残せずも、官民大手看板に頼れずとも、辞した全会社が 대기업となり、80歳の今も動ける人生”こう云う人生も良いのではと言える生き方を、やって来られた事は本望だったと思えます。以上、この記述に見得るものが有りましたら大変幸いです。末筆になりましたが、皆様方にも、健康にご留意頂き、益々のご活躍をお祈り致します。

RnbiUDxV-1I)、金・力を残せずも、官民大手看板に頼れずとも、辞した全会社が 대기업となり、80歳の今も動ける人生”こう云う人生も良いのではと言える生き方を、やって来られた事は本望だったと思えます。以上、この記述に見得るものが有りましたら大変幸いです。末筆になりましたが、皆様方にも、健康にご留意頂き、益々のご活躍をお祈り致します。

同窓会だより最終号に寄せて

山口 南海夫 (昭和44年電気工学科卒)



家電製造の会社を退職し6年目の2013年の春、大阪天神橋にある「大阪くらしの今昔館」で開催中の「昭和レトロ家電展」を見学しました。とあるコーナーを曲がったところに写真の「イオナイザー」が展示されているのを発見しました。そのとたん、私はしばらく動けませんでした。なぜならそれは、私が工業高校を卒業して就職し、3年後に再び市大に入学して電気の平井研、安藤研に在籍するきっかけにもなった商品であったからです。

昭和30年代の高度成長とともに、環境問題が重視されるようになり、空気中のマイナスイオン不足が問題視されるようになりました。「イオナイザー」は、空気中でコロナ放電を発生させ、空気にマイナスイオンを付加する装置で、所属職場の開発テーマでありました。工業高校を卒業して就職した私は、本来電気絶縁物の研究をする職場で、コロナ放電に耐える絶縁物の研究開発をしていました。同時に並行して同じ技術で開発できるイオナイザー開発もしていたのです。私の上司



展示されていた「イオナイザー」

はテレビの高電圧発生回路とブロッキング発振回路を組み合わす方法で、私に回路設計を指示しました。新米ではありましたが、見様見真似で回路設計をし、実験して回路動作を確認してゆきました。しばらくして動作する回路ができましたが高価なトランジスタを多く使うので材料費が高いものしかできません。幾度となくダメ出しを食らって再挑戦しているうちに、トランジスタをたった2石で構成する回路にたどり着きました。最後にそれが採用されましたが、やっているうちに、何と回路設計とは面白いものかと魅了されるとともにその効果の大きさに驚いたのです。しかし同時に自分の技術力のなさを思い知らされました。もっと自分に実力をつける必要性を強烈に感じました。このエネルギーはその後私を動かし、市大卒業後もカラーテレビの回路設計や、LSI開発に従事する原動力にもなりました。懐かしい思い出です。

4月は新しい卒業生が仕事を始める時期です。配属された職場ではやりがいのあるテーマばかりあるとは言えません。どこにやりがいとか、生きがいを見つけるかは自分自身の取り組む姿勢で大きく変わってきます。ぜひ「自分で面白さを発見する姿勢」を貫いてほしいと思います。面白さは成果を生み出す力になるとともに達成感を呼び起こす原動力になるでしょう。

退職して大阪に帰ってきてから急に学生時代の友達と会いたくなりました。そこで同窓会事務所に顔を出して、クラス会発足の提案をし、同年代の南教授を紹介してもらいました。昭和44年卒業生は大学紛争などで留年するなど、メンバーの数が少なかったので年度を前後に数年広げたのです。2008年第1回杉友会を開催して以降、毎年6月に開催し、今年で14回目になります。おかげで毎年6月になると楽しい時間を過ごしています。

大阪公立大学の未来に向けて

南 繁行 (1970年電気工学科卒 1972年電気工学専攻修士課程修了 現在大阪公立大学教員)



【私と大学】 杉本町に18歳で通い始めてから今年で59年目になる。まだ大学の人工光合成研究センターで教員として仕事をしている。幸いスタッフに恵まれ、研究員も10数名いる。大阪・関西万博のための研究が当面の仕事になっている。大学では素晴らしい恩師と巡り会い、人一倍の愛校心も持つことが出来た。ただ、大学は紛争後、その傷跡が長い間残り、発展に大きなブレーキがかかったことは確かだ。

【研究】 幸い、長い間多額の研究費を企業から貰って研究を続けている。その秘訣は一言でいえば「信用」だと言える。何か依頼されたとき、納期を守り仕様書通りの結果を出すのは当たり前だ。相手先が期待する10倍の成果を日夜努力して仕上げて、一見無駄に見える。しかし、人はそこを見ている。「あの人なら」という信頼が力を発揮する時がいつか来る。仕事を見くびらず、決して出し惜しみをしないことが肝要だ。

【工学部黎明期】 発足当時の工学部同窓会には都島高専卒業の諸先輩が来られ、当時のお話を聞くことができた。都島高専は工学部の前身である。同窓会として、工学部が出来た頃の話、平井平八郎先生や北浜安夫先生にインタビューする機会があった。今も録音テープは大学史資料室に在る。実験機材がなくて電電公社などから寄付を受け、測定器などをトラックで運んだ苦労話を聞いた。

【大阪市立大学とは何だったか】 私が入学した前年に京大に移籍された梅棹忠男氏は、実は16年間も大阪市大教員であった。日経の私の履歴書記事を増補した著書「行為と妄想」は文庫本で約400ページに及ぶが、大阪市大についての記載はほんの数行しかなく、「大阪市大は大阪市の子弟に、処世のための実学を教える装置であった」と手厳しい。これを聞いて異論が噴出しそうだが、ある意味、当時の大阪市大を的確に見ていたと言えなくもない。優れた社会人を育て世に出すことも大学の重要な使命だ。日本一の実業大学として輝くことも、一つの活路であったかもしれない。

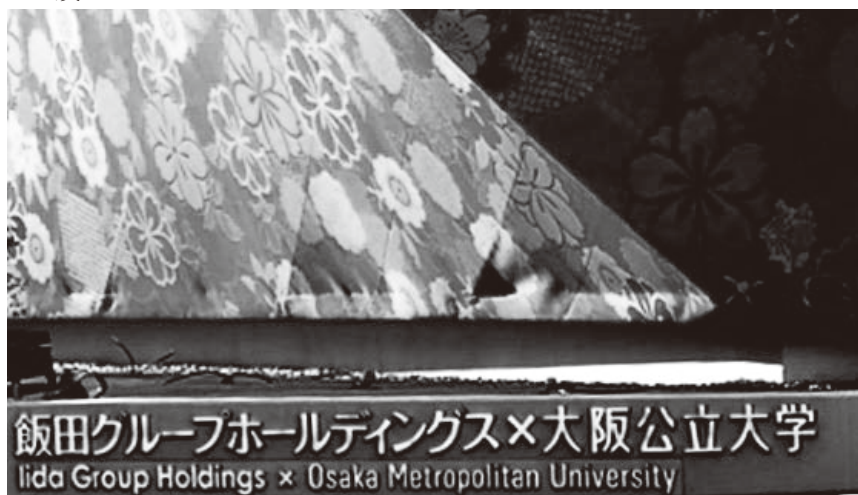
【大学の理想と現実】 大阪市大が創設された時、「優れた研究者こそが優れ

た教育者だ」という理念に基づき、教養部を設置しなかった。現実はそのような卓越した講義で満足したことはない、と反論される卒業生も多いはずだ。最近になって、学生による教員評価アンケートなどが功を奏し、見違えるほど改善はされてきたが、我々の時代は拙劣であった。

【ボート祭】 140年あまり続いた伝統行事で、研究室でしばしば参加した。一体感と感動が忘れられない行事であったが、コロナの時期に中止となり、公立大学になって、残念なことに途絶えてしまった。

【市大府大合併】 合併の話が出てきた折、当時の市大教員の多くは、正夢にならぬことを願っていただろう。それが現実になった。電気工学科にも懇親の同窓会があった。2009年に電気工学科が情報学科と応物学科に真っ二つにされた時点で、消滅してしまい、今回の大学合併とは反対の憂き目を味わった。大学合併で解散となった工学部同窓会会員も悲憤の涙を流すことになった。

【市大同窓生の想い】 今後、大阪市大の卒業生が大阪公立大を母校と思えるかどうかがかギだ。ホームカミングデーもそうだ。大阪・関西万博で、世界で初めて本学がパビリオンを出す（写真）が、同窓生の関心度の低さは、その困難さを象徴している。杉本の工学部棟も解体予定で、夏草繁る野原となる。が、森ノ宮に本部が移った。この秋には新キャンパスも完成だ。公立大が大発展し、両大学卒業生にとって誇りの拠り所となることを期待しよう。



思い出

株式会社TMEIC 宮崎 聖 (1988年電気工学科卒)



私は1988年に電気工学科を卒業し、1990年に電気工学専攻を修了しました。在学中は電気機器学研究室に所属し、永久磁石同期電動機を電力変換器（インバータ）で位置センサレス駆動する制御の研究に従事しました。大晦日の学会締め切りギリギリに論文を仕上げ、大阪中央郵便局までハンドキャリーしたこともあったなあと、懐かしく思い出します。卒論時期には数日研究室に泊まりこんだこともあり、そのときの足の匂いなんとも香ばしかったことを思い出します。働き方改革等が叫ばれている昨今で、社会人の残業はかなり減ったと感じておりますが、理系学生の多忙さは、今も変わらないのではないのでしょうか。杉本町界限には、安価でボリュームのあるお店があり、特にランチハウスハヤシはコスパ抜群で、カロのレモンライスも美味だったことを覚えています。キャンパスライフでは高校時代に引き続き、体育会系硬式テニス部に入部しましたが、懂れていたキャンパスライフとは程遠い、厳しい練習の日々で、1年の夏で退部し、その後はテニスサークルと落研に所属し、キャンパスライフをエンジョイさせて頂きました。先生から勧められた東芝に入社し、学生時代の研究テーマと同様のモータドライ

ブ用インバータ開発設計部門で、制御基板開発や制御ソフトウェア開発に従事しました。丁度インバータ主回路の高圧化ができる3レベル式の黎明期で、制御基板もリニューアルする必要があり、大学時代に慣れ親しんだ、デジタルシグナルプロセッサを適用し、アセンブラ言語でプログラミングしました。出来上がった製品を製鉄所圧延機駆動装置として納入して、現地調整にも参加しました。真っ赤に加熱された鉄が圧延機に噛みこむとドーンという轟音と共に床の揺れを感じ、自らが作り込んだ装置で製鉄されていることを全身で実感できた感動は今でも忘れられない、モノづくりエンジニアの喜びの一つになっています。

2003年10月、東芝と三菱電機の産業システム部門から成る東芝三菱電機産業システム株式会社（2024年4月に株式会社TMEIC（ティーマイク）に社名変更）に移籍しました。モータドライブ部門は府中に集結することになり、三菱電機神戸と長崎からもメンバが府中に集結しました。そのメンバの中に市大出身者及び府大出身者が数名いて、今も一緒に働いています。新学科別同窓会での新たな出会いや交流を楽しみにしています。

同窓会だより最終号によせて

桑田 朗子 (1994年電気工学科卒、96年修了)



同窓会の活動はほとんどできていない私が最終号に寄稿するのは恥ずかしいのが正直なところですが、電気工学科出身の一女性の立場で少し振り返ってみます。

所属していた電気機器学研究室では学術情報総合センターに導入される図書の無人搬送システムに関わりしました。当時は藤井知生先生、建部渉先生、山田正一郎先生がおられ、大変お世話になりました（村治雅文先生とも一緒しました）。特に、学部卒業時から採用が急減し進路については悩みました。両親は働き続けること前提で結婚出産前に会社で実績を積んでおくため学部で就職するのがいいという立場でしたが、先生方からはメーカーの技術職採用が修士卒重視に変化して

きていることもあるので進学を考えているなら進学するとよい、と背中を押していただき前期博士課程に進学することにしました。

進学後も採用状況は改善しませんでした。先生や諸先輩からお力添えをいただき運よく三菱電機株式会社の研究所で働く機会を得ることができました。会社では一貫してパワーエレクトロニクス関連の研究開発部署に所属しております。各地の製作所の方と色々な製品を担当してきましたが平社員のままですし、こつこつと学会活動に励むのも得意ではなく社外で通用する地位も築けていません。

ただ、過去と一緒に仕事をした方と出会ってお話を

したり、以前の検討内容の問い合わせをいただいたり、現在の課題を相談いただいたり、逆にこちらの問い合わせに親切に答えてくださったり、ということがたくさんあります。そんなとき、これまでの仕事で築いたものがあり、微力ながらも事業貢献や社会への貢献ができていてと思ってよいかなと感じます。大学時代に直接の技術分野の知識やスキルというよりは研究開発の基本、常識や物事のとらえ方などを身に付けることができたことに感謝しています。

また、下の子が今年成人となり、生まれた頃からは社会も変わってきています。それでも女性の技術職はなかなか増えてこず、今ならではの悩みもあるようです。何が正しくどうすべき、ということではないですが、自分の持っている「ふつう」にこだわり過ぎず、「自由にやっつけていい」、と考え進んできた人がいることも知らせていきたいです。

最後に、公立大工学部が市大の流れも継承して発展していくことに期待しております。

女一人の学生時代の思い出

株式会社オートネットワーク技術研究所（住友電工グループ） 工学博士
北島 未規（2005年電気工学科卒 2008年後期修了）



今回、同窓会報の最終号への寄稿の機会をいただき心より感謝いたします。当時を思い出し、今の自分を省みる良い機会になりました。私は2000年に電気科に入学しましたが動機が少々不純で、当時進路相談時に豊かな生活を送るために大手企業に就職することを将来の夢と設定し、就職率が良いというアドバイスで電気系学科への受験を決めました。ただそもそも工学部で何をするのかも調べず、ただ大人数の中に入るのに不安を感じ、学科での人数が少ないことでアットホームな印象を持った大阪市立大学を目指すことにしました。入学後の初めての集まりで、女子高出身の私は女性一人だけという環境にショックを受けてこの先楽しく過ごせるのか不安にはなりましたが、他にも女性一人の学科があり、同性ということで強い絆を築くことができました。同時にこの時期に男性社会に慣れる練習を少しずつさせてもらえたのかもしれない。今も男女問わず工学部の友人と交流があり、悩みを直接相

談することもあります。研究室では電磁気学の南教授のお蔭で多彩な経験ができ、大学生活が一段と明るくなりました。自動車分野での研究活動のひとつに四国で開催される電気自動車ラリーへの参加がありました。私達の代では研究室でEVに改造したトラックと水素タンクと燃料電池を搭載した一人乗りモビリティで四国の公道を走行できるイベントで、とても貴重な経験をしました(写真)。その出場を通して、バイク用のバッテリーで走る一人乗りモビリティのレース、ソーラーカーレースに情熱さげる人達との素敵な出会いもありました。また学会での論文発表、国際会議とそのオープニングセレモニー参加もキラキラとした楽しい思い出です。現在は就職先から出向中なのですが、その会社は女性がもっと少なく、仲間の女性たちと仕事と育児との自分たちが納得できる両立方法の模索に苦労している状況です。働き方に社内で前例が少ない存在であるために期待と異なる状況でも相談する先が少なく、悩



み落ち込むこともよくありますが、娘達の存在が前向きな考えにしてくれて、日々勉強だと思わせてくれます。また理工系学部入試への女性優遇措置で今後増えてくると期待する女性社員の少しでも役に立てるよう

に、会社での前例を増やし若い世代の仲間づくりに貢献していきたいとも考えています。最後になりましたが、学生時代お世話になりました先生方、同窓生の皆様のより一層のご健勝とご活躍をお祈りしております。

研究室生活の思い出と新大学への期待



安在 大祐 (2006年情報工学科卒)

私は2006年3月に旧情報工学科を卒業、2008年3月と2011年3月に旧電子情報系専攻の前期と後期博士課程をそれぞれ修了しました。学部4年生の時に当時の通信システム研究室に配属され、故原晋介教授の基で厳しいながらも一人の研究者として自立できるようにご指導いただき、現在は研究者として活動することができています。原先生のご指導の中には、学生一人ひとりの自立性や自主性を非常に大切にされていた印象があったと現在振り返ると感じています。先生からは「自分はどうか考えるのか」という問いかけをいただくことが多くありました。研究者としてどうあるべきか先生自身も自分に厳しく、その背中を見ながら自立した研究者になるために必要なことを数多く学ばせていただきました。研究室生活では、原先生が赴任された年に研究室配属されたこともあり、先輩や同級生、後に入ってくる後輩たちと新しい研究室を作りながら楽しい時間を過ごしました。研究や輪講の準備は大変なときもありましたが、研究室のメンバーと協力しながら一緒に勉強をした経験は今では大切な思い出になっています。研究室には複数の先生がいらっ

した雰囲気、研究活動の厳しさと研究室生活の楽しさのメリハリが良いバランスで成り立っていたと思います。現在は大学教員として研究室を運営していますが、学生の自主性を重んじた研究室の運営は簡単ではなく、良い経験をさせていただいた研究室を運営いただいた当時の先生方に深く感謝しています。

大阪市立大学と大阪府立大学が合併し、大阪公立大学として新しく運営されていくと伺いました。私の所属していた当時の大学から大きく変わってしまいますが、大阪の中心的な大きな存在感のある新しい大学として、特にこれからの若い学生にとってはより魅力的になっていくのではないかと期待しています。私自身のこととなり恐縮ですが、2025年4月より大阪公立大学に教授として赴任させていただくことになりました。大阪市立大学時代に学ばせていただいたことを今度は教員として学生の皆さんにお返ししながら研究の楽しさや面白さを伝えていき、新しい大阪公立大学の発展に貢献していきたいと考えています。

最後となりましたが、皆様のご健勝と今後の益々のご活躍を心より祈念いたしております。



研究室仲間と

新大学への期待



三浦 洋三 (昭和42年応用化学科卒)

共に公立大学である大阪府立大学と大阪市立大学の統合は2022年の4月に行われ、大阪公立大学という名称に変更されました。両大学は、共に関西では広く知れ渡っていますが、国立大学と比較すると、両大学ともに規模はそれほど大きくはなく、そのために、大学の知名度は、それほど全国的に知れ渡っていると言えないと思われます。しかし、今回の両校の統合より設立された大阪公立大学は、その規模や教員の充実度、研究内容等で、他大学に負けない充実した大学になると期待されます。

両大学の本部は、共に大阪府内にあります。大阪市立大学のキャンパスは杉本および阿倍野に、大阪府立大学のキャンパスは中百舌鳥、羽曳野および臨空にありました。これからわかるように、近いところで両大学間の距離はわずか5km程度しかありません。これまで両大学間での交流はそれほど盛んではなかったと思

われます。しかし、今回の両大学の統合によって生まれる新大学は、その規模は格段に大きくなり、授業や研究面での一層の充実が期待されます。

私がまだ学生だった頃に、授業や卒業研究で、先生方は異口同音に「研究は大学の命だ」と我々学生に話していたことを今も鮮明に記憶しており、当時4回生だった私も、しばしば終電に乗れるぎりぎりまで卒業研究をしていたことを今でも鮮明に覚えており、当時のことを思い出して懐かしさに浸っています。

当時、大阪市立大学工学部は、電気、応用化学、応用物理、機械、土木、建築の6学科で構成され、小規模な工学部であったと思われますが、大阪府立大学との統合により、大阪公立大学工学部は12の学科から構成される学部になり、両大学の統合は授業や研究による影響を与え、工学部の充実に大いに寄与すると期待されます。

工学部D棟の思い出



宜川 克 (昭和47年応用化学科卒)

工学部D棟は杉本町駅東側、退避線路に沿う土木工学科、応用化学科の共有実験棟である。踏切の手前に応用化学科反応工学高圧準備室、実験室、2階に同じく接着研究室があった。以前、同窓会誌12号に小郷良明先生が追憶されていたが、ここはまさに「自治区」そのものであった。なにしろ夜間はB棟にあった同じ反応工学研究室に出入りするもの、A棟の守衛さんがいる玄関まで回り道するか、中から手引きしてもらい窓から侵入するしかない。私はこの自治区に数年間置かせて頂いた幸せをかみしめている。なにしろ珍談奇談が多い。

高圧実験室には常用1万気圧の高圧反応装置が鎮座ましましている。常用3千気圧装置もある。実験の準備、精製、仕込、反応、測定、後始末、なにしろ1泊2日、

時間はたっぷりある。試料サンプリングなどもあり寝れないが、合間には8袋のラーメンのお世話になる。ゴルフ部後輩のクラブを借り中庭でパターゴルフの真似事、最終電車から線路沿い明るい実験室を興味ありげにOLが眺めたりすると忙しそうな仕草で悦にはいる。なじみの杉本町食堂の親父が軽トラックでビール1ケース差し入れ、無免許ながら運転させてもらった。2階の接着研究室には下宿に月2回帰るだけの徳島大学からの猛者、B棟の重合研究室、触媒研究室は年中無休の感しか記憶にない。素晴らしい先生方であった。研究室対抗の恒例ソフトボールにも気安く参加、珍プレーの連発に笑った。扇町以来の伝統であるらしい。出入りのお寿司屋さんチームと対戦、相手ピッチャーは元阪神タイガースの二軍捕手、ゆっくり投げってくれるが皆

三振の山を築いた。差し入れてくれた寿司大皿を酔って割ってしまい、我孫子のお寿司屋さんに謝りに行くのも私の役目だった。B棟の同期と自転車で天王寺界限に繰り出し、餃子食べ比べ双方72個で決着つかず、ラーメンと焼きそばで引き分けたこともあった。とに

かく好きなことを自由にさせてくれた素晴らしい環境であった。

数年後に在籍した会社にも素晴らしい言葉が語り継がれていた。「頭を使って知恵を出せ。知恵を出せないものは汗を出せ。知恵も汗も出せない者は静かに去れ」と。

その後の研究開発者としての私の基礎を作って下さった佐藤先生



阿部 正男 (昭和49年応用化学科卒・昭和51年修了)

もともと化学が大好きであった私は、4回生の時の指導教官であった佐藤恒之先生の下で、興味深いテーマに携わっていました。修士課程の2年間の実験は多くの論文としてまとまりました。

しかし、先生が私たち学生に常々おっしゃっておられた言葉が、その後、企業研究開発者としての人生を送る私の「化学に向き合う基本的な姿勢」を形作っていくとは、そのときにはまだ気付いていませんでした。佐藤先生曰く、「君らはそんなに頭がええわけやないんで、まずいろいろ実験してみるのが大事や。化学は、いろいろやっていると必ず面白い結果が出てくるもんや。」

私は、昭和51年に市大を修了した後、日東電工（株）に入社し、以来39年間の会社人生を研究開発畑一筋で過ごしてきました。

その中で最も印象深いのは、1980年代に一世を風靡した導電性高分子の研究開発です。電気絶縁体であるはずのポリマーなのに、高い導電性を示すものがあることが示され、応用分野も広く、大学、企業でも幅広い導電性高分子の研究開発が行われました。ただ、当時は溶剤に可溶性の導電性高分子はまだ見つけれなくて、それを目指して日東電工でも開発が行われていました。ある日の実験で、酸化重合の酸化剤を換

えたときに、吸引濾過でポリマーを回収した時の濾液がこれまでにない濃いことに気が付きました。ポリマーの溶解性が何か違ったものができたのではないかと考え、このポリマーを溶かせる溶剤があるのではないかと考え、ありとあらゆる溶剤を調べました。そうするとこのポリマーを溶かせる溶剤が見つかったのです。このポリマーをその溶剤に溶かしてフィルムを作ると、強靱なフィルムが得られ、これをドーピングすると、高い導電性が発見されました。こうして、溶剤可溶性の導電性高分子を得ることに成功し、そのレーザーラマンスペクトル解析から、このラマンスペクトルのピーク強度比をパラメーターとする物質特許を取得することができました。

あの日の濃いポリマー濾液を見逃さず、好奇心を持っていろいろ調べていく姿勢は、あの若い学生時代に、佐藤先生から教えて頂いた言葉が、いつの間にか私の研究開発姿勢として身についてきていたことに、ようやく気が付きました。この姿勢こそがあの「セレンディピティ」につながるものだと思います。そして、改めて佐藤先生に深く感謝するものです。74歳になった私は、今も派遣社員としてフルタイムで大手化学会社で合成の仕事に従事しています。

近況報告



大阪公立大学教授 佐藤 絵里子 (平成12年応用化学科卒・16年化学生物系専攻後博修了)

同窓会だよりに寄稿させていただくのは、2006年12月号以来2度目になります。当時はポストドクで1、2年ごとに各地の大学を転々としている状況で、同窓会だよりには何とか前向きなことを書いたものの、落ち着いて研究に取り組めない状況に内心はかなり焦燥感で

いっぱいだったのが正直なところです。あれから20年弱、紆余曲折ありましたが、母校の大阪市立大学工学部（2022年度からは大阪公立大学工学部）で自分の研究室を主宰できる環境を手に入れることができました。

研究室では、高分子合成や高分子反応の精密制御を

ベースとし、刺激応答性材料や機能性接着材料の設計に取り組んでいます。大学で毎日若い学生達と過ごしていると、自分もついこの前まで学生だったと錯覚しがちですが、さすがに最近では学生時代をはるか昔のことだと感じるようになってきました。自身が博士課程を修了してから20年以上経ったという物理的要因もちろんあると思いますが、学生達と物事の捉え方の違いを感じる機会がより多くなってきたことも大きな理由の1つだと思っています。どちらが良いということではなく、むしろ長年試行錯誤を重ねてきた私と、半分くらいしか経験値のない学生達の考え方が違うのは当たり前で、お互いに理解し合うことが重要であろうと思います。とは言え、実際はなかなか上手いかわないことが多いのですが。高分子の重要な性質の1つに強靱さがありますが、人間にも堅牢さだけでなく、しなや

かさが求められると感じています。

昨年、久々に学科の同窓会(96年会)をする機会がありました。各々、研究室ごとでは集まっていたようですが、学科全体に声をかけるのは修士修了以来20数年ぶりとのことで、36名中連絡がついたのが20名強、当日参加できたのが10名程度でした。近況を聞きつつ、学生時代の思い出話にも花が咲き、時間がたつのを忘れて盛り上がりました。20歳前後の4年から6年を一緒に過ごし切磋琢磨し合った(時には足を引っ張った!?)仲間というのは良いものだと思再認識しました。市大工学部同窓会としては一区切りということですが、我々が同窓生で在り続けることには変わりないと思っております。また、今後、大阪公立大学工学部化学バイオ工学科を卒業していく新メンバーも迎え、何かの時にちょっと役に立つ同窓会、になっていけば良いかなと思います。

同窓会だより最終号に寄せて



城本 崇広 (1998年生物応用化学科卒)

皆さま、ご無沙汰しております。お変わりなくお過ごしのことと存じます。私は大阪市立大学大学院工学研究科生物応用化学専攻を2000年3月に卒業し、早いもので25年が経過いたしました。現在、メルシャンという会社に勤務しております。これまで熊本県八代市、千葉県流山市、栃木県日光市、東京本社で勤務先を転々としてきましたが、現在は再び熊本県八代市におります。関西から遠い勤務地ばかりで、母校や研究室に顔を出す機会がなかなかありませんでしたが、同窓会誌などを通じて変わりゆく環境を拝見しておりました。

メルシャンはワインや焼酎などの酒類を製造している会社として知られていますが、95%アルコールも製造しております。私はその製造を全て取り仕切っています。95%アルコールは、清酒や酎ハイなどの酒類の原料としてだけでなく、手指消毒用アルコール製剤などの衛生用品、味噌、醤油、ソースの原料、麺類の食品防腐剤、さらには化粧品、マウスウォッシュ、歯磨き粉など、多岐にわたる用途で使用されています。コロナ禍では消毒用アルコールが不足し、国からの要請で生産量を増やす必要があり、尽力いたしました。このように、私たちの日常生活の至る所でアルコールが使用されており、今後も安定供給を通じて社会に貢献していきたいと考えております。

今回、同窓会誌最終号への寄稿のご依頼をいただき、

25年前の学生時代の記憶を振り返りました。入学当時、工学部生物応用化学科はまだ新しい学科で、同期も少なかったため、自然と深い絆が育まれたように思います。研究室では、加藤錠治教授、大嶋寛助教授、東雅之助手と一緒に各種イベントが頻繁に催され、和やかな雰囲気の中で勉学だけでなく、人と人との繋がりの大切さを学びました。

このような形で、皆さまに近況と大学時代の思い出をお伝えできることを大変光栄に感じております。母校への感謝と、あの頃の温かい仲間たちとの思い出は、私にとってかけがえのない宝物です。これからも互いに励まし合い、成長していけるよう努めてまいりたいと思います。

大学統合により、大阪市立大学は大阪公立大学となりましたが、これまでの絆やつながりは永遠に変わりません。今後もコミュニケーションを続けていければと思います。

末筆ながら、皆さまのご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

建築学科 卒業生

建築生に理想のキャンパス環境 扇町の理工学部



内藤 徹男 (1958年建築学科卒)

私が市大に入学したのは71年昔の昭和29年(1954年)、新制大学として市大が発足して5年目です。当時は工学部ではなく理工学部で、キャンパスは梅田に近い扇町公園の西側一帯でした。扇町通りを挟んで北側が工学系の北学舎、南側が理学系の南学舎で、ともに扇町商業高校、北野小学校の旧校舎を改装した粗末な施設でしたが、都心に大学がある利便性は特段のものでした。

戦後10年頃の市民生活はまだまだ慎ましいものでしたが、大阪の街は神武景気と言われた経済成長の波に乗って生気に満ちており、いたる所で区画整理やインフラ整備、ビル工事をやっていて、町の騒音、渋滞車のクラクション、舞いあがる塵埃はテレビで見る発展途上国の風景そのもの。また梅田からの通学路がキタ随一の繁華街、阪急東通り商店街、別名親不孝通りとくれば、日夜を分かつぬ賑やかさと、いささか怪しげな境界の楽しさは格別でした。

ダイナミックに変貌して行く大阪の都心。毎日強い刺激とエネルギーを受けるこの環境は、建築や都市計画を学ぶ者にとって最高最適、まさに理想のキャンパスだと思ったし、多くの大学人も異口同音にそう言っていました。

市大の理工学部は単に理と工の学科が混在したものでなく、創設者小竹無二雄博士の、基礎科学の理学と応用科学の工学を有機的一体とする新しいコンセプトによる学部で、基礎学問の修得に比重を置いていたから、多種多様の教養科目を学ばないと専門課程に進級

できないのです。新進気鋭の若手理系学者が担当する科目が多く、きわめて新鮮な印象でした。当時の先端に行く朝山新一教授の性科学や、文化人類学を確立された若き日の梅棹忠夫助教授の概論など、充実した科目が目白押しでした。

入試よりも難しいと言われた教養課程の単位取得を何とかクリアして、16名が北学舎3階の建築学科に移りました。北側の向かいには名門の北野病院、西側は建築家ヴォーリズの設計した大阪YWCA会館です。ここでダンスパーティーが催される折には、まだ女子学生のいない男所帯の建築学科にお招きがあって、当時全盛のジルバを楽しんでいました。

北学舎は機械工学科、電気工学科など同居ですが、建築の学科名に工学は付きません。もちろん建築は工学、理数系の分野の割合は多いですが、芸術、歴史、計画、社会学系などが含まれるからです。これが重要であって、当時の先生方は、実社会では修得が困難なこの分野をしっかり学んでいくようにと指導されました。例えば浅野清教授の「日本上代建築のデザイン」や中澤誠一郎教授の「西欧の古典的都市美」など一見遠回りのような知識が、実社会に出て参画した日本初の超高層・霞が関ビル計画、新宿新都心の京王プラザホテルなどの設計デザインに大いに役立つのです。私が在籍した“日本設計”の現在のプランナー、デザイナーたちも、雑学的知識の豊富な者ほどクリエイティブな行動半径は広いようで、最近では東京タワーよりも背の高いビルを中心とした一大開発「麻布台ヒルズ」を



昭和30年代の阪急東通り
突当りが理工学部北学舎

縦横に広がる繁華街



扇町にあった理工学部北学舎 左下 北野病院 右下 大阪YWCA会館

完成させたところです。

建築の世界には様々なコンペティションがあります。若手建築家や大学生の登竜門として日本建築学会主催の競技設計をはじめ、大事な卒業設計も大学間のコンクールです。これらに黎明期の市大建築は続々上位入賞して、大いに名を上げました。毎晩終電近くまで製図室にこもって製作し、帰りはゲイの街、堂山町を梅田に抜けていくと、ポン引きが「ああ、いつもの兄さんか。しっかり勉強しいや」と声を掛けてくれるので

す。必須絵画演習のインテリアスケッチは曽根崎新地のミュンヘンで、ヌードデッサンはOSミュージックホールの踊子さんがバイトで教室に来てくれるなど、とても人間味のある時代でした。

都市開発のダイナミズムを肌で感じる都心扇町にあった理工学部。建築を志す者にとって、美しい中之島も工事現場もネオンの街さえも俺たちのキャンパス。どんな体験もプラスになる、魅力ある環境であったことは確かです。

学生時代の思い出とそれから

福島 眞一（1973年建築学科卒）



私が大阪市立大学工学部建築学科に入学したのは1969年（昭和44年）でした。

この頃は全国的に学生運動が激しくあった時代でした。社会にも大学にもあった古くからの秩序や価値感がおかしいのではないかと学生達が反発し、各大学で学園封鎖や授業のボイコットがあった時代でした。東大の安田講堂が封鎖され、大学の要請で機動隊が突入し、東大の入学試験が中止になりました。受験する大学をどこにするかを私も含め迷った人が多かったと思います。何かの縁で大阪市立大学工学部建築学科に入学することになりました。大阪市立大学でももめていて、入学式ありませんでしたし、入学してもまともな授業はしばらくありませんでした。しかしながら、助手・講師クラスの若手教員が新入生の面倒をよく見てくださったと思います。人数が少なかったこともありクラスのまとまりは良かったです。

1年生2年生の教養時代はたぶん通常の半分くらいしか授業が無く、クラブ活動（私の場合は自動車部）を熱心にやったことが楽しかった思い出になっています。専門課程になってからは、授業も元に戻りよく勉強をした思い出があります。しかし、ゼミの先生からコントラクトブリッジを教わり、ゼミ室ではブリッジを、大学を出ると下宿をしている友人宅で麻雀ばかりしていました。今振り返ると、大学では必要最小限度の知識を学びましたが、それよりも社会を生き抜く知恵を教わったように思います。また、今に続くたくさんの友人を得ることができたのも良かったと思います。

ます。

同窓生の皆さんとは卒業してからも最初の頃は、奥さん子供達も一緒に旅行に行ったりしました。今は毎年毎に必ず北浜のレストランに集まっての同窓会を開いています。ただ、同級生の訃報に接することも多くなり、悲しいことだと思っています。

私は、約10年前に会社を退職しボランティア活動や趣味の世界で楽しもうと思っていた時に、これも何かの縁があったんだろうと思いますが、建築学科の同窓会“建築会”の会長をすることになりました。2016年から2024年まで会長をつとめました。この間、大阪市立大学建築会 創立60周年記念大会の開催と、“大阪市立大学建築会 創立60周年記念誌”を発行することができました。建築会に関わったことで、多くの先輩や後輩の皆さんと知り合うことができました。素晴らしい先輩、優秀な後輩の皆さんと交流できたのも、良かったです。



記念大会集合写真

同窓会だより最終号に寄せて

津村(村田) 雅枝 (1982年建築学科卒)



大阪市立大学工学部建築学科1982年卒業の津村（旧姓村田）雅枝です。

工学部同窓会解散に際し、思いつくまま大学時代の思い出や今後の期待などを記してみたいと思います。

大学入学のころ 1978年春、希望と不安いっぱい、杉本町の教養キャンパスに来ました。当時はわずかに大学紛争の名残が残っていて、キャンパスに並ぶ立て看板の文字にびっくりしたり、英語の授業がつぶれたり（話し合いの場を持つように言われて、結局休講？）ということがありました。その様子に、これが大学なんだ、とぼかんと見ていた記憶があります。

私の入学したころは、建築学科では4回生に一人先輩女子がおられるだけでした。工学部6学科の中でも1回生で女子は、応用物理学学科のNさんと私の2人だけでした。最近では工学部全体で5%、建築学科ではなんと3割ほどの女子学生がおられるとお聞きすると隔世の感があります。工学部の校舎内に女子トイレが見当たらず、男女兼用のトイレしかなかったのには閉口しました。

大学生活 建築学科は1学年35名前後、私の学年はみな仲が良く、いろいろ協力しあって授業も試験も遊びもこなしていました。製図室で過ごすのに皆でそりいのつなぎを買ったり、12月には、お世辞にもきれい

とは言えない製図室で、クリスマスパーティーをしたことも懐かしい思い出です。

建築の世界の入り口に立ち、先生方のご指導のおかげでなんとか大学生活を送ったことはかけがえのない財産となりました。

建築会 私は大学卒業後、修士課程2年を経て、建築関係のシステム開発をする会社に就職しました。職場から遠かったこともあり、結婚出産を機に退職。その後は在宅勤務で仕事をつづけ、NPO活動に携わったりもしました。生活が落ち着いてきたころ、建築学科の同窓会である建築会を手伝って欲しくないかとお声がけいただきました。建築会では、年齢や経験は違えども同じ大学で学んだ先輩後輩方と交流し、刺激を受ける機会が多くあり、微力ながら励んでいます。大学でお世話になった恩返しのつもりもあります。

大阪公立大学 大阪市立大学は2022年から大阪府立大学と統合して大阪公立大学になりました。大阪の新しい知の拠点を目指す理念には大変期待しています。工学部も規模が大きく12学科もあるとのこと、建築学科を含め新しい環境でのさらなる発展を望みます。私も早く新しい大学名になじんで、中百舌鳥にもお邪魔したいと思います。

歴史の途中に

橋本 頼幸 (1996年建築学科卒)



私たちの学年は1992年に大学に入学しました。入試は杉本キャンパスのいわゆる教養キャンパスと言われていた東側の古い校舎で行われ、門の前にはヘルメットをかぶった人たちがまだいたような記憶があります。最後の「学生運動」が燦々していたように思います。90年代は大阪市や大阪市立大学にとっても激動・転換期だったというのはだいたい後に知ることになりますが、学生の頃は、まだ例の“寮”も存在していました。学生運動に授業を妨害されるというのは1度あったかどうか程度ですが。

私は建築学科44期になります。建築学科の前身は大阪市立都島工業専門学校で昭和18年から6期、工学部建築学科は昭和26年から公立大学の1期生が入学するまで72期続きました。今私はその歴史のほぼ中間点にいます。大学を卒業してから約30年たっていますが、住まいや職場が住吉区で、また学科同窓会の幹事長をしている関係でときどき大学に足を運ぶことがあります。30数年前、はじめて大学に足を踏み入れたときのあの混沌とした感じがなくなり、ずいぶんとすっかり今風のキャンパスになっています。一方

で、建築学科のある工学部C棟4～5階は当時の面影を色濃く残しています。私たちが学んでいた頃も古びた感じはあり、歴史を感じていましたが、今はさらに歴史を刻んだ校舎が残っています。

現在、私は50歳を超え、自分の前を歩いてきた先輩達や自分の後を歩いている後輩の両方がよく見える位置にいます。建築学科は1学年35名前後でかなり小規模なこじんまりとした学科ではありますが、公立大学まで含めると80年を超える歴史は2000名を超える同窓会を構成しています。私は今、工学部や建築学科が積み重ねてきた歴史があることが誇らしく貴重なことだと思えるようになりました。この感覚も年を重ねたから思

うようになったことで、20代、30代のことはそんな風には思っていませんでした。ときどき同級生で集まる機会があり、建築学科の同窓会(建築会大会)で年に1度集まる機会があり、先輩や後輩達とつながり、仕事でもふとしたところで同級生、同窓生に出会えるということが心強く仕事の励みや糧になっていると感じます。

大学の統合により、工学部同窓会が解散されることになりましたが、学科同窓会として建築会がその役割を担いながら約80年続く歴史に新しい公立大学としての歴史を重ねていきます。私も微力ながら建築会を支える側にいますが、同窓会を次の世代につないでいくことが当面の目標です。

同窓会だよりに寄せて

滝田 憲作 (1999年建築学科卒)



1995年に第47期で建築学科に入学した滝田憲作です。出身は長崎で、我々の入学はちょうど30年前の阪神淡路大震災の年でした。長崎からなぜこの大学に来たのかとよく聞かれましたが、父の転勤で一時期京都に住んだ経験があって関西に出たかったことと、後期の二次試験が数学だけだったのがその理由です。

学部在学中はバーやラーメン店などバイトをいくつか掛け持ちしながら、学内の友人たちと日本一周の貧乏旅行をしたり、学祭で毎年出店したりと青春を謳歌し、4年生ぐらいになって勉強らしい勉強を始めました。スイッチが入るとのめりこむタイプで、手あたり次第に本や論文を読んで議論して初めて勉強が面白いと感じた時期でした。

ただ、就職の時期になって僕らが経験したのは就職氷河期です。ほとんどの企業で採用募集のない中、我々は必要とされていない、という社会からの壁を感じ挫折も味わいましたが、結果として自分がやりたいこと、そこは研ぎ澄まされることになり、現在の仕事に繋がることになりました。

再開発を得意とする設計事務所の株式会社アール・アイ・エーに就職することになり、すぐに広島支社に異動して14年ほど経験を重ね、大阪支社に戻って10年、そして現在は、大阪支社計画部の部長として、また、広島支社支社長として2拠点で業務を行っています。

これまで私が関わって完成した建物は、「リリブ豊中野田」「大手町平和ビル」「ヴェルタワー下関」「ひろしまガーデンガーデン」「アイネスフクヤマ」「ビッグフ

ロントひろしま」「北九州スタジアム(PFIアドバイザー)」「KDDI 維新ホール」「あちてらす倉敷」「西宮地方卸売市場」「ステーションビル枚方」などです。

プライベートでは、ここ5～6年ほどスコッチウイスキーにはまっていて、ウイスキーイベントへの参加、バーめぐり、ウイスキーマニアとの交流、蒸留所見学、資格取得など趣味を満喫しています。

これまで仕事で大学の同窓のみなさんに出会うことはなかなかなかったのですが、最近になっていくつか関わりが出てきました。同窓の大先輩がきっかけで、会社の枠を超えて共同研究をやろうという話もあります。残念ながら工学部同窓会は解散されるということですが、同窓という関係性はこれからも未来につながり続けていくのだと思います。仕事でも趣味でも、張り巡らされた同窓ネットワークの中で、もっと多くのみなさんと出会い・交流できたら幸いです。



あちてらす倉敷

鉄道工学の非常勤講師をお引き受けして



宮本 潔 (1962年土木工学科卒)

今回、最終回の同窓会だよりに寄稿できます機会を与えていただき、心から感謝申し上げます。

私は昭和37年（1962年）に土木工学科を卒業し、当時の国鉄の採用試験で本社採用として入社しました。当時の土木関係の国鉄本社採用の人数は14人でした。入社後、25年経って、国鉄の分割民営化施策（1987年）によりJR西日本の施設部長に配属されました。

その時、母校の先生方からJR西日本に「本学の土木科には鉄道工学に詳しい先生がいないので、是非卒業生である宮本に鉄道工学の非常勤講師となることをひきうけてほしい」と言う要請が参り、JR西日本の会社からも私に大阪市立大学の非常勤講師となるように指示が来しました。私も「4年間お世話になった大学に少しでも恩返しができる」と考え、喜んで引き受けることとしました。

鉄道工学は前期における選択科目でありましたが、当初は20人程度の聴講生がいましたが、前期の終わり

ぐらいになると10名程度の聴講生になり、非常に寂しく感じましたが、前期の終了試験の時には20人程度の学生さんが受けてくれました。

試験には出席してまじめに聞いていれば60点以上の点数が取れるような比較的容易な問題に絞ったこともあり、全員の受講生が合格であったことを記憶しております。また、卒業生に就職先としてJRを選んでいただき、多くの学生さんがJR西日本に来ていただくことができるようになり、JR西日本の各所で頑張っていたいている状況を見て、私も非常にうれしく思っております。

どうか、今後とも多くの卒業生の方々がJR西日本に来ていただきたいと切に願っております。このとき、いろいろ質問や疑問点があればどうぞ気兼ねなくご連絡いただければお答えさせていただきたいと思っております。

学生時代の思い出の地にて



名誉教授 山田 優 (昭和40年土木工学科卒)

工学部同窓会は理工学部が分離した後の1960年に発足、私はその翌年に入学しました。その頃の学舎は北区扇町にあり、扇町通を越えて南にあった理学部敷地内の階段教室前で合格発表を見て喜んだのを覚えています。私の現在の事務所は、その近くの古い7階建てビルの最上階にあり、窓から学生時代の思い出の地を眺めることができます。

工学部があった北学舎、理学部があった南学舎とも、戦災の廃墟に焼け残った建物を応急改修しただけの仮学舎でした。院生の時に杉本町に移転しましたが、それまで私がいた実験室兼研究室は北学舎の裏にあった分室で、元倉庫を別段の改修もなしで利用していたようです。

学舎は、いま思えば酷いものでしたが、楽しく懐かしい思い出が数々あります。実験設備は学生向け授業用の最小限のものしかなく、教員の研究はそれらを利用しながら狭いスペースで苦勞して行われていました。たとえば1964年に開通した阪神高速道路の初期、いま中之島の上に架かるS字形曲線鋼桁の模型実験が学生院生動員による人海戦術で実施されたことなど、いろいろ思い出されます。

工学部学舎の中庭で、学科の運動会が学生院生と教員全員一緒になって行われました。セメントや砂利の入った袋を担ぎながらの競走は、土木工学科らしいとはいえ、あの時代ならではでしょう。日頃近づき難い教授先生が餡パンを口にくわえて真剣顔で走る姿は、微

笑ましい限りでした。

北学舎内の南西隅にあった小さな食堂では、運動会後はもちろんのこと、入学生歓迎、卒業祝いなどで宴会が行われました。やはり学生院生と教員全員、そして数人の卒業生が木製の長椅子に詰め合って座り、自慢の十八番を披露し合いました。カラオケはまだなく手拍子でした。音程など少々外れても構わず、気軽に歌えたようです。

工学部の学舎跡は、いま中学校として使われています。周囲の建物もほとんどが建て替わっています。西側にあったYWCAの赤レンガ壁の建物は唯一残っていますが、北側の正門前にあった北野病院は1区画北に移動し、その跡は小学校になっています。実験で怪我をした時に駆け込んでお世話になりましたが、この病院も当時は工学部と同様に古い粗末な建物でした。移転後は大きく立派になっています。レベルの高い病院だったのです。

理学部があった南学舎跡は、永く駐車場でしたが、昨年少し東にあった水道局跡に突如出現した大きな総合病院の附属施設になっています。休み時間にソフトボールなどした南側の野崎公園は今もあります。その西にあった読売新聞は少し南へ大きなビルになって移っています。大学をはじめこの辺りにあった多くのもの

は、その後大きくなりました。そういう時期だったのですね。

早いもので大学を定年退職後、一人でこの事務所を借り、19年になります。当初、数年ほどと思っていたのが、結構居心地がよく、今にまでなりました。現役時代にできなかった内外の種々の文献をゆっくり読むことができました。そのうちの道路舗装に係ることをまとめ、2022年に「舗装に花が咲くかー舗装工学への誘いー」を出版しました。

事務所は今年度で終わりますが、永く維持できたのは多くの方々のご支援のおかげで、感謝しています。大学教員は幸せなことに多くの人と知り合うことができます。事務所を持ったことで、それらの方との付き合いが続けやすかったと思います。「扇町サロン」などと称して同窓会のようなこともでき、よかったと思います。

工学部同窓会は解散とのことですが、永くお世話いただいた方々にお礼申し上げるとともに、今後も大阪公立大学という枠の中で行われるだろう同窓会に期待しています。歳をとるほどに強く感じるのですが、学び場で知り合う同窓は、いつまでも懐かしく想い合える良き友です。皆さん、色んなところでまた度々お会いしましょう。

市大土木で学んだ技術屋人生

住吉 正信 (1971年土木工学科卒)



私は、高校生時代に自宅の近くの建設工事を見て土木を志し、大阪市立大学工学部土木工学科に入学し、卒業後は建設会社[鹿島]に入社しました。在学中の大きなトピックは学生運動で、杉本キャンパスの1号館が学生に一時占拠され、長く講義がなかったことです。3回生の後半に大学は再開され、私は土質工学研究室に入り西垣先生のご指導で標準貫入試験の解析を卒業論文テーマにしました。研究室の主任教授の三笠先生は講義はとても難しく近寄り難い存在でしたが、大学卒業後は卒業生との関わりをととても大切にされ、先生を囲む会（飲み会やゴルフなど）で先輩方と一緒に交流を長く続けたのが社会人として[ひとの和]を広げていく大きな財産になりました。先生は晩年介護付き施設に入られ、ご挨拶に伺った折に[白寿のお祝いにはピアノ演奏を聴かせる]と話され、帰り際には[教職をして良かった、教え子が訪ねてくれて]と涙ぐまれてお別れ

したお姿は今でも忘れることが出来ません。その後一年も経たずにご逝去され、ピアノ演奏も再会も叶いませんでした。改めて、心よりご冥福をお祈り致します。

卒業後、私は工事現場でのものづくりを生涯の天職と考え、社会人の前半は関西国際空港、Nexco高速道路、海底トンネル（万博へのアクセス）などの施工を担当しました。後半は企画、営業、支店経営、グループ会社経営などに携わり当初の志望とは違う職責を務めることになりましたが、建築や海外など土木以外の貴重な経験も出来て47年間の建設会社での大満足な技術屋人生を過ごせました。また、同窓の1971年土木工学科卒業の仲間は卒業後も結束が強く、幹事の特段の尽力もあり毎年数回同窓会が開かれ100回近くを重ねて、旧交を温め素晴らしい仲間との交流をずっと続けています。

都市学科では、2019年から同窓会である都市会会長

を4年間務めました。都市会行事への会員の参加が漸減していく状況にあり、役員のみなさんと一緒にその活性化を目指して講演会、研修会、現場やプロジェクト見学会などの行事を増やしたり、女性の卒業生の増加に呼応して[女性の会]を発足させ[全国女性土木技術者の会]とも交流するなどの活動を始めました。これから都市学科(土木)の分野も女性パワーが広がり、建設界でも施工を担当する女性土木系社員も増え、さらに管理職の立場でも女性の活躍が広がっています。

また、生産年齢人口の年々の減少は日本全体の大きな社会問題であり、建設界も建設就業者の減少は深刻で、災害防止対策や老朽化インフラの更新など喫緊の必要な建設投資に対してベテランや外国人、そして女性の活躍でこなしているのが現状です。

しかし、一方では建設DX(デジタル・トランスフォーメーション)によるIT、ICTなどデジタル技術を活用した工事のロボット化、自動化技術などが急速に進み、我々の年代がアナログ管理、施工をして来た時代とは隔世の感があります。また、建設DXは単にマンパワー不足対応だけでなく工事の安全や品質の向上にも大いに貢献をしています。今後はさらにAIの活用などによって益々建設DXが発展、推進され工事の計画、設計、施工から維持管理まで全般に亘ってより効率的、合理的になり、そして一層の省力化が進んで行くよう大いに期待しています。

さて、大阪公立大学は1800年代後半に市立大学が大

阪商業講習所、府立大学が大阪府立農学校として創設され長い歴史を持った伝統大学同士の統合でもあり、その規模も国公立大学で入学定員数全国3位の大規模な大学になりました。ぜひ、その相乗効果を発揮して社会のいろんな分野に一層幅広く積極的に取り組むと同時にグローバルに学生を輩出していく素晴らしい大学に発展していくよう期待しています。都市学科も旧府立大学工学部の各学科と積極的にコラボレーションし、時代のニーズを先取りして幅広く新しい技術、研究を進めていく良い機会と捉えて一層の交流を深めるなどして、大阪公立大学全体の発展、成長の一翼を担って行かれるよう卒業生のひとりとして心から願っています。



故三笠教授宅へ廣部・北川さんと訪問

市大土木工学科に入学して

山中(工藤) 昌子 (1979年土木工学科卒)



NHKの朝ドラ再放送カムカムエブリバディをみて、主人公の安子ちゃんのご主人、稔さんの帽子に市大の校章がついてる!!と気がついた。これが無くなっちゃ、と思うと寂しい。

私が土木を選んだのは、父の影響。父は日本橋梁という会社に勤めていました。弟も市大ではないけれど土木。当時は日本が高度成長の真っ只中。父は仕事の話をよく家でしていて、土木が身近にあったので、私も土木と思っていました。ただ受験の際、明治生まれの担任の先生から父が呼び出され、土木への進学を反対されました。父が女性でも大丈夫と説得したそうです。そんなこんなで、市大土木初の女子学生になりました。今では随分多くの女性が土木関係学科に入学し

ていますが、当時は稀なことで、周りがびっくりされたようです。本人は特になんの抵抗もありませんでしたが、むしろ周りの反応に戸惑いました。しかも、そういった自覚がなかったので、もっと頑張らないといけなかったと、今更ながら反省しています。

市大に入ってから、科目数は多いし、水理など全然わからない。到底自分の力だけではついていけず、多くの同級生に手伝ってもらった事が思い出されます。土木計画学研究室に配属され、西村教授、日野先生に本当にお世話になって何とか卒業しました。皆さんに感謝です。

卒業後は、土木系の計算会社であるセンチュリーリサーチセンターCRCに就職しました。関西電力の大飯

原子力発電所3, 4号機建設の前の環境アセスメントに関わりました。ただ土木に関わったのは、ここまで。

10年前に舌癌に罹り、12時間の手術に耐えました。お陰で再発も転移もなく、元気に過ごしています。その後は、肌のトラブルもあり、6年前からは、化粧品販売とエステティシャンを始めました。家族からは、こんなことになるとは思わなかった、と言われつつも、日本エステティック協会認定フェイシャルエステティシャン、日本介護美容セラピスト協会ビューティタッチセラピスト、健康管理士一般指導員健康管理能力検

定1級などの資格も取りました。この年齢になって、ようやく(?) 一緒に懸命勉強しています。やる事が多くて、いつも何かに追われています。でも、きっと誰でも大変なことはあると思います。土木の仕事を続けられなかったのは残念でしたが、こうして縁あって市大工学部同窓会だより最終号に拙文を寄稿できることは、それこそ土木への進学・卒業があってこそだと思っています。書き終えて、何事にも始まりと終わりがあって、また新しいことが始まる、そんなことを改めて実感しています。

思えば、様々な種をもらいました

麓 隆行 (平成9年土木工学科卒)



関西国際空港や明石海峡大橋の建設が進む1993年4月に、私は一浪して土木工学科に入学しました。昭和初期の2号館や3号館で、大阪市立自然史博物館学芸員の教養科目やレポートに対して質疑応答が求められた物理学実験などの講義を受けました。教養キャンパス奥の長屋にあった考古学研究会に入会し、長期休みには発掘現場で泊まり込みのバイトをしていました。2回生の1月17日、同級生の成人式直後に阪神淡路大震災は起こりました。高砂から単車で通学してきた同級生や、自宅が全壊して学内の施設で宿泊している同級生もいました。一週間後に友人と歩いた西宮や芦屋の風景や静けさは忘れられません。

大学の中の思い出の場所の一つは「学術情報総合センター (写真)」です。教養キャンパスと工学部の間で1回生の秋から建設が始まり、4回生の秋に開設されました。1回生の頃から旧図書館に並ぶ専門書を比べて自分なりに納得できる解説を探し、冒険心から書庫にもよく入っていた私にとって、待ちに待った建物でした。そのため、学術情報総合センターに入ることを目的に、卒論に関する書籍や論文雑誌を探しに行きました。大学院では、地下の書庫に学生証で入室可能となり、より古い文献の原本を探しによく静かな地下書庫まで行きました。これが、現在の仕事や建物巡りのスタート地点だったように思います。

その後、書籍から実験での理解へと興味が広がっていきました。卒業研究では眞嶋助教授の指導のもと、D棟の実験室で実験を進めました。失敗ばかりでしたが、工作センターで職員の指導のもと、旋盤やフライス盤で作製した治具を使い、アングルを組んだ手作り

の装置で毎日のように実験しました。夜まで実験していると、研究室を超えて大学院生から夕食に誘っていただきました。これは、私のラーメン屋めぐり原点でもあります。修士修了後、私は工学部助手となり、山田優教授のもとで学位を取得しました。現在は近畿大学理工学部で教授をしています。

振り返ると、杉本キャンパスという空間で、今に至る様々な種を得たのだと気づきます。工学部の移転までに私の原点を探しに、キャンパスを散歩したいと思います。名前や場所が変わることは少しさみしいけれど、扇町、杉本と受け継がれた工学部が、後輩たちが気づかぬうちに様々な種を得られる空間であり続けてくれることを願っています。



市大土木工学科に入学して

(株)大林組 阪急淀川左岸線J V工事事務所

松尾 孝之 (平成18年都市学科卒)



私は大阪市立大学（現：大阪公立大学）を19年前に卒業し、株式会社大林組に入社しました。入社後は一貫して土木現場で施工管理に従事してきました。関西に留まることを期待して大林組を選びましたが、入社時は新宿駅の現場に配属されました。しかし、生まれ育った地域と異なる環境に身を置くことで、さまざまな価値観を学び、新たな経験を積むことができました。その後、全国各地を転々とし、橋梁、シールド、トンネル、都市土木等多様な工種を経験し、現在は2019年から淀川左岸線（2期）事業の阪急工区において、監理技術者として施工管理に従事しています。

この工事では、淀川左岸線（2期）事業の一環として、阪急電鉄神戸線・宝塚線・京都線が通る中津～十三間の長柄運河橋梁直下に、延長62.0mの地下構造物（道路函体）を建設しています。施工場所は淀川の河川区域に位置し、既設橋梁の近くで営業線直下の工事であるため、緊張感を持って施工を進めています。その分、各工種が無事に終わった際には、非常に高い達成感を感じることができます。

また、私は2018年より母校のリクレーターを務めており、大学訪問の機会が増えました。さらに、昨年からは都市会の幹事も務めており、大学との関係が深まっ

ています。在学中は、学業と並行して男子ラグロス部でのクラブ活動やアルバイトに励んでいました。卒業研究では、研究室を途中で変更したため、卒業間際まで泊まり込みで解析を行ったことを今でも鮮明に覚えています。大学との関わりは卒業までだと思っていたため、卒業後にこのような関係を持つことになるとは想像もしていませんでしたが、大学での経験が現在に繋がっており、感慨深い思いです。

若い世代へのメッセージとして、近年、建設業界における若者離れが社会問題となっています。これは当社にとっても喫緊の課題です。私は土木工学科に入学したからこそ、その専門性を活かす職業として大林組に就職しましたが、今の若い世代は多様な職業や働き方を選択でき、ライフステージ毎に職業を変えることも可能です。地元に残りたいという学生も多く、ゼネコン業界も時代に合わせた変化が必要です。私は、その時その場所でしか味わえない魅力を持つゼネコンの働き方を、学生に伝えていきたいと考えています。学科別同窓会などを通して、他社や他業種の魅力にも触れ、自社の価値を創造し、若い世代の育成に貢献していきたいと思っています。



万博会場へのアクセストンネルをバックに

これからの卒業生に向けて

パシフィックコンサルタンツ株式会社交通基盤事業本部 道路部 道路推進室
坂本(石村) 友里絵 (平成26年都市学科卒、同28年修了)



この度、同窓会誌最終号への寄稿の機会をいただき、心より感謝申し上げます。大学の統合に伴い杉本町キャンパスから工学部棟がなくなると聞き、とても寂しいのですが、さらなる発展のためより良い大学になればいいなと思っております。

私が在学していた工学部都市学科は、人数が少なく、男女分け隔てなく仲が良いクラスでした。また、女子は毎日休み時間や放課後に集まり、終始くだらない話をしていた思い出があります。大学院では、研究室で鍋やたこ焼きをし、学会や研究室旅行で地方に行き美味しいものを食べたのも良い思い出です。研究室があったC棟3階が懐かしいです。

私はH28年にパシフィックコンサルタンツ(株)に入社し、現在は道路設計業務や事業監理業務などに携わっています。プライベートでは、R5年1月より産休育休を取得し、第一子を出産しました。R6年5月に職場復帰し、現在は仕事と育児に大忙しの毎日です。

今は共働きの時代です。女性だけでなく男性も仕事と家庭の両立はますます重要なテーマかと思います。私自身も仕事と育児を両立する中で、いろいろと試行錯誤な毎日ですが、我が家が現在実践している工夫を共有させていただきます。専門知識や仕事に直接役立つものでなく申し訳ありませんが、同様の立場にいる(立場になりそうな)卒業生には是非参考にしていた

だきたいと思います。また、仕事と育児の両立について不安に思われている方、「やってみれば意外とできない」「すべてを完璧にこなすことは難しいため、ある程度の妥協や優先順位をつけることが大切」ということをお伝えしておきます。

a). 柔軟な働き方を!：私は現在フレックス勤務を活用しています。夫がお迎えの日や、テレワークできる日に長めに働くようにし、標準時間を確保できるようにしています。夫は朝早く(7時ごろ)に出社し、夕方(17時ごろ)に帰社しお迎えに行くようにしています。

b). サポートを求める勇気を!：私は月に1度、1週間程度母に助けに来てもらっています。子供の迎えや夕飯の支度をお願いしています。また、たまには夫に子供を任せて、一人の時間に、たまった家事をしたりゆっくりしたりという時間を確保しています

c). 「すみません」より「ありがとう」を!：これは上司に指摘された言葉です。サポートしてもらうときは「すみません」ではなく「ありがとう」と言うこと、他の同僚が風邪をひいたときには、サポート側に回るようにしています。

最後に、これから大阪公立大学を卒業される皆様が、社会に出ていろんなところで活躍されることを楽しみにしています。私も頼りになるOGと思ってもらえるよう、今後も一生懸命仕事を続けたいと思います。¥



都市学科の卒業生との再会

回顧録 1960年代後半の市大構内



建設中の工学部棟

1号館 2号館と
教養のクラブハウス



教養教室 (昭和41年)



大学祭 (昭和41年)



教養授業用化学実験室

教養2号館
体育館 学生ホール

手前は学情センター
予定地



写真提供：南繁行元教授 (1970年電気工学科学卒)

Special project Roundtable discussion

大阪市立大学工学部同窓会 特別企画 座談会

「同窓会のこれから」を語り合う その役割、可能性、課題とは――

大阪公立大学の開学に伴い、大阪市立大学と大阪府立大学の同窓会組織が合流し、大阪公立大学校友会が誕生しました。また、大阪市立大学工学部同窓会は令和7年(2025)春で解散。工学系の同窓会については、学科別に活動することになりました。

市大工学部同窓会の解散に寄せて、これまで同会の運営に携わってきたメンバーや縁のあった方など9名が集まり、新たな形でスタートを切った同窓会について、さまざまなことを語り合いました。



▲座談会参加者による記念撮影
(2025年2月15日)

■日時

2025年2月15日(土)

■場所

大阪公立大学 杉本キャンパス 工学部A棟 同窓会事務室

■出席者

徳尾野 徹 : 昭和61年(1986)建築学科卒

伊與田 浩志 : 平成4年(1992)機械工学科卒

柴山 敬 : 平成5年(1993)土木工学科卒

柿本 真司 : 平成16年(2004)生物応用化学科卒

坂本 真宏 : 平成28年(2016)機械工学科卒

高山 大 : 大阪公立大学 工学研究科

電子情報系専攻 前期博士課程2年生

吉田 稔 : 昭和52年(1977)機械工学科卒

黒山 泰弘 : 昭和50年(1975)土木工学科卒

神門 登(司会) : 昭和45年(1970)応用化学科卒



徳尾野 徹さん

(建築学科卒)

大阪公立大学大学院工学研究科
都市系専攻工学部建築学科 教授



柴山 敬さん

(土木工学科卒)

公立大学法人大阪本部事務機構
企画総括部長

懐かしい市大工学部の 思い出と同窓会とのつながり

神 門 皆さん、お忙しい中ご参加いただきありがとうございます。大阪市立大学工学部同窓会の解散に寄せて、『同窓会だより』最終号の特別企画として座談会を開催することになりました。はじめに同会の吉田会長からご挨拶を頂きたいと思います。

吉 田 今日はいろいろな立場や世代の方にお集まりいただきました。「同窓」という言葉をあらためて考えてみると、“窓”は「学びの場」を意味し、同窓会はつまり「同じ学びの場で過ごした仲間の集まり」です。ご承知のように、同じ学びの場であった大阪市立大学は大阪府立大学との統合により大阪公立大学となりました。そして、市大工学部同窓会も解散することになり次の一步を踏み出しました。今後は学科別同窓会という、私たちのほとんどはこれまで経験したことのない組織編成となり、まだまだ迷いが多いところです。本日はこれからの同窓会への意見や期待など、それぞれの立場や経験からお話いただき、今後の活動のヒントにできたらと考えています。

神 門 ではまず、お一人ずつ学生時代の思い出などを語っていただきましょうか。市大の時代より教員をしておられる徳尾野先生から。

徳尾野 私の学生時代は、実に“雑”に学んでいました(笑)。ある先生はその日行ってみないと講義があるかどうかさえ分かりません

でした。30分たつてどうやら休講だとなると、喫茶店へ行ったりゲームセンターへ行ったり。今日は多分ないだろうと行かなかったら、その日に限って開講されていたこともあって。携帯電話もない時代ですから情報のやり取りもできませんしね。講義も黒板に書かれているものをとりあえず写して、分からないところは後から自分で調べていました。それに比べ、今の学生は非常に丁寧に学んでいるなと感じます。質問の時間がきちんと設けられていたり、設計の演習でも講評会があって良い点悪い点の一つずつ説明してもらったり。あまりに丁寧なので、社会に出てから大丈夫なのかなと思うぐらいです。

伊與田 私は3年生まではサークル活動に夢中で、その後は修士課程も含め研究中心の日々でした。研究室が生活の場のようになっていましたね。機械工学科は製図の演習がありますが、当時は全て手描き。正月には作業に追われて泊まり込みしなければいけませんでした。その時の思い出は、今でも同期の間で話題になります。時代が変わり、今や大学で泊まり込むなんてできなくなりました。社会情勢に応じて教員も学生も変わってきています。

柴 山 土木工学科も泊まり込みで研究しましたよ。深夜、ラーメンを食べに外に出て行くのですが、帰って来たらドアが閉まっていって中に入れない。私たちの研究室は1階にあったので、窓から入っていました。建築学科の学生もうちの研究室の窓を「開けて



くれ」とたたいてくるので入れてあげて(笑)。研究室単位でバーベキューもしました。いい匂いが漂ってくる先の部屋にお邪魔して一緒に食べました。そんなふうに学生同士交流を図っていましたね。

柿 本 在学中は朝早くから日付が変わるまで、ずっと研究をしていました。光を当ててはいけない実験だったので、部屋を真っ暗にして。夕ご飯も研究室で鍋をしたり、外に行って飲んで帰ってきて実験の続きをしたり。入学した頃はまだF棟のピロティで新入生歓迎会の焼肉をしていましたよ。懐かしい思い出です。

坂 本 私は入学後ボクシング部に入って部活にのめり込みました。大学院の入試に失敗したタイミングで、自分のやりたいことをあらためて考え、翌年の入試をもう一度受けようと決意する一方で、ボクシングではプロの世界に挑戦することにしました。そして2回目の大学院入試と同時にボクシングでは全日本新人王に、進学してからはアジアチャンピオンになりました。

高 山 学生時代…といっても私の場合、ごく最近のことになってしましますが。大学受験の直前から新型コロナウイルス感染症が流行し出しました。入学して1年生の間はほぼ大学に通えず、2年生の前期ぐらいから少しずつ対面授業が始まりました。実験の動画とデータが送られてきて解析するといった授業もあって戸惑ったことも。あの時期は教員も学生も試行錯誤し、大変だったと思います。また、運動系のサークルに入ったものの1回も活動すること

ができないまま辞めてしまい、その代わりオンラインでゲームするサークルを自分たちで立ち上げて、そこで学生同士のつながりを持ちました。だから、工学部以外の友達が多くできました。3年生になってからは図書館でよく勉強していました。

神 門 皆さん、各時代で夢中になって取り組んで、仲間とつながりを持ち、良い思い出を作られてきたようですね。では、これまで「同窓会」とはどう関わってこられたのでしょうか。

徳尾野 建築学科は市大時代から単独で「建築会」という同窓会があり、総会やイベントにはできるだけ参加していました。今は公立大としての会になったのですが、果たしてこれまでのアイデンティティーは受け継がれるのだろうか、現在の大学への母校愛は芽生えるのだろうか、教員でありながらも少し危惧しています。

伊與田 私は、教員になってから同窓会とのつながりができ、原稿を依頼いただくなどどちらかというと受け身的に関わってきました。今は府大と合併した機械工学科同窓会の理事として関わらせてもらっています。

柿 本 もう何年も大学とは疎遠になっていました。卒業した頃は訪れることもあったのですが、同窓会については本当に関わりがありませんでした。ところが昨年、新しく設立された化学バイオ工学科同窓会から講演会で講師をするお話をいただきまして。学生に向けて卒業生が社会でどんな仕事をしているのかといった話をする



伊與田 浩志 さん

(機械工学科卒)

大阪公立大学大学院工学研究科
機械系専攻工学部機械工学科 教授





柿本 真司さん

(生物応用化学科卒)

JCRファーマ株式会社 研究本部 CMC開発
研究所 バイオプロセスユニット培養プロセス
グループグループ長



高山 大さん

大阪公立大学 工学研究科 電子情報系専攻
前期博士課程2年生

会でした。終了後には学生とも話をして、自分自身の若い時を振り返ることもでき、良い時間を過ごしました。

神 門 講演会は、化学バイオ工学科同窓会設立後に学生にとって役立つことをと思って企画しました。大変好評でしたね。

坂 本 私の場合は、同窓会と学生時代の思い出が密接に関係しています。アジアタイトルマッチに挑戦する頃から同窓会との関わりを持たせてもらうようになり、多くの先輩方にもものすごく応援していただきました。市大卒業生の皆さんの母校に対する愛情や後輩を応援する気持ちを身に染みて感じました。自分自身も母校愛は強い方だと思います。

高 山 現役の大学院生としては、同窓会といってもまだよく分かりません。自分がどこに所属しているのか把握していませんし、同窓会がどんな活動をしているのかもあまり知らないというのが正直なところです。

これからの同窓会に対する要望や期待

神 門 府大との統合が決まってから現在に至るまで、同窓会の今後をどうするか検討を重ねてきました。現在の状況を黒山さんから説明いただけますか。

黒 山 大阪市立大学は工学部同窓会が主軸としてありましたが、大阪府立大学には学部としての会はなく、今までほぼ学科ごとの同窓会で活動されていました。統合にあたり両大学の同窓会関係者同士で話し合いをした結果、

大阪公立大学においては学部としての同窓会設立には至らず、学科別同窓会を設立することになりました。その中で機械工学科は両大学にあったため合併、電気系の学科も学科再編とともに新たに電気系同窓会を、市大単独であった化学バイオ工学科は新しく同窓会を立ち上げるなど、それぞれで設立されました。また、学科別同窓会間の連絡調整や大阪公立大学校友会との窓口機能として連絡会は設けていて、今後も継続して意見交換をしていく予定です。

神 門 現在の組織や状況を踏まえ、これからの同窓会に期待することやご意見があれば伺いたいと思いますが、いかがでしょう。

徳尾野 私は学生時代剣道部に所属していたので、OBとして後輩の指導や応援などで部に携わってきました。ただ、公立大になって母校愛が薄くなるというか、少し縁遠くなっているような気がします。部活動でも卒業生が人集めや寄付に協力することがありますが、それには母校愛が大事です。母校愛を醸成するような仕組みが必要かと思います。

坂 本 私は現在、ボクシング部でコーチとして指導させてもらっています。市大・府大両方のOBの方が応援してくれていますが、統合したての頃は部員に対して「君は中百舌鳥キャンパスにいるのか、杉本キャンパスか」という問いかけがあつて(笑)。ただ何度か来ていただくうちに、どちらのキャンパスの部員も分け隔てなく応援してもらえるようになりました。



■工学部同窓会の現状

大阪府立大学の同窓会関係者と協議の結果、工学部全体としての同窓会は設立に至らず、学科別の同窓会を設立することになりました。なお、令和7年(2025)2月現在の大阪公立大学工学系同窓会連絡会への所属団体は、以下の通りです。

- 機械工学科同窓会(市・府大合併)
- 電気系同窓会(市・府大合併)
- 中百舌鳥化工会(府大系)
- 鵬会(府大系)
- 鵬朋会(府大系)
- 応化会(府大系)
- 金属・材料・マテリアル工学同窓会(府大系)

- 建築会(市大系)
- 都市会(市大系)
- 化学バイオ工学科同窓会(市大系)
- 機械工学科同窓会(府大)
- 中百舌鳥電気クラブ(府大)
- 工学部同窓会(市大)

■大阪公立大学校友会

大学の統合に伴い、令和4年(2022)に発足しました。基本的に理事会が意思決定し、運営しています。

- 正会員：
卒業生、在学生、教職員
- 役員：
会長1名、会長代行1名、副会長2名、理事20名以内、監事2名

た。学生との交流の場が増えていくことで、後輩に対する思いが育まれるのだなと感じています。

伊與田 以前、研究室の同窓会を企画したことがありますが、その時に卒業生の連絡先がきちんと管理されているといいなと感じました。同窓会に期待したいところです。それからネガティブな話で申し訳ないのですが、大学から学科への交付金はかなり減少しています。機械工学では、実習や実験など、設備が必要な科目が多いので、そのための器具や購入費用でサポートしていただけると大変ありがたいです。特に今は新しいカリキュラムを立ち上げている最中で、関連する技術の進化とともに社会環境の変化も早いので、今後さらに厳しくなりそう

です。他には、同窓生同士がコミュニケーションを取れる方法や仕掛けがあればいいと思っています。今は“同窓”ではなかった両大学の卒業生の思いが混在し、難しさを感じることも多いのですが、これから卒業する学生のために一つになるという認識を持っていないといけません。

柴山 同窓会というのは、私たちにとって最大のネットワークだと思います。どう活用するかは個人によりますが、たとえばビジネスをする中で初めて訪ねてきた人が同窓生だと、「何年卒です」「学部はどこそこで」「あの時はこうでした」と話が弾んで壁が取り払われる。会話の最初の一步としては大変効果的です。大学の統合によって同窓のネットワークが倍に広

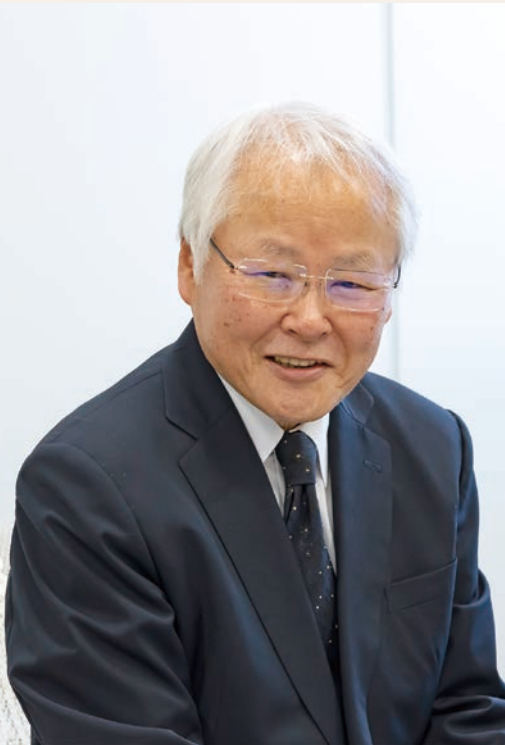


坂本 真宏さん

(機械工学科卒)

大阪公立大学 人工光合成研究センター
特任研究員





吉田 稔さん

(機械工学科卒)

共栄国際特許商標事務所 弁理士
大阪市立大学工学部同窓会 会長
大阪公立大学機械工学科同窓会 会長



がると考えると、ビジネス上大きなメリットになるのではと期待できます。最近では個人情報の取得が難しく、卒業生の居どころなど情報が把握しづらくはなっていますが。

神 門 公立大の校友会の会則を見ても、「大学と会員との連携・交流ならびに会員相互の親睦と交流を図る」、「大学および地域や社会の発展に寄与する」といったことが記されています。同窓会が大学や各学科、学生にできることはいろいろありますが、まだまだ仕組みができていませんね。

柿 本 講演会をさせていただいて、学生と社会人がつながる機会がもっとあるといいのにと感じました。私が学生だった頃、大学が主催する講演会は年数回でした。就職活動では、製薬会社を目指していましたが、振り返ると創薬研究分野に偏って仕事をイメージしていたように思います。いざ入社してみると他にも重要な業務を担っている部署がたくさんあると分かりました。学生がそうした情報を実際に働いている卒業生から得られたら、働くことをもっとリアルにイメージできるのではないのでしょうか。それほど年齢の離れていない卒業生と学生がフランクに話せるような場があったらいいし、実施するには同窓会のような上下のつながりを生かしていけるとと思います。

吉 田 私も以前社会人として特別講義をしたことがあります。終了後に学生との懇談の場を設けて非常に楽しかったし、彼らにとっても良かったのではないかと思います。その影響かどうか分かりま

せんが、中には後に弁理士になった人がいます(笑)。専門的な分野で活躍されている卒業生はたくさんおられます。必須の授業にするのは無理でも、特別講義のような枠を取れたらいいですね。学生と卒業生とのつながりも深まります。

高 山 卒業生の話を聞いてみたと思った時がありました。博士後期課程に進むかどうかとても悩んでいた頃で、結局先生に紹介いただいて研究室の先輩2人に話を聞きに行きました。研究室を選ぶ時や大学院進学を決める時に悩む学生は多いと思います。今のところサークルの先輩や先生に話を聞いたり相談したりするしかないのですが、講演会や気軽に質問できる場があれば助かります。

柿 本 開催方法は、たとえばオンラインセミナーでもいいですね。遠方にいる方も参加できますし。

坂 本 オンラインなら気軽に参加できます。対面もありつつ、オンライン参加者とも交流できればいいのでは。各学科の同窓会で主催すれば、年に複数回卒業生の話を聞けます。他学科の話でも勉強になると思いますし、横のつながりにもなります。

高 山 オンラインなら授業でも使い慣れていますし、質問もしやすいです。リアルタイムなものだけではなく、SNSなども活用できたらいいですね。

課題を解決していくのに必要なこととは

神 門 同窓会への期待、要望をいろいろお聞かせいただきました。しかし実現のために、具体的な

仕組みや手段を考えていかなければいけません。先ほどお話しいただきました、財政的な支援についてはどうでしょう。

吉 田 「工学部同窓会創立50周年」という名目で奨学金制度を掲げた時は、結構寄付が集まりました。まずは支援の目的をはっきりさせることが大事です。目的に共感して喜んで寄付してくれる方はきっとおられるでしょうし、同窓会としてもっと積極的に進めてもいいと思います。学科別の組織でどこまでできるかは分かりませんが、大学の発展や学生のために動くのは、同窓会だからこそですから。

神 門 大きな額なら別ですけど、そこまでもいかなない場合なら希望する学科に直接寄付できるようにした方がいいように思いますね。

徳尾野 日常的な研究費への寄付なら学科別同窓会で声をかけた方がいいでしょう。実験棟を建てるなど大きな額になると、やはり学部としての同窓会が必要になってくるように思います。また新型コロナウイルス感染症のような事態で多くの支援金が必要になることもあり得ますしね。

神 門 会員への呼びかけや連絡手段についてご意見はありますか。

伊與田 教員なので研究室の卒業生とはつながりがありますが、情報の伝達手段について「ライン、メール、郵送でどれを連絡方法にしたいですか」と聞くと、「メール」が多いようです。ラインの場合は通知が過剰にならないようにできれば良さそうです。会報誌な

ど印刷物郵送での通達、コミュニケーション形成は限界があるように感じます。

坂 本 印刷して郵送するのにもコストがかかります。ただ、紙で読みたい人もおられるでしょうから、受け取り方法を複数の中から選べるのがいいと思います。

吉 田 私もどちらかというと、紙派。メールはたくさんあると埋もれてしまって、画面をスクロールしてまで確認しない。個人か会社のアドレスかという問題もあります。大学でいうと教育・研究用のアドレスは使えないですよね。そういう意味では通知は物として手元にきた方がいいという人もいるかもしれないです。

坂 本 ラインも皆が発言できるようになっていると確かに通知はうるさいので、公式アカウントを作って情報を周知するだけのものにすればいいかもしれません。同窓会から数カ月に1回会報誌発行の案内が届くぐらいなら登録しておいてもいいと思われるのではないのでしょうか。

柴 山 しかし、いずれにせよ現役の学生はどの方法でも導けるとして、卒業生の連絡先をどう確保するかですね。

神 門 市大工学部の卒業生は何名いるのですか。

黒 山 現在連絡がつく方だけで、約11,000人です。

神 門 連絡したくても、メールアドレスなどの個人情報がなかなか集まりません。京都大学や大阪大学は、卒業生にメールアドレスを付与しているそうです。市大も以前あったのですがやめてしまっ



神門 登さん

(応用化学科卒)

ハニー化成株式会社 専務取締役 理学博士
大阪市立大学工学部同窓会 副会長
化学バイオ工学科同窓会 会長



黒山 泰弘さん

(土木工学科卒)

大阪市立大学工学部同窓会
理事・事務局長
大阪公立大学校友会事務局兼務

(※) : 「OMU-Net」の概要は、83・84ページの大学提供資料を参照ください。

たので。あの制度があるとだいぶ違います。

伊與田 研究室の同窓会をした時は、卒業生のネットワークで、ご家族含め50人ほど集まりました。リクルーターとして訪ねてきてくれる卒業生など、結局はそういう個人的な付き合いの中から地道に情報を集めていくしかないのかなと思います。定年退職された先生にも頼んでみるとか。

黒山 大阪公立大学に「OMU-Net」というオンラインコミュニティサイトがあるのを皆さんはご存じですか。現在、市大の卒業生の方々は全員仮登録の状態になっています。本登録するにはご自身でアクセスしてもらうことになります。

柿本 それは知りませんでした。登録してもらえれば活用できますね。

黒山 ただ、本登録方法を周知することが難しい。郵送で案内するにもコストがかかります。公

立大の卒業生にははがきを出すなどして「OMU-Net」の周知や連絡先登録をお願いしたいと思いますが、すでに卒業されている方々への連絡方法が悩むところ。 「OMU-Net」はいくつかの項目にチェックすると該当するコミュニティにつながる、非常にいいシステムです(※)。

神門 連絡先の確保については大きな課題で、この先も議論を続けていく必要があります。今回皆さんのご意見を伺って、学科別同窓会でできることや良さを感じ、また一方で工学部全体の同窓会設立の必要性も考えられるように思いました。いずれにせよ、どうすれば大学や卒業生、学生の皆さんにとって役立つ同窓会になるのかを考え、今日のさまざまな示唆に富んだご意見を参考に今後の活動につなげていきたいと思っています。本日は、貴重なお話の数々をありがとうございました。



▲座談会を終えた後の参加者皆さんによる集合写真

大阪公立大学オンラインコミュニティ

OMU-Net

登録して大学や
懐かしい旧友と
つながろう！

OMU-Net は、大阪公立大学、大阪市立大学、大阪府立大学のすべての卒業生・在学生と大学との広範な連携を目的としたオンラインコミュニティサイトです。登録いただくと、以下の機能を利用いただけます。

大学からイベントの
案内やお知らせ
メールが届きます



同級生や
OB・OG の
検索ができます



登録者（同級生 OB・OG 等）にメールや
私書箱機能*でメッセージを送ることが
できます

*サイト内で私書箱を作成すると、メールアドレスを公開していなくても私書箱を通じて、登録者とメッセージのやりとりができます。

- ◆サイト上で公開する項目（住所、電話番号等）はご自身で決めていただくことができます。
- ◆個人情報の公開範囲を設定することができます。登録時は、卒業された大学のみ公開となりますが、マイページで大学別に公開範囲を選択することができます。
（大阪公立大学、大阪市立大学、大阪府立大学のそれぞれ選択できます。）
- ◆登録完了までに1か月ほどお時間をいただきます。ご了承ください。

【問い合わせ先】大阪公立大学 渉外企画課 06-6967-1837 gr-sta-supporter@omu.ac.jp

OMU-Net かんたん登録方法

1. 以下の URL か QR コードから、サイトにログインしてください。

< 新規登録（卒業生用） >

<https://www.omu-community.com/square/entry.phtml>



登録申込フォーム / Application Form for Registration

ご自分のメールアドレスを入力してください。
※共用のメールアドレスはご使用いただけません。
入力されたメールアドレスは、本サイトへログインするときのログインIDに使用されます。

「次へ」ボタンを押すと、ご登録を続けるためのお知らせメールをメールアドレス宛にお送りします。

Please enter your own email address.
* You cannot use a shared email address.
The entered email address is to be used as your login ID for this website.

When you press "Next", a notification email will be sent to your email address so that you can continue the registration process.

メールアドレス
Email address

次へ / Next

2. メールアドレスを入力し、「次へ」を押してください。
入力されたメールアドレスに登録申込用の URL をお送りします。

登録申込フォーム

* は必須入力項目です。
カタカナは全角、英数字は半角で入力をお願いいたします。
外字には対応しておりません。

■ メールアドレス

メールアドレス

* 確認のため、2ヶ所にご記入ください。

※【在学生の方へ】大学が発行しているメールアドレスは登録しないでください。
※このメールアドレスが次回以降のログイン時のID（ユーザー名）となります。
メモするなどご注意ください。

■ 氏名・生年月日

卒業生の方は卒業時の氏名になります。

氏名

正式名 : 公証 太郎 *
カタカナ : コウシツ タロウ * (全角カタナ)
ローマ字 : * (半角英字)

卒業生の方で卒業後にお名前が変わった方は以下もご記入ください。

3. 登録用申込用 URL をクリックし、必要事項を入力してください。

サークル

地域

職域・その他

登録申込 / Apply for Registration

戻る / Go Back

4. 入力内容を確認し、「登録申込」ボタンを押してください。

5. 大学にて内容を確認し、登録完了をメールでお知らせします。

Reference Data

資料編

大阪市立大学 工学部および同窓会のあゆみ

西暦	和暦	月	同窓会関連事項	月	工学部関連事項
1943	昭和18			4	大阪市立都島高等工業学校開校
1945	昭和20			4	大阪市立都島工業専門学校と改称
1949	昭和24			4	大阪市立大学創設 理工学部を北野校舎(北区南扇町・元北野小学校)に設置 小竹無二雄理工学部長就任
1955	昭和30			4	中塚祐一理工学部長就任
1956	昭和31			3	渡瀬譲理工学部長就任
1958	昭和33				理工学部教養課程を杉本学舎に移転
1959	昭和34			4	理工学部を廃止、理学部・工学部を設置(工学部は扇町校舎) 応用物理工学科、応用化学工学科、機械工学科、電気工学科、建築学科、土木工学科設置 古市亮蔵工学部長就任
1960	昭和35	11	設立総会にて工学部同窓会発足 正会員(理工学部工科系コースと工学部卒業生・工学研究科修了生)、準会員(工学部、工学研究科在学生)、特別会員(工学部の現・旧教員)による工学部同窓会が発足。初代会長 柏田幸男。終身会費1,000円		
1961	昭和36	3	工学部同窓会会員名簿第1号発行(正会員約800名収録)	4	井本稔工学部長就任
1964	昭和39	2	第2回総会にて旧制都島高専同窓生を正会員に統合。終身会費を1,500円に改定	8	工学部新学舎1期工事完成。電気工学科、応用化学科、応用物理工学科が杉本地区に移転
1965	昭和40			4	浅野清工学部長就任
1966	昭和41		旧制都島高専卒業生を含む正会員約2450名収録の会員名簿第2号発行	8	工学部新学舎2期工事完成。機械工学科、建築学科、土木工学科が杉本地区に移転
1967	昭和42			4	平井平八郎工学部長就任
1968	昭和43				学園紛争が工学部にも波及
1969	昭和44		(学園紛争の影響で同窓会活動休止)	4	東野一郎工学部長事務取扱任命
				6	工学部教授団「工学部改革に関する提案」発表
				10	永井荘七郎工学部長事務取扱任命
1971	昭和46			3	工学研究科学位審査問題起こる

西暦	和暦	月	同窓会関連事項	月	工学部関連事項
1972	昭和47			7	三輪雅久工学部長事務取扱任命
1973	昭和48		(学園紛争の影響で 同窓会活動休止)	2	三瀬貞工学部長事務取扱任命
1974	昭和49			3 8	藤井太一工学部長事務取扱任命 兼松太工学部長事務取扱任命
1975	昭和50		大学紛争のため休止状態だった同窓会活動が再開。ほぼ10年振りの会員名簿第3号(正会員約4450名収録)を発行		
1976	昭和51			3	兼松太工学部長就任
1977	昭和52		第3回総会を田中記念館で開催。評議員会の隔年開催、終身会費20,000円への改定を決定	4	三輪雅久工学部長就任
1979	昭和54		第1回評議員会を田中記念館にて開催。同窓会だよりの年1回全会員への無料配布、終身会費の大幅改定に伴う臨時協力金の正会員への要請、機械工学科図書室での間借り事務局の開設、大阪市立大学創立100周年記念募金への協力等を決定。4年毎の会員名簿第4号を発行		
1980	昭和55	10	同窓会だより第1号発行。以後、原則年1回11~12月に発行され、第39号まで続く	11	大阪市立大学創立100周年記念祝典
1981	昭和56	2	第2回評議員会を田中記念館にて開催	4	三瀬貞工学部長就任
1983	昭和58		工学部創立40周年記念事業委員会発足		大阪市立大学創立100周年記念事業の一つの大阪市立大文化交流センターが大阪駅前第3ビル(現在は第2ビル6階)に開設される
1984	昭和59			4 11	安藤慶一工学部長就任 工学部創立40周年記念式典・祝賀会
1985	昭和60	2	第4回評議員会開催。評議員を2名/学級に改定。翌年5月の第59回市大ボート祭から協賛アドバルーン掲揚への協力開始		
1987	昭和62	2	第5回評議員会を文化交流センターで開催。工学部創立40周年記念事業の一環として工学部A棟2階に増築される工学部学術情報交流センターへの事務局移転を決定		
1988	昭和63			4	川村純夫工学部長就任
1989	平成1				「大阪市立大学基本計画」(20年先を展望)を策定

西暦	和暦	月	同窓会関連事項	月	工学部関連事項
1990	平成2				6学科を8学科に再編
1991	平成3	2	第7回評議員会・同窓懇親パーティーを新阪急ビルスカイルームにて開催。 以後、新阪急ビルスカイルームは、2005年までの8回の評議員会・懇親パーティーの学外会場として利用される		
1992	平成4			4	木下雅悦工学部長就任
1994	平成6			4	多胡進工学部長就任 「大阪市立大学基本計画(改訂版)」を策定
1997	平成9	11	杉本キャンパスで講演会と同窓懇親会を開催		
1998	平成10	11	杉本キャンパスで講演会と同窓懇親会を開催	4	西村仁工学部長就任
1999	平成11	2	評議員会にて、終身会費を30,000円に改定		8学科を10学科に再編
2000	平成12			4	福田武人工学部長就任 「第三次大阪市立大学基本計画」を策定
2001	平成13				大学院重点化政策で大学院大学となる「大学改革検討会議」を設置 「新行財政改革計画(大阪市)」を発表
2002	平成14			4	山田文一郎工学部長就任 大阪市立大学「大学改革検討会議」中間報告 「新しい『国立大学法人』像について」を発表
2004	平成16			4	東恒雄工学部長就任
2005	平成17		同窓会ホームページの構築・運用開始 文化交流センター談話室人件費の会員利用率による分担始まる		
2006	平成18	2	学術情報センターで開催の第17回評議員会で、大学院工学研究科前期博士課程修了生の後期博士課程進学を支援するための修学援助金の支給制度を決定		

西暦	和暦	月	同窓会関連事項	月	工学部関連事項
2007	平成19			4	濱裕光工学部長就任
2009	平成21	2	大阪弥生会館で開催の第20回評議員会で、工学部同窓会設立50周年(2010年11月)の記念事業として、工学部同窓会奨学金制度の創設・会員間の世代を超えた交流を図るITインフラの構築および記念募金の実施等を決定。12月発行の同窓会だより第25号で募金への協力を要請	4	大嶋寛工学部長就任 10学科を6学科に再編 工学研究科研究戦略会議の設置(「研究推進戦略室(仮称)」をA棟2Fに開設)
2011	平成23	2	学術情報センターで第22回評議員会を開催。閉会后、西澤学長・大嶋工学研究科長兼工学部長・福岡有恒会副会長等の列席の下で当同窓会設立50周年記念式典と記念講演会を実施 第1学生ホール(旧教養食堂)にて、理学部同窓会長と有恒会27支部長等ご列席のもと、設立50周年記念祝賀会を開催 学生会員工場見学会(第1回は堺臨海コンビナートの日立造船・三井化学)を開始		
2012	平成24	2	第2回学生会員工場見学会を(株)ダイヘン六甲事業所にて実施	4	日野泰雄工学部長就任 工学部のあり方検討会 工学部組織見直しについての答申(案)(将来構想委員会) 分野から領域への組織改編
2013	平成25	2	第24回評議員会を学術情報総合センターで開催し、4月に阪急グランドビルの白楽天にて「同窓懇親パーティー2013」を開催。文部科学省の教科書検定で個人初合格の工業高校生用教科書「電気基礎」を著作した学生会員(山本明君)を会長特別表彰		
		2	第3回学生会員工場見学会をヤンマー(株)尼崎工場にて実施		
2014	平成26	2	第4回学生会員工場見学会を大阪ガス(株)泉北製造所にて実施		
		11	ホームミングデーで工学部と同窓会が共催の「工学部新任・若手教授による講演会(私の研究が目指すもの)」を開始		
2015	平成27	2	第26回評議員会と工学部同窓会の集い「同窓懇親パーティー2015」を大阪弥生会館で開催		若手教員による工学研究科将来構想検討会設置
		2	第5回学生会員工場見学会を塩野義製薬(株)摂津工場にて実施		

西暦	和暦	月	同窓会関連事項	月	工学部関連事項
2016	平成28	2	第27回評議員会と第11回キャンパス交流会を学術情報センターにて開催。大阪市立大学複合先端機構 中尾正喜特命教授より”サーマルグリッド技術の開発と実証”のご講演、大嶋寛副学長より”大阪市立大学の近況について”のお話を頂いた。その後、懇親会を第1学生ホール(旧教養食堂)で開催	4	佐藤嘉洋工学部長就任
		2	第6回学生会員工場見学会を「大阪市消防局」および隣接の「西消防署」にて実施		
		5	同窓会ホームページを会員相互の親睦と連絡を促進するための双方向機能を備えたWebに全面リニューアル		
		6	工学部同窓会メールマガジンを創刊		
2017	平成29	2	第28回評議員会と工学部同窓会の集い「同窓懇親パーティー2017」を中央区安土町「ヴィアーレ大阪」にて開催	10	長崎健工学部長代行就任
		2	第7回学生会員工場見学会をダイハツ工業(株) 本社・池田工場にて実施		
2018	平成30	2	第29回評議員会と第12回キャンパス交流会を学術情報センターにて開催。黒山泰弘氏より「大阪の橋」についての講演を頂く。その後、懇親会を第1学生ホール(旧教養食堂)で開催	4	長崎健工学部長就任
		2	第8回学生会員工場見学会を大阪市海老江下水処理場にて実施		
2019	平成31	2	第30回評議員会と工学部同窓会の集い「同窓懇親パーティー2019」を中央区安土町「ヴィアーレ大阪」にて開催		
		2	第9回学生会員工場見学会を①ヤンマー(株) 特機エンジン統括部尼崎工場(尼崎市)、②ヤンマーエネルギーシステム(株) 集中監視センター(梅田ゲートタワー)、③ヤンマー(株) 本社ビル(大阪市北区茶屋町)にて実施		
		9	第10回学生会員工場見学会を「シャープミュージアム(シャープ総合開発センター内)」にて実施		
2020	令和2	2	第31回評議員会とキャンパス交流会を学術情報センターで開催。荒川学長によるご講演「市大創立140年を迎えて～これからの大学の在り方～」を頂く。その後、懇親会を第1学生ホール(旧教養食堂)で開催	11	大阪市立大学創立140周年
		5	COVID-19感染拡大により経済的に困窮する工学部学生支援のため、全学の支援策「緊急支援給付金制度」に応じて5月25日付で「夢基金」に500万円、8月に工学部・工学研究科へ300万円、その後、現・元工学部教員や卒業生による10月時点での寄付金600万円をそれぞれ寄付		

西暦	和暦	月	同窓会関連事項	月	工学部関連事項
2021	令和3	2	COVID-19の感染拡大を受け、実開催とせず書面評決により第32回評議員会を開催。恒例の工学部同窓会の集い「同窓懇親パーティー」は中止 大阪公立大学開学を控え、同窓会の在り方が検討され始め、大阪公立大学開学後は、工学系の新たな学科別同窓会を発足させるとの方針が固まる		
2022	令和4	2	COVID-19の感染拡大が続くことから、実開催を断念し、オンラインと書面評決を併用して第33回評議員会を開催。恒例の工学部同窓会の集い「同窓懇親パーティー」は前年に引き続き中止	4	大阪市立大学と大阪府立大学が統合した大阪公立大学が開学 綿野哲工学部長就任
2023	令和5	2	COVID-19の終息が見通せないことから実開催とせず、オンラインと書面評決を併用して第34回評議員会を開催。2022年度に設立された大阪公立大学工学部の機械工学科同窓会、化学バイオ工学科同窓会、電気系学科同窓会を現工学部同窓会の目的を承継する団体と認定。これにより、従前から活動を継続する建築会、都市会と併せ、同窓会の全ての会員がいずれかの学科別同窓会の会員となる。恒例の工学部同窓会の集い「同窓懇親パーティー」は前年に引き続き中止		
2024	令和6	2	第35回評議員会を工学部G棟中講義室で開催。当同窓会の2025年3月末解散が決せられる。数年ぶりの懇親会を学術情報センター内、野の花ハウスで開催		
2025	令和7	3 6	同窓会解散。残務は役員会を中心とする「残務処理委員会」に委ねられる 同窓会だより第39号を最終号として発行	3	最後の市大工学部生が卒業



大阪市立大学工学部同窓会 歴代会長

氏 名	期 間	学 科	卒業年
柏田 幸男	1960年 - 1963年	機械工学科	昭和28年卒
河合 和三郎	1964年 - 1974年	応用化学科	昭和28年卒
並河 俊次	1974年 - 1980年	電気工学科	昭和30年卒
井田 憲治	1981年 - 1984年	土木工学科	昭和30年卒
足立 幸一	1985年 - 1988年	建築学科	昭和29年卒
繁沢 孝	1989年 - 1992年	応用物理学科	昭和32年卒
下田 隆二	1993年 - 1996年	機械工学科	昭和29年卒
廣岡 孝一	1997年 - 2000年	応用化学科	昭和29年卒
行藤 三男	2001年 - 2002年	電気工学科	昭和36年卒
湊 勝比古	2003年 - 2004年	土木工学科	昭和41年卒
貴志 義昭	2005年 - 2006年	建築学科	昭和41年卒
田守 芳勝	2007年 - 2010年	応用物理学科	昭和38年卒
宮本 万功	2011年 - 2012年	機械工学科	昭和43年卒
木村 雅之	2013年 - 2014年	電気工学科	昭和51年卒
西口 克彦	2015年 - 2016年	応用化学科	昭和43年卒
黒山 泰弘	2017年 - 2018年	土木工学科	昭和50年卒
宇野 勝久	2019年 - 2020年	建築学科	昭和49年卒
斉藤 寿士	2021年 - 2022年	応用物理学科	昭和44年卒
吉田 稔	2023年 -	機械工学科	昭和52年卒



編集後記

大阪市立大学工学部同窓会の「同窓会だより」は本号で最終号となりました。吉田会長のご挨拶で触れてっていますが、60余年の当同窓会の歴史が閉じられることになったことに伴い、第39号を記念誌的な最終号とするべく企画されたものです。辰巳砂学長をはじめ寄稿いただいた皆様に感謝いたします。

今後は大阪公立大学の学科別同窓会(機械工学科同窓会、大阪公立大学電気クラブ、化学バイオ工学科同窓会、建築会、都市会)が市大工学部同窓会での伝統を引き継ぎ、それぞれ独自の活動を実施されるものと思いますが、大学ならびに工学部の発展につなげていただくことを心から祈念します。なお、本号は同窓会役員に加えてお二人の元教授に参画いただいた以下のメンバーで編集作業にあたったことを申し添えます。

大阪市立大学工学部同窓会事務局
黒山 泰弘(昭和50年土木工学科卒)

編集委員名簿(順不同敬称略)

氏 名	卒業年次等	氏 名	卒業年次等
南 繁行	昭和45年 電気工学科卒	吉田 稔	会 長 昭和52年 機械工学科卒
大嶋 寛	昭和49年 応用化学科卒	斉藤 寿士	副会長 昭和44年 応用物理学科卒
宇野 勝久	副会長 昭和49年 建築学科卒	岩橋 正義	副会長 昭和47年 電気工学科卒
日野 泰雄	副会長 昭和50年 土木工学科卒	神門 登	副会長 昭和45年 応用化学科卒





大阪市立大学 工学部同窓会